

星辰都市論

——東京造形大学キャンパスの小宇宙

目次

序章	大地に投影された理想世界としての星辰都市……………	3
第一章	東京造形大学の小宇宙―谷に棲み尾根を歩む……………	11
第二章	身体―小宇宙としての身体都市……………	27
第三章	平野―神がコンパスで描いた都市……………	41
第四章	台地―七つの台地で造られた都市……………	55
第五章	海川―アーキペラゴの海洋都市……………	69
第六章	山岳―宇宙軸が貫く山岳都市……………	85
第七章	曼陀羅―インドのヒンズー教の宗教都市……………	101
第八章	星辰都市論―「形像の歴史」から「観念の歴史」へ……………	115

序章 大地に投影された理想世界としての星辰都市

都市について語るといことは、なんと面映ゆいことなのであろうか。これまで幾多の碩学の諸氏が都市について、その魅力を語り尽くしてきたはずではなかったのか。私も『都市表象論』（別冊2）および『時間の中の都市』（別冊9）において、都市に対する考え方を述べてきた。新たな視座から都市の別の姿の可能性を模索したものである。しかしそこで語られてきた都市とは権力の表象であり、その権力者たちの演じた歴史の舞台であり、そこに暮らす人々の生活の場そのものでもあった。

あるいは「どこにもない都市」として、様々なユートピア文学のなかでも都市は記述されてきた。それは観念のなかにのみ存在する理想としての都市の姿である。ユートピア都市は人々が辿り着くことができないという前提のもとに成立している概念である。そのためユートピア都市とは、既存の都市に対する批判の意味が込められている。すなわちユートピア都市とは、現実の都市の裏返しに過ぎないとも言えるのではないだろうか。しかし都市の本来の姿を語るためには、それ以外に方法がないのであろうか。なぜならば都市が持っている空間の魅力が、これまでの都市の歴史的記述では十分に表現されてきてはいなかったと感じていたからである。

1. 時間の歴史から大地の都市の歴史へ

本書を構想した契機はフェルナン・ブローデルの『地中海』（藤原書店）と出会ったことに遡る。この本はまだ世界の中心が地中海にあつた16世紀という時代に、ヨーロッパに君臨したスペインのフェリペⅡ世（在位一五五六～一五九八）をとおして、ヨーロッパのルネサンスの歴史をブローデルが語ったものである。本書が特に参照したのは、その特徴的な「第一部 環境の役割」の部分である。そこでは人間と、その人間を取り囲む環境との関係として、歴史が解釈されていた。すなわち「第一章 諸半島―山地、高原、平野」では地中海が山地で囲まれている事実を確認するところからブローデルの歴史の記述は始まる。そして高原や台地や丘陵、次に平野や島など、人々の生活の営みの舞台としての地形を基軸として、地中海の歴史を記述し直していることが特徴的である。そこにはもう一つの歴史の世界を読み取ることができたのである。

これは私にとって眼から鱗であつた。基本的に歴史は時間の概念であるということ自体を疑ったことがなかったからである。確かに歴史とは王や宗教などの権力者が、自ら支配した国について時系列に語ったものであるということとは当然であると考えられてきた。

しかしブローデルは、最初に時間ではなく、空間として歴史を語るのだと断じているのである。これは今までに出会ったことがない歴史的視点であつた。ではなぜブローデルは空間として歴史を語ろうとしたのであろうか。その理由はこれまでの時系列の歴史的記述では、歴史という総体を語り尽くせなかったからなのではないだろうか。ブローデルはこうして既往の歴史の記述に対する隔靴搔痒ともいえる残悶を晴らしてくれたのだ。そればかりでなく新しい都市の記述の可能性さえも我々に示唆してくれたのである。

ところでこの地勢と人間の営みとの関係について語ったのはブローデルばかりではなかった。日本では柳田國男が「風景の成長」という文章のなかで興味深いことを指摘している。すなわち「我々が風景と名づくるものには必

ず人間交渉を条件としている。」と述べている。(柳田國男全集2『豆の葉と太陽』ちくま学芸文庫) 柳田の風景論もまた画期的であった。その理由は、人間と自然を対峙させなかったことにある。すなわち人々の生活の営みの証である人為的に生まれた風景を、自然風景と対等に取り扱って総論として風景を論じているからなのである。人間は自然の一部であり、人類をも包括するものとして自然が風景を作り上げていくと、柳田は考えていた。西洋文明では、常に自然は人間生活を脅かし都市と対峙する存在として、あるいは支配すべき対象、さらに無秩序の存在として位置付けられてきた。そのことを考えると、柳田における自然は、風景論というかたちながら、全く異なった自然観に基づいていることが理解できる。

柳田の風景論はしかし単なる風景論に留まらなかった。農業や林業ばかりでなく都市に至るまで、人間の生活の営みの過程から生み出されたものとして風景を解釈し直したのだ。そうすることにより、逆に自然風景というものを、社会的な実質を引き出せる対象へとあらためて位置付けてしまったのである。たしかに原生林を例外として、人の手が入っていない本来の自然など、もはや存在していない。自然は常に都市と対峙され、歴史の記述から除外されてきた。しかし柳田はその矛盾をついてきたのである。これもまた私にとっては眼から鱗であった。

最近ではさらに興味深い論考が提示された。中沢新一は台地と谷の地勢から、都市文化を語ったのである。彼は独自の手法で鮮やかに東京を分析してみせてくれた。彼はこれまで純粹な自然として彼岸に対峙させてきた地勢を、都市文化と結びつけることにより、新たな東京という都市の姿を浮き彫りにしてくれたのである。彼は東京という都市空間を、台地と谷に塗り分けた「縄文地図」という新たな手法を用いて、これまでにはない独創的な視点から都市空間の構造の本質を露呈させてくれた。(中沢新一『アースダイバー』講談社)

近代地図では、現在の東京は平坦な都市として記号化され表現されている。しかし実際の東京という都市空間は、起伏に富んだ地勢から成り立っている。東京を歩いてみると、至るところに坂があることでも分かる。そこで中沢

は縄文時代に、まだ水位が10メートルほど高かったことを指摘して、当時も陸地であった地盤が堅固な洪積層と、縄文時代に海底であった沖積層の二色により東京を塗り分けてしまったのだ。そうすることにより現在の東京にある神社仏閣、政府の機関そして大学など全て、縄文時代には陸地であった地盤のよい台地である洪積層の上に建立されていたことが一目瞭然となったのである。反対に沖積層である地盤の悪い湿地帯であった谷の地域とは、渋谷や歌舞伎町のような歓楽街となっていたのであった。そこは縄文時代にはまさに海の底であったのだ。これほど鮮やかに東京という都市空間の構造が語られたことはこれまでにはなかった。

2. 大地の都市から精神の都市へ

このように考えてみると、ブローデルが地勢を背景に歴史を語ろうとしたのは、じつは苦肉の策であったのではないだろうかと思われた。なぜならば16世紀という時代は、歴史的展開が遅々として進まない時代であったからである。すなわち時系列だけによる歴史的記述ができなかったからである。そこで彼は地中海を取り囲む多様な地勢に着目したというわけだ。

そうであるならば、敢えて地勢だけから都市の特性を語れないだろうか、無謀なことを考えた。それが本書の第一の契機であった。そうすると既往の都市の記述に対してこれまで鬱積していた様々な不満が、それに触発されたかのように次々と噴出してきたのだ。たとえば、これまでの都市は歴史の添え物のように扱われてきた。もちろん都市史という専門の領野がないわけではない。しかしそこでも中世から近代へと至る時系列的に倣って、権力者の活躍した歴史の舞台として添え物のように都市が描かれるのが常であった。

既往の都市史への満たされない思いとしてさらに指摘できることは、都市史とはあくまで西洋都市史でしかなかったということである。その都市の歴史には残念ながら日本を含めてアジアやアフリカあるいはイスラムや南米

の都市が対等と同じテーブルで語られることはなかった。語られても西洋の都市の歴史を基準として位置付けられ、解釈され、説明されるのが常であった。たとえば法政大学教授陣内秀信は、彼が留学していたイタリアのヴェネツィアの街の運河の都市空間を、帰国後東京に読み換えて、江戸時代に構築された運河の都市空間から現在の東京という都市を語ってくれている。

さらにもう一つの不満をあげることが許されるならば、その都市自体に託された理想社会を実現しようとする人々の熱い思いが、歴史の記述では表現されてこなかったことである。これはブローデルも全く語っていないことである。それは、どのようにしたら都市自体に歴史の主体性を与えることができるのであろうか、という不満へと繋がっていく。純粹に空間として都市の歴史を語ろうとしないならば、本来の都市の姿からさらに遠のいてしまうであろう。もつと都市自体に真正面から立ち向かわねばならない。

都市とは人為的な構築物である。自然発生的な集落や村落とは異なり、計画的に構想され築造されたものである。そうであるならば、人々が悪い都市をわざわざ造ろうとすることは有り得ないのではないだろうか。どの都市にも、より良き社会を実現しようとする設計者の熱い思いが託されているはずなのだ。たとえば不完全であったとしても、ユートピアとしての理想が全く託されていない都市などというものは存在するはずがないのである。都市の喧騒のなかに紛れて、目には見えないかもしれないが、都市に託された熱い思いとしての世界観は、現在のどの都市にも必ず潜在しているはずなのだ。この都市に託された世界観を、どのようにしたら歴史のなかに反映させ、体系的に記述できるのであろうか。

理想としての都市の世界観はどのように構想されたのであろうか。たとえばユートピア文学に描き出された理想の都市とは、結果として神々の世界の投影、あるいは憧憬として、地上に、それも未開の離島や山奥の辺境の地に構想されたようである。一般的に神は地下ではなく天上にいる。それは西洋では死後に訪れるキリスト教の天国の

イメージとなった。地上の都市とは多かれ少なかれユートピア都市として、達成されていない未完の天上の世界の投影として構築されていたのだ。それはアジアでも同様である。神々が棲む天上の理想としての完璧な世界というものがある。それが大地に投影されたものがユートピア都市であると解釈できるであろう。

天上の世界のイメージは、古今東西の国や地域や民族の文化や宗教に依りて、まさに多様なものとして顕現する。こうした理想世界を目指して、人間が神に代わって地上に構築しようとした空間こそ都市であるといえないであらうか。しかしその理想世界が投影される大地の地勢もまた多様である。多様な世界観が多様な地勢のうえに投影された結果、過去から現代にわたり、ヨーロッパから中東やアジアそしてアメリカにおいて独特な空間を持つ様々な都市が、設計者の熱い思いが託されたものとして造られた。西洋では修道士が占星術や黄道十二宮とコペルニクスの世界観を融合させ、それを都市と結び付けている。インドでは曼陀羅という世界観にヒンズー教の神々が、地上の都市を守護してほしいと願う人々の篤い思いに応えるかのように、日常生活から都市空間に至るまで統合された世界観として都市が構築された。

3. 精神の都市から星辰の都市へ

このようにユートピアとしての天上の理想の世界観が、現実の大地の地勢の上に投影されたものとして、都市は設計されたと解釈することができるのではないだろうか。都市という一見茫漠たるものを、このような視座を基にして、地勢から都市を改めて語り直してみようと試みた。その結果として、まず時間という桎梏から都市の歴史を解放させ、さらに既往の西欧を基軸とした都市論を客体化させて、そこから脱却できたのではないかと思われた。それは結果として都市を設計した人々の意志の表現として、都市の歴史を人間へと奪還することを意味する。

ブローデルは環境と歴史という新しい視座を提示して語ってくれた。そこで本書ではまずブローデルにならい、

地勢により都市を分類することを試みた。すなわち「平野」「台地」「海川」「山岳」である。多くの都市の資料を収集し、地勢に応じて分類整理しながら共通する都市の特性を検証してみた。ところが結果として地勢の分類だけではどうしても馴染まない都市の事例が多数でてきてしまったのである。ブローデルの考え方をそのまま援用しても、地勢だけでは全ての都市の本質を語り尽くすことができないことが判ってきた。

純粹な世界観としての都市を語る場合には、具象的な地勢だけに依拠する手法には限界があることが判ってきた。結果として「身体」「曼陀羅」という観念的なものを追加し補完することにより、全ての都市を対象とすることが可能となった。すなわち都市を設計した人々の熱い思いは地勢だけの分類では汲み上げることができなかったのだ。こうして四つの地勢と二つの追加した概念により全ての都市は網羅された。しかしここで全ての都市を包摂するような上位の概念が必要となった。それは都市に託された理想を追求し、設計した人々に内在された観念ではないだろうかと思いついた。そこで援用したのがアーサー・O・ラヴジョイの『観念の歴史』（名古屋大学出版会）である。一見散漫に見える六つのカテゴリーを貫くような、つまり空間や時代を越えて、ラヴジョイが提唱するような全ての都市に共通する観念とはいったい何なのであろうか。地勢から検証し直してきた世界の様々な都市、そしてユートピアとしての都市を貫いているものとして辿り着いた観念とは、天上のイメージであった。

理想の都市は天上の神々の世界である。神話や宗教や精神世界が求めてイメージした神の世界こそ都市を設計した人々が追求した究極の世界の姿であるはずなのだ。天上の理想の神の世界を観念化したものとして星辰世界という抽象的な観念が、現世である地上へと投影されたものが都市なのではないかという仮説を立ててみた。その観念を本論の骨格として改めて設定し、もう一度都市を解釈し直し、新たに観念の歴史として都市論を再構築してみた。こうして導き出された、時間や空間すらも超越した都市に託されたこの観念を、本書では「星辰都市」と呼びたいと思う。

第一章 東京造形大学の小宇宙

——谷に棲み尾根を歩む——

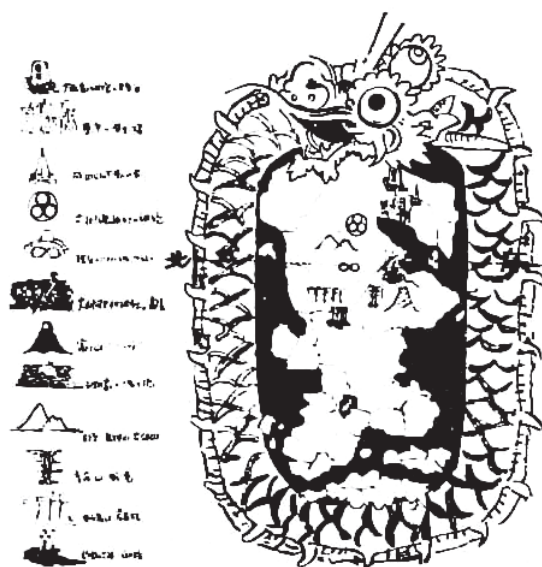


図1-1 毛綱毅曠の小宇宙図

建築家である毛綱毅曠が一九八六年に東京造形大学の相原キャンパスの設計競技に応募した計画案には、設計図に添えて興味深い図像が一つ描き込まれていた。それは龍が円環をなし大地を取り囲むというものである。毛綱は設計競技に参加した印象を「小山イコール小宇宙という敷地条件が非常に魅力的だった」と後日述べている。その図像では、海に囲まれた島国に、富士山や日光の男体山などが小宇宙を成すように描き込まれている。それを取り巻くのは、自らの尾をくわえながら世界を統合している龍の姿である。

当時の一般の大学の新キャンパス計画では、広大かつ平坦な敷地が当然のごとく求められていた。そのなかで東京造形大学の新キャンパスの敷地は、尾根に挟まれた起伏の豊かな地勢を持っていた。この谷と尾根が織り成す自然に抱かれた敷地に建築家は魅了された。時代は、尾根を削り谷を埋めて平坦に造成する従来の考え方が、転換期を迎えていた。日本で自然の地勢を生かした最初の設計の事例とは、この一九九一年に開校した現在の東京造形大学の相原の新キャンパスであったのだ。そこには縄文時代からの日本の生活空間の構造、すなわち「谷に棲み尾根を歩む」空間を読み取ることができる。

1. 東京造形大学相原キャンパス

東京造形大学は一九六六年に、八王子城趾に開校した。浦辺静太郎が設計した本館で学ぶ学生は当初は四八〇人に過ぎなかった。その後学生数が一三〇〇人に増大した。いつぼうでコンピューターや情報とデザインの融合を目指した新専攻を設ける計画が浮上した。そのためには当時のキャンパスでは手狭であった。しかし増築しようにも不可能な事情があつた。すなわちキャンパスの敷地は国指定の史跡の一部であつたのだ。以上のような理由から新キャンパス移転計画が浮上した。それは一九八四年五月のことであつた。

こうして現在のキャンパスである八王子市と町田市の境界に位置する約10ヘクタールの敷地が購入された。それは尾根が幾重にも織り成す丘陵地帯であつた。そして敷地中央を八王子ニュータウンへと続く計画道路が東西に横切つていた。この計画道路は当時10年後には開通し多摩モノレールも開通する予定とされていた。しかしバブル経済は破綻して、現在もなお計画道路予定地は彫刻の仮設作業テントと芝生の広場として空地のままだ。二〇一六年になつて東京都交通審議会が、モノレールあるいは次世代型路面電車の検討を答申した。さらに隣の相模原市には名古屋へ直通のリニア新幹線の駅が建設される予定である。東京都心とは6分で結ばれる計画だ。〔図1-2〕

設計競技では当時のインダストリアルデザイナーであつた豊口協学長が、設計競技に参加する建築家たちの選定にあたつた。結果として大手建設会社設計部や

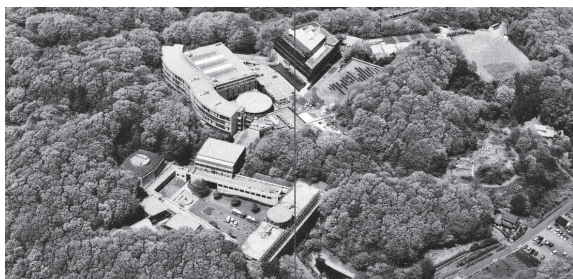


図1-2 東京造形大学のキャンパス
尾根の縁に囲まれた東京造形大学キャンパス。現在では新たに大学院棟と絵画棟が建設されている。

組織設計事務所は対象から外された。その理由は「美術・デザインの専門大学であることを踏まえ、個人事務所に絞った。造形を通して人間と空間の触れ合いを大切にできるキャンパスが欲しい。そのためには設計者個人の人の人柄、考え方がうかがえるコンペにした。」と豊口学長は述べている。

選ばれた五名の建築家たちは、磯崎新（磯崎新アトリエ）、阪田誠造（坂倉建築研究所）、高橋誠一（第一工房）、毛綱毅曠（毛綱毅曠建築事務所）、山下和正（山下和正建築研究所）であった。いずれも「油ののつている40から50代、日本建築学会賞受賞者、キャンパス計画の経験者」として当時活躍していた代表的な建築家たちであった。

審査委員には日本建築学会会長の東京大学教授芦原義信と同副会長の日本大学教授近江栄が選出された。さらに建築界の良心といわれる東京大学教授槇文彦が加わった。この審査委員の顔触れをみて、指名をうけた建築家たちばかりでなく建築界も歓迎した。なぜならば提案した設計案を内容までしっかりと理解できる建築家たちであったからである。さらに公平な審査が期待できると確信したからでもある。この直前におこなわれた東京都庁の設計競技では、最初から丹下健三が本命視され、磯崎新は対象外となった経緯があったばかりである。

2. 小宇宙としての造形大学キャンパス

設計競技の審査では「どの設計案も期待していた以上の力作ぞろいの、希にみ

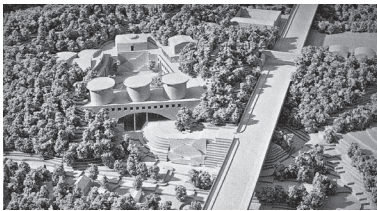


図1-4 磯崎新の設計競技応募案模型2

現在の管理棟の大きなアーチは提案通り造られた。しかし円筒形の研究室は中廊下形式に変更されたが、その円筒形の空間は、ガラス張りのラウンジとして残された。

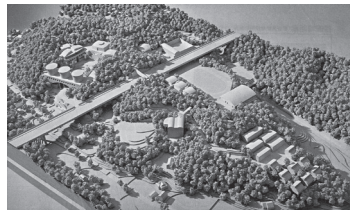


図1-3 磯崎新の設計競技応募案模型1

尾根と谷の地形を生かしたまま、そこへ建築を配置している。実施設計ではデザイン棟を中心に大きく変更が加えられた。

るコンペであった。しかしその中でも磯崎案は抜群であった。模型の梱包を開いた途端、審査員全員が「これだな」という感触を持ったと思う」と審査員の一人である近江栄教授は語った〔図1-3、4、5〕

もちろん審査では応募者の名前は伏せられている。しかし審査員たちは名にしよう目利きぞろいであるとともに、応募者も個性あふれた設計者ばかりである。

模型や図面を見れば、どれがどの建築家の応募作品かは一目瞭然であったことであろう。こうして磯崎新の設計応募案が選出された。（『日経アーキテクチャー』

一九八六年一〇月二〇日号）〔図1-6、7、8、9、10〕

実施設計へと駒をすすめた磯崎新の応募案の最大の特徴は、起伏が豊かで緑の生い茂る敷地の空間をそのまま生かしたことである。すなわちほかの建築家たちの提案では、谷を埋める造成を、前提としていたのである。設計競技では、他の応募者がおこなうことと同じことをしては勝てない。磯崎新は決定的な判断をおこない勝負に出たといえるであろう。

磯崎新は造形大学の敷地に日本の伝統的な生活空間の構造を援用した。すなわち「谷に棲み尾根を歩む」である。尾根線は道筋として残され、建物は沢沿いに見え隠れするように分散配置された。これは桂離宮のような回遊式庭園にも通じる、日本の伝統的な修景手法である。

しかし現在のキャンパスでは谷を人も車も通っている。当初計画された尾根道は、結果として実現されなかった。しかし開校当初、学生たちは谷を歩かずに、



図1-7 高橋統一（第一工房）の設計競技応募案模型
道路を跨ぐプロムナードを軸に全体が構成されている。

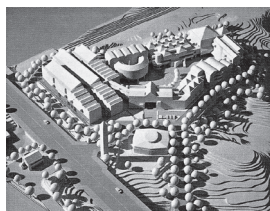


図1-6 山下和正（山下和正建築研究所）の設計競技応募案模型
教室などを1カ所に集積させた合理的な配置計画となっている。

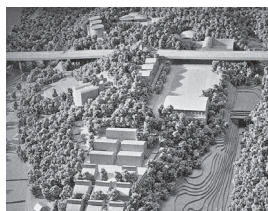


図1-5 磯崎新の設計競技応募案模型3
絵画と彫刻のアトリエは、北側採光のカマボコ型の校舎として敷地奥に建設された。その後、絵画棟は当時のグラウンドに新設され、グラウンドは奥へ移された。

勝手に近道の尾根を歩いて移動していたため、各所に獣道ができていたことを思い出す。その後大学により柵が設けられて獣道は塞がれた。[図1-11、12]

しかし尾根の回遊路は、一部ではあるが実現されている。それは現在の1号館から4号館の2階と3階のレベルに作り込まれている。中庭を回遊できる廊下である。現在は新設された大学院棟を経て7号館や8号館へとこの回廊は延長されている。結果として、人工的な尾根道ながら、磯崎新が提案した「谷に棲み尾根を歩む」という伝統的な日本の生活空間が現在のキャンパスには実現されているといえるであろう。

3. 東京に潜む縄文の宇宙

東京造形大学のキャンパスの教室では、全階接地している。勾配のある地勢にキュービックな校舎が、独立して分散配置されている。このため、どの階も大地と直結した廊下や階段が認められる。さらに廊下は外部に開放されており、雨や風が教室の入口近くまで入り込むように仕組まれている。だから台風がくると、建物の廊下を雨風が吹き抜けて、落ち葉が舞い散るような事態となる。もちろん雨の日に図書館へ行くときには傘が必要だ。

東京造形大学のキャンパスのような谷と台地の織り成す地勢は東京に特徴的だ。しかし東京の都市空間の特徴はこれまで螺旋構造により水平に説明されてきた。濠が螺旋状に江戸城本丸を取り囲んでいる。そして江戸城を中心として放射状に

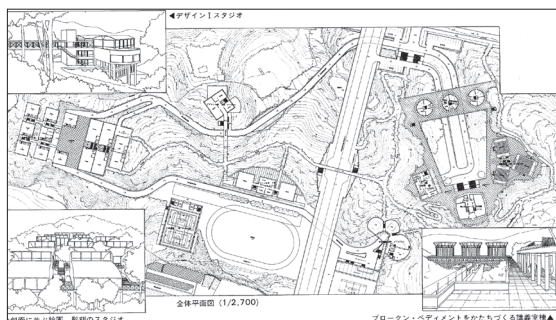
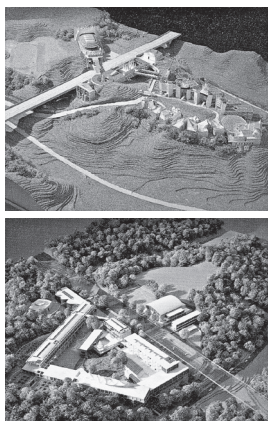


図1-8 毛綱毅曠(毛綱毅曠建築事務所)の設計競技応募案模型(左上)
アトリエ棟を小さく分節して分散配置させ、自然と融合させている。

図1-9 阪田誠造(坂倉建築研究所)の設計競技応募案模型(左下)
最も合理的で幾何学的な配置計画をおこなっている。

図1-10 磯崎新の設計競技応募案平面図(右)

キャンパスの敷地の谷である中心部には車が通らないように計画されていたのが判る。デザイン棟を除いて、ほぼ応募案のとおりに建設された。

街道が日本を貫いている。その濠と街道の接点に門が作られた。螺旋と放射状の街道により街区が生み出され、それに応じて町人や旗本や大名が住み分けていた。
 (内藤昌『江戸と江戸城』鹿島出版会) 〔図2-13、14、15、16、17〕

この江戸の都市空間を全く別の視点から明瞭に語ってみせたのは中沢新一である。彼は谷と台地の織り成す地勢に、東京に潜在している空間構造を見いだした。彼が着目したのは地盤が堅固な洪積層と、海底で粘土が堆積した地盤の悪い沖積層である。この台地と谷が複雑に混然一体となった地勢が現在の東京の都市空間を決定付けている。この両者を、どのようにして見分けるか。それが中沢新一の着想の豊かなところである。じつは縄文時代は現在よりも水面が10メートルほど高かった。その当時海底であった沖積層を海と見立てて、標高10メートルで東京を、垂直に二色で塗り分けたのである。東京フィヨルドとでもいうような海が、内陸へとシワのように浸潤していくような東京の地図を、中沢は「縄文地図」と命名した。彼は東京を縄文時代にまで遡る古層が垂直に積層した宇宙として読み直した。(中沢新一『アースダイバー』講談社) 〔図1-18〕

地盤が堅固な洪積層である台地と、かつて海底であった沖積層の二色に東京を塗り分けた「縄文地図」では神社仏閣、政府の機関そして大学などが全て洪積層に建立されていたことが一目瞭然であった。反対に、沖積層である谷の地域は、人々が低い方向に向かって集まって来る空間構造を持ち、渋谷や歌舞伎町のような歓楽街を形成していた。大きな窪地である大久保は東京でも屈指のエスニック

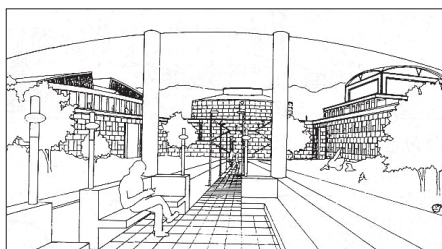


図1-12 磯崎新の設計競技応募案透視図2
 管理棟のアーチの下から正面のマンダー美術館を望む。

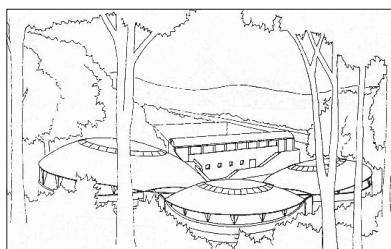


図1-11 磯崎新の設計競技応募案透視図1
 学生会館を遠望する図。この計画は実施されなかった。

タウンとして東南アジアやイスラムの人々の集積地となっている。

考古学者たちは東京の地形が洪積層と沖積層で、複雑に構成されていることを知っていた。しかしそれをもとにして東京の都市空間を語ろうとはしなかった。

それを中沢新一は一つ一つ自分の足と目で確認しながら解釈し、大域的な東京という都市空間にまで及ぶ空間構造へと集成していったのである。

そこに浮上してきたのは、地上を埋める様々な建築や鉄道や広場に覆い隠された、縄文時代から息づく大地の力である。数千年にわたり忘れ去られていた縄文時代の空間構造を黙殺するかのように、現代の都市は建設されてきた。明治以降に失われた日本の精神を縄文に見いだしたのは、中沢新一と岡本太郎であったのは偶然ではないのかもしれない。縄文の宇宙は無味乾燥な大都市東京を情念の横溢した世界へと変貌させてしまった。

最後の氷河期が終わったころの一万年前の関東地方では水位が高く、縄文時代にはこの地盤が堅固な洪積層と、海底であった沖積層との接線、すなわち海岸線には貝塚が作られた。そして防砂林として松が植えられていたのである。とくに千葉県では、貝塚の地名が現在にまで数多く残っており、この縄文時代の環境を現在にまで伝えている。[図1-19]

貝塚で興味深い指摘があった。それは二〇一一年の東日本大震災のときのことである。仙台の松島における津波の被害の分析に関する研究が発表された。

総合地球環境学研究所准教授内山純蔵によると松島周辺の「貝塚遺跡はどれも

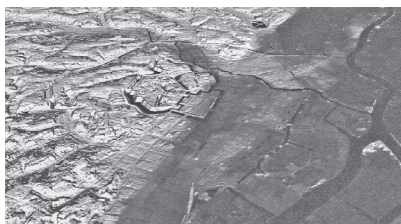


図1-14 東京の地形図(左)

三次元に表現されたことにより、山手の台地が、複雑な地勢を形成していることが判る。

図1-13 江戸時代の地勢(右)

江戸の地勢では東部の湿地帯と西部の台地が複雑に入り組んで谷を形成している。この地勢が江戸の都市空間を決定付けている。江戸の街道は谷筋と尾根筋に二分される。



津波の被害を免れた」というのである。ほとんどの貝塚遺跡が津波の被災地から微妙に外れていた。「図1-20」その理由が非常に興味深いものであった。松島湾とは縄文時代と同じ風景を現在でも見ることができ全国でも希有な地域なのだそうです。松島周辺では縄文時代に高かった水位が下がるとともに、その地盤が沈下したために、現在縄文時代と海岸線が偶然にもほぼ同じ位置なのである。

縄文時代の集落はこの海と山の接点である海岸線にあり、多くの貝塚を残した。それが今回の大地震の津波の被害に関する研究へと結び付いた。（日本経済新聞 二〇一一年六月二十八日朝刊）

さらに興味深い点を内山准教授は指摘している。縄文時代に代わって大陸から伝わった弥生時代の稲作文化に基づく集落についてである。その集落を調査すると、洪水や津波などの大災害の跡が、しばしば発見されるのだという。たとえば仙台市の杵形遺跡^{くつがた}は弥生時代の水田集落であるが、海岸線から4キロメートルも離れているにもかかわらず、津波の被害を受けている。弥生時代とは稲作という農耕の時代であるため、集落が標高の低い谷や沢に造られたからだ。縄文時代と弥生時代は、この海岸線で明瞭に分かたれているのだ。

4. 坂道が生み出した江戸の花見

江戸時代は三百年にわたり変化の少ない平和な時代であった。この時代には桜をはじめとして花を愛でる多くの人がいた。伏見から醍醐に至る桜は、権勢の

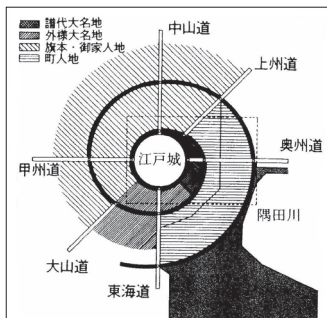


図1-17 螺旋と放射からなる都市構造
螺旋構造により江戸は無限の発展を遂げた。江戸城から放射状に走る街道と螺旋状のお濠により江戸の街は区分されて、大名や旗本や町人により棲み分けられた。



図1-16 江戸のお濠の螺旋構造
世界でも螺旋状の都市構造を持つのは江戸だけである。お濠を繋げるために一部で台地を切り通す必要があった。

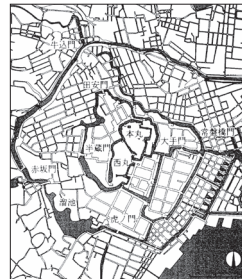


図1-15 江戸の街路構造
お濠で細かく区画されたそれぞれの領域のなかで、自由に格子状の街路が造られていることが判る。統一性はない。

花見であつた。しかし花見はやがて民衆の生活の中へと浸透していった。こうして江戸時代にはいると18世紀には本格的に民衆に花見が広まった。並行するように人々の間で園芸が注目され、椿や菊、福寿草や花菖蒲などの愛好家が品種改良などに興じた。そして江戸の街には数多くの大名庭園が造られた。この大名屋敷の建設が花木園芸の需要を生み出した。いっぽうで民衆の園芸趣味が露地裏にまで浸透し鉢植えを広めた。

19世紀になると桜並木など、花や植物を大量栽培して見せるような手法が生まれた。人々は菊に群がり、菊坂や団子坂は菊人形などによる見せ物がおこなわれ、江戸の街でも有名になった。こうした時代の一八二七（文政一〇）年に刊行されたのが『江戸名所花暦』である。これは江戸時代の代表的な行楽ガイドブックであつたといえるであろう。春は鶯、梅、桜、夏は螢、納涼、蓮、秋は萩、月、虫、冬は寒梅、松、枯野、雪見など、四季折々の花鳥風月を四三項目に分類し、掲載している。それに二五カ所の挿し絵を添えて、名所と名木を解説している。こうして当時の世界でも類を見ない百万都市の江戸は、四季の花が咲き乱れる舞台として描かれたのである。（市古夏生・鈴木健一校訂『江戸名所花暦』ちくま学芸文庫）

特に注目すべき点は、例えば江戸の人々が桜並木のように、大量の花が咲き乱れる風景を好んでいたことであろう。現代でも春の桜並木や秋の紅葉の風景は、空からの映像で報道されることがしばしばである。すなわち俯瞰することにより

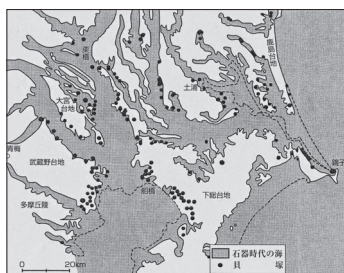


図1-19 一万年前の地形図
当時の海岸線にそって、多くの貝塚が分布していることが判る。

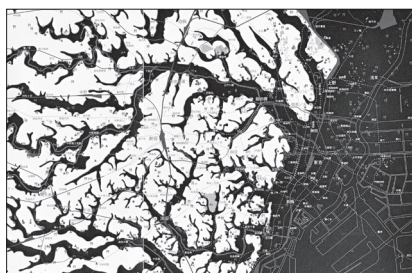


図1-18 中沢新一の「縄文地図」
縄文時代の水位を想定して、塗り込めた地形図は、東京に潜在する都市構造を浮き彫りにした。台地と谷の構造が東京という都市空間を決定付けている。

全体像がより把握され人々の心を掴むのである。事実『江戸名所花暦』の挿し絵のほとんどは俯瞰図なのである。〔図1-21〕

では江戸時代にはどのようにして人々は風景を俯瞰できたのであろうか。それは台地と谷からなる江戸の地勢が深く関係しているといえるであろう。洪積層と沖積層の境界線とは、かつての海岸線であつた。しかし江戸時代には谷と台地をつなぐ坂道がそこに設けられたのである。この坂道は等高線と直交するように設けられた。結果としてあらゆる方向に向く坂道が江戸の街を見下ろすように造られたのである。その坂道を降りるときに、人々は四季折々の花が彩る江戸の街を見下ろすことになるのである。そのようなパノラマの風景を展望できる視覚空間の構造が江戸の都市には無数に組み込まれており無意識のうちに坂道からの展望が、群生する花々の風景の美しさを江戸の町民に印象付けたといえるであろう。

〔図1-22〕

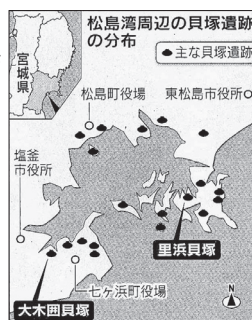
5. 渴いた台地の理性と湿った谷の官能

起伏の豊かな東京の地勢は文学の世界にも影響を及ぼしていた。森まゆみはこの坂道をテーマとして小説を書いている。小説の舞台は上野の台地と、その台地の北側の谷にあたる鶯谷である。（森まゆみ『鴉外の坂』新潮社）

小説の主人公である小泉純一は、森鴉外が立案した「東京方眼図」を手にして東京の街を歩く。彼は台地の上に生活の拠点をもっている。そして谷である根岸

図1-20 松島湾周辺の貝塚遺跡の分布

松島湾は縄文時代から水位が下がるにしたがつて地盤沈下したために、海岸線が変化しなかった。現在の海岸線にそって貝塚遺跡が分布していることが判る。



に住む坂井夫人と出会い、誘惑されるという筋立てである。その両者を結ぶのが鶯坂である。純一は鶯坂を下り、坂井夫人のいる根岸へと向かう。坂道はここで大きな文学的意味を担っている。単に地勢の上と下を結ぶ空間ではない。「思想の世界」と「官能の世界」とを分け隔てている、あるいは結び付ける役割を果たしている。坂道は文学のなかで心の機微を表現するものとして登場してくる。

台地は江戸の花見のように、下町を俯瞰する場である。俯瞰するということは全体像を把握して、その中に自己を位置付けることを意味する。それは思想を生み出し理性へと至る。それに対して谷や沢では、俯瞰して状況を客観的に把握する術がない。人々は思考の根柢を内面に求めることになる。それは情感が支配する空間である。坂井夫人が住む根岸とは、その先にある遊廓である吉原へと通じていることを暗示させ、官能の世界を象徴している。坂道は空間の移動による心の変化を表象する文学的空間なのである。

6. 森林の思考・砂漠の思考

台地と谷を結ぶ坂道の生み出す文学における世界観と同じように、宗教の世界観を地勢と結びつけて興味深く説明してくれたのは、東京大学教授の鈴木秀夫であった。彼は著書『森林の思考・砂漠の思考』（日本放送出版協会）のなかで、森林の思考を仏教に、砂漠の思考をキリスト教と結びつけることにより、環境と人間の関係を、すなわち空間と精神の関係を語っている。

図1-21 亀戸の梅屋舗、『江戸名所花暦』1827年
江戸時代に園芸や花見が人々に好まれたが、その一因として俯瞰できる江戸の地勢の構造を指摘できるであろう。挿し絵の視線は常に高い。



森林地帯における人間の思考は、視点が地上の一角にあつて下から上を見る姿勢である。このため全体像を把握することができない。人間は道に迷うことにより、逆に桃源郷へ至るといふ世界観が生み出された。個々の人間の小さな頭脳で考え出したことなど取るに足らないものであり、人間の判断は愚かであるとされている。本質的なものは、人間の考えることができる範囲の外にあるとされている。彼らは世界を永遠と考える。こうした思考の仕方は仏教思想の理解に順応している。

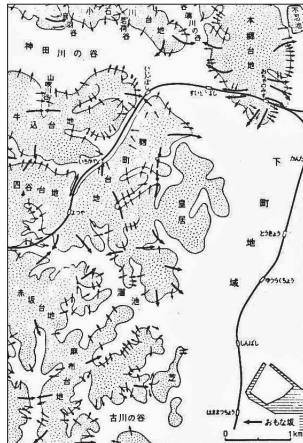
それに対して砂漠における人間の思考は、上から下を俯瞰する鳥の目を持つことである。人間の視点は地表ではなく、天の高いところにあり、そこから見下ろすような認識をしている。すなわち物の一つ一つが三次元的な存在として意識され、物の奥行きや量感として表現されるような感覚が発達している。物事の全体像を把握して、はつきり分かることが常に求められている。判断を誤ると砂漠では死に至るからである。彼らは世界を有限と考える。荒涼とした環境で生まれた一神教には、こうした思想的特徴を認めることができる。鈴木は述べている。

7. 星辰建築としての東京造形大学キャンパス

東京造形大学の1号館から4号館により、中庭の空間が形成されている。それを囲むように、2階レベルと3階レベルで回廊の空間が組み込まれている。この回廊で囲われた中庭では、学生たちの出会いを演出するために、2階の教室から

図1-22 東京の坂の分布図

東京は台地と谷で複雑に構成されている。この台地と谷を結ぶのが坂道である。それは等高線に直交しているため、方位と無関係な方向に設けられた。坂の上からの眺望が江戸の風景を決定付けた。



地上へと至る全ての階段が中庭側に向かって降りるように設計され、学生たちが中庭に自然に集まるように計画されている。

こうして尾根に挟まれた谷に設けられた中庭は、学生同士の交歓の場であり、小さな舞台のような役割を果たす空間となつている。なぜ中庭が舞台であるのか。その理由は、それを取り囲んでいる二重の回廊が、舞台に対してあたかも棧敷席のような役割を果たしていると考えられるからである。しかし残念ながら中庭は現在では、駐車場と学バスの迂回路となつてしまつている。学生たちが集う場はマンズー美術館寄りの広場だけである。

こうして現在の東京造形大学のキャンパスは、建築家毛綱毅曠が指摘したように、尾根と緑という大地に抱かれた小宇宙の空間を形成していることが理解できるであろう。

東京造形大学のキャンパスでは、研究室は1号館の4階にあり、キャンパスを常に見下ろすような場所となる。そこは世界を俯瞰する知性や理性や秩序が支配する空間である。資料を収集し論考し研究をおこない論文を書いている。それに対して木工や金工や暗室といった学生たちが制作に取り組んでいる工房は谷にあたる1階や地下に設けられている。主に手を使い感性に従つて自己表現に取り組んでいる。授業をおこなうときに、先生は4階から1階へと降りて行く。そこには無限の創造の空間が広がっている。そして学生が先生の指導を受けるときには、1階から4階へと上つていく。東京造形大学のキャンパスでは、尾根と沢のなす

地形のもつ小山のような地勢により包摂された世界観が、研究・教育の精神世界と重合し、独特な小宇宙の世界が形成されているといえるであろう。

1号館の研究室棟の最上階のラウンジは三六〇度パノラマの空間を容れている。天上の星辰世界が投影されたようなこの円筒形のガラスのラウンジは、夜になると外部空間との境界が消失し、満天の星辰と融合する。東の尾根から満月が昇ると、ラウンジは月光により満たされる。嵐の夜には、天を引き裂くような稲妻がラウンジに落ちてくるかのような、自然の脅威に晒される。春には尾根の山桜が点々と咲き乱れて、障壁画のような自然の風景に包まれる。このようにラウンジには天上の星辰世界が投影されて、精神も身体も解放され宇宙と一体化する。

東京造形大学の中庭に仕組まれた劇場空間は、こうして大自然と一体化するような宇宙軸が貫く世界劇場となり、キャンパス全体の大地に散り詰められた建築群は、あたかも天上の星々を尾根に挟まれた谷という天の川のなかに投影したかのようである。なぜならば4号館から1号館そして5号館、9号館、10号館そして彫刻棟の11号館を結ぶと、なんと造形大学のキャンパスの配置は北斗七星と全く同じ柄杓の配列を成しているからである。但し裏返ししの配列となっている。そして本来の小熊座の北極星に該当する方向には、遠く富士山を望むことができるのである。

東京造形大学とは一つの小宇宙であり、まさに星辰都市そのものである。

第二章 身体

——小宇宙としての身体都市——

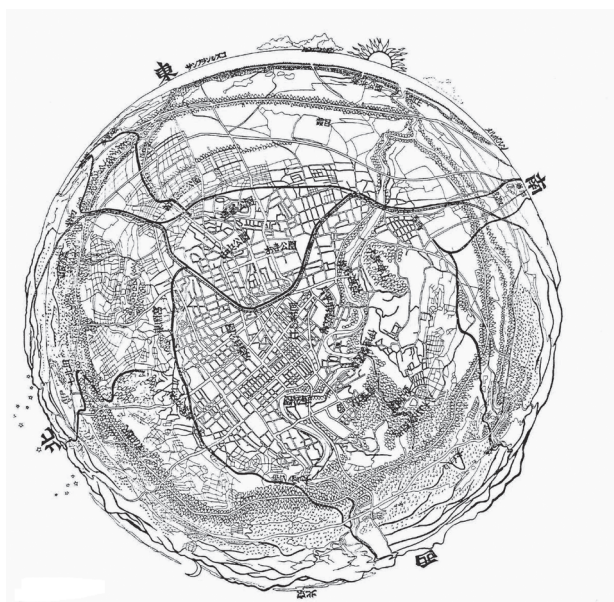


図2-1 吉坂隆正の仙台市パノラマ図 一九七二年

このパノラマ地図は、早稲田大学教授吉坂隆正が仙台市都市計画の報告書のために制作したものである。これはまさに魚眼地図といえるであろう。しかしこれは視覚的な空間的認識を示した地図というよりも、仙台市民が、仙台という街をどのように認識しているのかという精神的認識を表現した地図といえるであろう。

市街中心部はより大きくより詳しく描かれており、あまり行かない郊外になると、その密度が下がってくる。しかし吉坂の描いた地図の興味深いところは、仙台という地方都市を東京と関連付けて日本の中に位置付けるのではなく、メルボルンやサンフランシスコの方角などを地図に記載し、世界のなかに仙台という都市を位置付けていることである。そのような市民の心の中を覗いたときの仙台市のイメージを図像化させたものといえるであろう。

一般的に人々の日常生活の動態は、対数尺軸（ロガリズム）というグリッドのなかに収まることが知られている。それを表現したものは、あたかも眼球底面に投影され、中心部が拡大され、周辺部が縮小されたものである。吉坂は仙台という名の都市をとおして、人々の心のなかの小宇宙を描いたといえるであろう。

1. T O地図と地中海世界

ヨーロッパ中世の地図に典型とされているものの一つにT O地図がある。この名称はTとOの文字を組み合わせた空間構成により、キリスト教世界を地図として表現したことに由来している。

中世では、地球とは平らであり、その平たい大地の周縁は、世界の海洋であるオケアヌスにより囲まれていると考えられていた。それをOの文字が表現している。そしてTの文字は地中海を意味している。当時の世界とはこの地中海が全てであったのだ。完全な円をなす地球は、イザヤ書第四〇章の「円形の大地」にならったものである。地中海とナイル川とドン川からなるTにより、世界はアジアとアフリカとヨーロッパに分割されていた。また地図の上の方角は東であり、円の上部の端にエデンの園が描かれるのが常である。Tの文字の頂点、すなわち世界の中心に聖地エルサレムが位置する。（織田武雄『古地図の世界』講談社）T O地図とは、中世の人々が抱いていた世界に対する観念が象徴的に描かれたものといえるであろう。〔図2-2〕

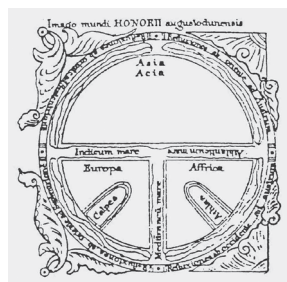
T O地図のなかでも最も有名かつ精緻なものは、ヘレフォード地図と呼ばれているものである。この名は一三〇〇年ころに、イングランド西部のウェールズに近いヘレフォード大聖堂の祭壇画の中央部分に描かれたことに由来している。五角形の仔牛の皮紙に描かれたT O地図である。（応地利明『世界地図の誕生』日本経済新聞社）〔図2-3〕

図2-2 T O地図として描かれたヨーロッパ、中世（右）

聖書の「円形の大地」の記述にない、中世の世界は観念として円で描かれた。世界の中心には聖地エルサレムが位置しており、ヨーロッパとアジアの三大陸に分割されていた。

図2-3 ヘレフォードのT O地図、1300年頃（左）

この地図は物語図とも呼ばれている。なぜならば中世の伝承や伝説による中世キリスト教世界が、世界図の形を借りて表現された絵図でもあるからだ。



中世の生活では移動も徒歩や馬や船が中心であり、地中海が自分たちの世界の全てであった。この時代には世界を把握する場合には、身体が唯一の基準となる。すなわち身体で認識可能な距離を半径として描いた円であるOが世界の周縁であったのだ。そして都市は海運の要衝に造られた。Tの文字の交差点には聖地エルサレムが位置する。

このTO地図の考え方は、個々の都市の地図を描く場合にも援用された。そのときにはOは中世都市の市壁であり、Tは川や道路となることもある。TO地図は人々が認識している都市を小宇宙として表現してみせた。

キリスト教徒の描いたTO地図では東が上であった。なぜならばキリスト教徒であるヨーロッパ人にとって当時最も重要であったエルサレムの都市は、地中海の東側に位置していたからである。そして人々は、最も重要なものを正面に見えるように地図を描くからである。そのような意味で、当時のイスラム教徒であるアラブ人が12世紀に描いた地中海世界の地図では、上が南となっている。すなわちヨーロッパ大陸からアフリカを正面に見て描いているからだ。〔図2-4〕これは世界を見る主体が誰であるかによって、重要なものが異なり、その正面を地図の上に描くことを示している。

このように地図においては身体が全ての基準となる。地図において北を上にして描くように統一されたのは近代に入ってから過ぎない。

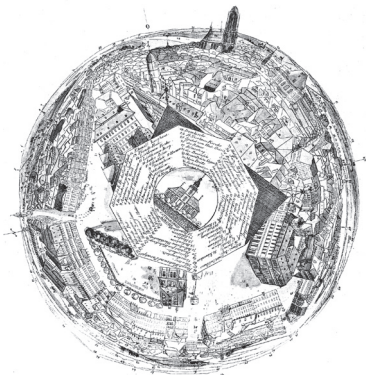


図2-5 ドイツの都市フランクフルトのパノラマ図、1811年
旧市街地の中央に建つ教会の鐘楼からは、かつての中世世界を彷彿とさせる眺望が得られた。人々はパノラマ図により、実際の都市空間と、身体的かつ精神的な都市のイメージを一致させることができた。



図2-4 逆転した地中海地図、12世紀
イスラム教徒が描いたアフリカ大陸は、ヨーロッパ大陸から地中海を挟んで正面に描かれた。このため南が上になっている。地図では、身体を基準として、重要なものを正面にして描かれる。

2. ヨーロッパのパノラマ館

吉坂隆正の仙台の魚眼地図とよく似ているものとして、ヨーロッパで19世紀に盛んに描かれたパノラマ図というものがある。例えば一八一一年にドイツで描かれたパノラマ図を見てみよう。フランクフルト旧市街地の聖カタリーネン教会の鐘楼から見た都市の風景を描いたものだ。中心部は詳細に、周辺部は地平線となり小さく描かれている。〔図2-5〕

こうしたパノラマ図はM・C・エッシャーが対数方眼紙を用いて描いた「バルコニー」の作品を彷彿とさせずにはおかない。〔図2-6〕エッシャーの絵は立体的に飛び出して見える。すなわち観る者は三次元の空間として認識する。結果として突出した部分を他の部分と比べてみると、より詳細に認識されるという表現の効果が認められる。それはパノラマ図の持つ本質を、空間としてよく表現しているといえるであろう。

18世紀末のヨーロッパに誕生したこの都市の魚眼図は、一般的にパノラマ図と呼ばれていた。それはギリシャ語を出自とする「全てを見る」という意味を持つパノラマから名付けられた。このパノラマ図の多くがパノラマ館と呼ばれた施設の土産物やパンフレットとして製作されていた。このパノラマ館は18世紀末から19世紀末にかけて、万国博覧会などに合わせて数多くの建設されたという歴史をもつ。この興味深い巨大な視覚装置は、ヨーロッパばかりでなくアメリカや日本でも建設された。(ベルナル・コマン『パノラマの世紀』筑摩書房)〔図2-7、8〕

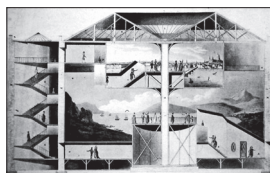


図2-8 イギリスのパノラマ館の断面図、1801年
ロンドンのレスター・スクエアのパノラマ館は建築家ロバート・ミッチェルの設計による。このパノラマ館では展示室が二重に構成されていた。建物の直径は38メートルであった。

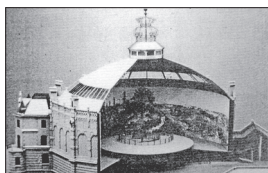


図2-7 フランクフルトのパノラマ館の模型
パノラマ館は円形の体育館のような空間を持ち、大きなドームの天井が架けられていた。その中央に展望台がしつらえられていた。

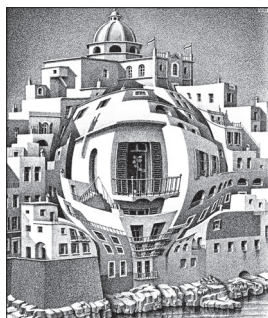


図2-6 「バルコニー」M.C. エッシャー、1943年
対数座標を用いて、手前に飛び出して見えるような錯覚を表現している。

ロンドンのレスター・スクエアに一八二九年開館したパノラマ館は有名である。直径38メートル、高さ24メートルのホールでは、ロンドンを一望したパノラマ画が展示されていた。〔図2-9〕世界にまだ残る幾つかのパノラマ館は、現在でも観光地として訪れ、体験することができる。

世紀末のパノラマ館は娯楽ばかりでなく、教育施設としての役割も担っていた。確かに興行用には戦争のシーンや歴史的シーンがプロパガンダとして描かれることが多かった。しかしその他にもイスタンブールなどのヨーロッパの遺産となるような都市の風景や、スイス・アルプスなどの崇高な風景、そして植民地などの異国の風景を描いたパノラマ画など、子供にも興味があり、知識を得られるようなものが展示されていたからである。当時はツーリズムが興隆した時代であり、パノラマ館は旅に行けない女性や子供たちのための啓蒙施設としても大きな役割を果たしていた。

パノラマ館では、地下通路から中央の展望ステージへ上り、そこから円筒形のホールの壁面にエンドレスに描かれた都市の風景をまさに一望することができた。こうしたパノラマ館が人気を博した理由とはなんなのであつたのであろうか。一般的には、近代になると都市が巨大化し、身体スケールを越えてしまった。そのために身体性をもう一度奪還するために生み出されたと解釈されている。なぜならばパノラマ館では、かつて中世の時代にまだ都市が一つの小宇宙として身体で把握できた世界を、疑似体験できたからである。

図2-9 ロンドンのパノラマ館の内部、1829年
この竣工直前のパノラマ館の内部を描いた図によると、ロンドンの市街地が描かれたパノラマ図が展示されていたようである。



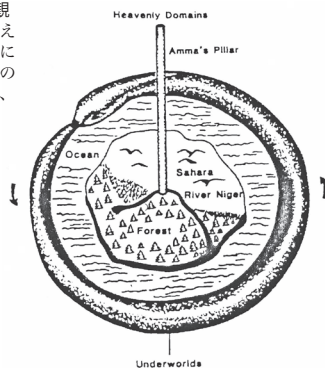
3. アフリカのドゴン族の世界観

人間がまだ気球や飛行機などを発明する以前には、都市を地上高くから俯瞰することができなかった。このため世界といったものは宗教的世界観と身体的直感を融合させたものとして描かれるのが常であった。その多くは象徴的な円として描かれていることが特徴的である。

原始的な社会に着目してみると、たとえばアフリカのドゴン族の描いた世界観の事例が興味深い。彼らは自分たちの世界を円として描いている。その特徴は、世界の中心に天を支える柱が描かれていることだ。この円形の大地は大きな海に囲まれており、その海の水はさらに大きな蛇により堰止められている。大地の方はいえ、中央に川が流れており、それによりサハラ砂漠と森の世界が分断されている。この図像は自分たちが身体で把握できる生活環境にある柱や蛇や砂漠や海といったものを全て融合させることにより描かれている。円環という象徴的な図像により構築された神話的な宇宙の姿からは独自の世界観を読み取ることができる。〔図2-10〕

興味深い図像はインドのバナールシ都市の巡礼路を描いた地図である。中央に大蛇がうねるように描かれているのが、インド北部を西から東へと流れる聖なるガンジス河である。バナールシには紀元後5世紀になって初めてシヴァ神の寺院が建立され、やがて宗教都市へと発展していった。そしてガンジス河の北側河畔には数多くの木浴場が寄進され建設されたことで有名である。

図2-10 アフリカのドゴン族の世界観
ドゴン族の神アマンのいる天を支えるために、巨大な柱が大地の中央に聳えている。海を司る蛇が、世界の周縁を規定している。その世界は、円環の小宇宙をなしている。



バナラシでは、インド暦であるヴィクラマ暦（太陰太陽暦）の不浄とされる閏月に大規模な巡礼が行われることで知られている。それをパンチャクロシー巡礼という。この約88キロメートルの巡礼路に沿って建てられた一〇八カ所の祠や寺院に参拝するのが習わしとなっている。この円環の巡礼路とは、聖域の結界を意味している。円環の内側に入っている者には死後の解脱が約束されている。円環の巡礼路は巨大なリングとも考えられている。この聖域は全インドの主要な聖地と同一視されており、世界を象徴するリングを一巡することをも意味する。

（季刊『民族学』一九九五年春、第71号、国立民族学博物館）

三千にもものぼる祠や寺院を擁する宗教都市バナラシにおける、ヒンズー教の世界観を象徴するパンチャクロシー巡礼路は、実際にはガンジス河の北側だけに展開し、その道も紆余曲折しており、決して正円をなしてはいない。しかしそれを描いたバナラシという宗教都市の地図では、ガンジス河を内部に取り込むように円環状に配列された巡礼路となっている。それは聖地としての宗教都市を象徴的な形像を用いて描いた、観念として都市の姿であるといえるであろう。

ここでは地理的なガンジス河の表現と、観念的な宗教世界の表現が融合しているばかりではない。それはヒンズー教を信仰する人々にとって最大の聖地であるガンジス河の都市バナラシに対する、人間の精神世界そのものを表現していると解釈できるであろう。〔図2-11〕

古来から円という図像には形而上学的な意味が託されてきた。すなわち恒常性、



図2-11 インドの巡礼路と世界観、1875年
ガンジス河が流れるバナラシにはパンチャクロシー巡礼路がある。多くの祠や寺院を巡ることは、死後の解脱と結び付けられている。巡礼路は宇宙へと通じる聖域を構成している。この巡礼路は、象徴的に円として描かれている。

永遠性あるいは完全性といった意味は、神学的な解釈と結び付けられ、宇宙という世界観が円という図像に象徴されたのである。

こうした円環による世界観の表現は観念だけではなく、実際の世界においても顕現する場合がある。そのような意味でアフリカのカメルーンのサバンナに住むマッサ族の集落の空間構成は興味深い。三〇を越える住棟が真珠のネックレスのように輪をなして閉じた集落を形成している。サバンナの集落では西欧の都市のような広場はなく、この複合家族による特異な集落が一つの村のような役割を果たしている。その内部には小さな都市の広場のような空間がある。個々の住棟は土壁と植物により構築されている。しかし入手できる建材の大きさに限界があり、あまり大きな架構の建造物を造ることはできない。小規模な建築物が、それぞれ集落において門の役割や台所、寝室、家畜小屋、便所そして倉庫など様々な用途に供されて共同生活をおこなう空間を構成している。マッサ族の人々にとって、日常的に体感している空間は全て円により構成されている。幾重にも組み込まれた円環の世界が小宇宙をなし、彼らの精神的な世界観すらも形成していくのだ。

（藤井明『集落が育てる設計図』LIXIL出版）〔図2-12〕

この集落の共同体の人々が結束する意志は内部に向かって収斂し、その一方で外部に対して自閉的な防御の姿勢を示している。その共同体の世界観そのものを、その集落の配置図から読み取ることができるであろう。

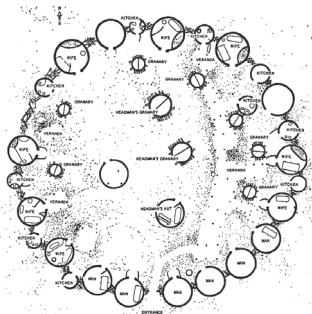


図2-12 アフリカの円環状集落
カメルーンのマッサ族は、複数の家族で一つの閉じた円環状の集落を構築することで、知られている。集落に住む人々の対等な関係を、共同体としての一体感を、そして外部に対する結束を、この円環の空間構造が支えている。この集落とは、小さな宇宙そのものである。

4. 都市と占星術

身体と都市を結び付けたのは占星術であろう。紀元前三〇〇年頃にバビロニアで生まれた占星術はローマ帝国へと継承されて、ルネサンスの時代にラテン語に翻訳されヨーロッパに広まった。ルネサンスの時代になると占星術はキリスト教と融合して新たな世界観が創り出された。また国家の吉凶を占うものから、人間の運命を占うホロスコープも同時に生まれた。こうして人間は小宇宙と類似した小宇宙として考えられるようになった。たとえば人間の主要な器官は黄道十二宮と照応しており、白羊宮は頭を支配していた。(グリヨ・ド・ジヴリ『妖術師・秘術師・錬金術師の博物館』法政大学出版局)〔図2-13〕その一方で、占星術と建築や都市との関係を示したウィトルウィウスの『建築十書』が16世紀に翻訳され、ヨーロッパに紹介された。

ルネサンスという時代を定義するならば、それはギリシャの世界とキリスト教の世界の出会いによる文化の再生の時代であるといえるであろう。それと同時に人間性の復興という、人文主義がこの時代をさらに特徴付けている。個人という存在の主張、個人の独立と自由、そして考える個人として人間が自覚された時代がルネサンスである。神が中心であった中世に対して、人間への関心が相対的に高まっていった。人間の身体は神の写しとして、人間の肉体は完璧なものとして考えられるようになり、完璧な形である正方形や円の中に完璧な身体が描かれた。レオナルド・ダ・ヴィンチの人体の図式は有名である。〔図2-14〕こうして人間

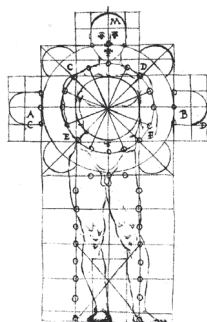


図2-15 身体と教会の相関図、15世紀
9等身で描かれた理想的な身体図は、そのままバジリカの教会の平面図と重ねて描かれている。

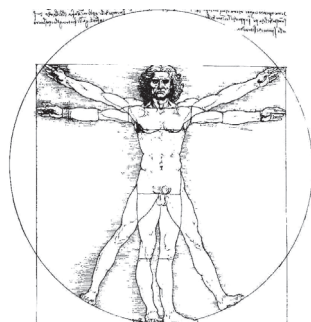


図2-14 レオナルド・ダ・ヴィンチの身体図式
手足を伸ばした裸の男性が、正方形と円の図形の中に収まるように描かれている。人間の身体は神の写しである。このため人間の身体は宇宙の秩序である幾何学により規定されている。

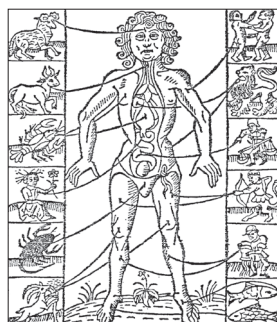


図2-13 身体における黄道十二宮の位置『聖者の殉教譚』シュトラスブル、1484年
身体は宇宙を写した小宇宙であった。人体の臓器は宇宙を支配している星座と照応させて解釈された。

は宇宙の中心に位置付けられていった。

ルネサンス時代の始めの頃は、人間の再評価が中心であった。しかし16世紀に入ると、人間のありうべき理想の身体が理念として提示され、この理念が一人歩きをし始めた。この均整の取れた神の写しとしての理想的身体は、建築や都市との整合性が問われるようになった。身体のプロポーションは教会建築の平面図と同じであると考えられた。〔図2-15〕あるいは教会や神殿の立面図と同じであると考えられた。〔図2-16〕

こうして神の法則に従い構築された調和のとれた大宇宙のなかで、それを構成する要素として、神の家である建築と神の写しである人間とは、同じ神の世界の秩序が体现された、同等の存在であると考えられた。神により創造されたものが、どうして神の家である教会建築と整合しないことがありうるのであろうか。

占星術で認められた人間の臓器と黄道十二宮の相関関係のように身体と都市の相関関係が考えられた。フランチェスコ・デイ・ジョルジョの著した建築理論書は興味深い。都市の形態が人間の肉体に喩えられている。臍には大聖堂が、頭には宮殿が、手足には要塞が関係付けられている。人間の血管は都市の街路として解釈された。(中嶋和郎『ルネサンス理想都市』講談社)〔図2-17〕

例えばドイツ南部には、ネルトリンゲンという中世都市がある。その都市は、完全な円形の市壁に囲まれた都市空間を持っていることで、知られている。その円形の都市の中心部には聖堂の鐘楼が建っている。それはあたかもレオナルド・



図2-18 ドイツの中世都市ネルトリンゲン
美しい円形の市壁が、現在も残っている
ネルトリンゲンは、中世都市の姿をよく
現在にまで伝えている。その円形都市の
中心部に建つ教会の鐘楼からの鐘の音が、
人々に礼拝の時を知らせる。



図2-16 身体と教会の相関図、15世紀(右)

理想的身体の図は7等身で描かれている。この理想的身体は、そのまま教会のファサードと重ね合わされて描かれている。

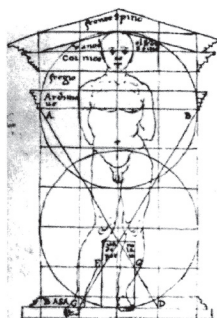


図2-17 身体と都市の相関図、1478年(中)

フランチェスコ・デイ・ジョルジョの建築理論書の第三章では、都市と人体が相関するものとして、重ねて描かれて、説明されている。円形の広場をもつ聖堂は人体の臍に位置している。

ダ・ヴィンチの人体の図式とデイ・ジョルジョの著した建築理論書を融合させたかのようだ。〔図2-18〕

こうしてルネサンスの都市は幾何学をとおして、宇宙の秩序の世界観が地上に投影されたものとして解釈された。ネルトリンゲンの街は、鐘楼の鐘の音が聞こえる範囲が中世都市の大きさを決定し、人々を支配しているという仮説を彷彿とさせる。身体が都市の規模を決定付けているのだ。

5. 子供の中の宇宙

近代地図のように無限に広がる世界のなかに客観的に自分を位置付けることができるようになるのは、大人になってからのことである。では自分が小さかった子供の頃、自分が住んでいる街をどのように認識していたのであろうか。

子供たちがどのように都市を把握していたのか、それを理解するうえで興味深い図像がある。これは小学生が描いた自分の生活圏の地図である。十字路に自宅「ぼくの家」と「ミラー」と「こうみんかん」がある。また十字路の下半分には「ほそみち」と「かわ」があり、右側には「はし」が見える。左手にはもう一軒の家「たつやにいちやんのいえ」がある。〔図2-19〕

まず最初に指摘しておきたいことは、これはT O地図と同じ構造を持っている。そのTの交差点には最も重要な建築物である自分の家が建っている。「はし」は境界域を示している。また子供は重要なものを大きく描く。そう考えると自宅と

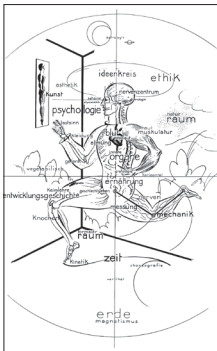
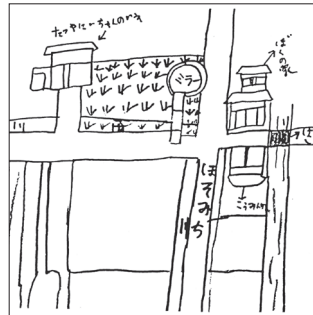


図2-19 「ぼくの家周辺」
小学生4年生の描いた地図(右)
子供が描いた地図は身体的だ。自分を中心に世界を表現している。自分にとって意味のないものは描かれていない。この十字路周辺が彼の世界の全てである。

図2-20 「理想の円環のなかの人間」
オスカー・シュレンマー、1924年(左)

工業デザインを志向したバウハウスでも、身体は空間を決定するうえで重要な要素として捉えられていた。シュレンマーは環境を身体を起点として意味付けた。



同じ大ききで描かれている「ミラー」の存在が興味深い。これは彼の世界にとつて重要な意味を持つていることが推察される。また親戚の家が大きく描かれており、彼の生活圏の準本拠地となっていることが推察される。さらに興味深いのは自宅の正面の「こうみんかん」が上下逆に描かれていることである。子供は道路に立つて、そこを基準として建物の正面を描くのが常である。こうしてみるとこの小学生の描いた地図は彼の身体を中心として意味付けられ、描かれていることが判る。それはアラブ人が描いた地中海の地図と同じである。このため子供の描いた地図は結果として中世ヨーロッパの人々の世界観とよく似ており、T O 地図に類似したものとなっていることにも納得がいくであろう。子供にとつては自らの身体こそ世界の中心なのである。子供は神そのものであり、神を写した中世の人々と同じである。子供が描いた地図には世界観があり、そこには小宇宙が読み取れるのだ。丸いミラーに映った街の姿とは、まさにT O 地図そのものではないか。

6. オスカー・シュレンマーの身体

パウハウスで演劇を担当していたオスカー・シュレンマーは、「人間」という講義もおこなっていた。〔図2-20〕彼は講義のなかで、人間を中心として世界を意味付けることを試みている。それを説明するときに象徴的な二枚の図像を用いている。最初の図像は空間で規定された中に身体が位置付けられるものである。そしてもう一方は、身体の延長線のうえに空間が規定されることを示している。

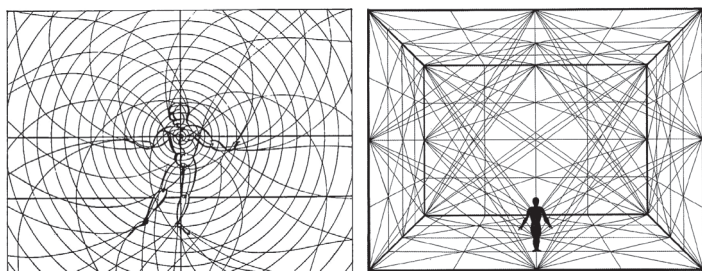


図2-21 身体と空間の関係 オスカー・シュレンマー
空間を最初に規定すると、その中に身体は位置付けられる。(右) それに対して身体が空間に作用して意味を与えようとする場合には、身体は全ての起点となる。(左)

「図2-21」子供が描いた街の姿とは、この後者に該当する。彼を取り巻く全てのものを身体が意味付けしていった。その結果そのものが世界の全てなのである。

前者のように神が創った世界がまずあって、その枠組のなかで規定された身体像とは、ルネサンスの占星術の時代の身体像であるといえるかもしれない。

シュレンマーは多くの興味深いダンスを創作した。それは身体の空間に対する表現の可能性を追求したものと解釈できるであろう。特に彼が「トリアディック・バレエ」と名付けた作品は、数字の3にこだわるとともに、全てを幾何学に読み換えているところが興味深い。身体も幾何学的立体として解釈され、特異なコスチュームをまとうて登場してくる。彼らは舞台の上を幾何学的な順路で移動し踊った。〔図2-22〕

それは身体と宇宙を同じ秩序のもとで解釈し、大きな宇宙と小さな宇宙である身体を融合させたものであった。シュレンマーの演劇とは世界を舞台の上に顕現させたものであったと解釈できるであろう。幾何学という神の司る宇宙の秩序のもとで、劇場建築とは舞台上に投影された小宇宙としての神の世界が創られたものである。イギリスの17世紀の劇場建築では舞台の天井には黄道十二宮の星辰が描かれ「天」と呼ばれていた。それに対して舞台の奈落は「地獄」と呼ばれていた。その「天」と「地獄」の間に舞台があり、そこで世界が演じられた。こうしてみるといつの時代にも、劇場という建築空間とは宇宙そのものと言えるかもしれない。もちろんその主役は人間である。

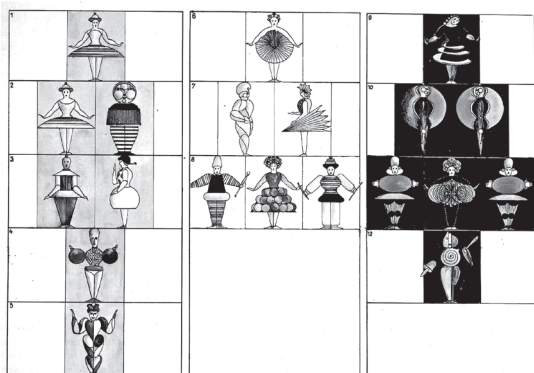


図2-22 「トリアディック・バレエ」
オスカー・シュレンマー、1926年
トリアディックとは3という数字
を意味する。世界は全て3つの要
素で構成されている。
〈三角・四角・円〉
〈高さ・幅・奥行〉
〈空間・形態・色彩〉
である。もちろんバレエは3つの
場面から構成されている。

第三章 平野

— 神がコンパスで描いた都市 —



図3-1 「建築家としての父なる神」 13世紀中葉

フランスで書かれた道徳的な注釈を付けた聖書『教訓化された聖書』の挿し絵である。ここにはコンパスを持たされた父なる神が建築家として天地創造している姿が描かれている。全能の神が宇宙の秩序である幾何学に基づいて天地創造していることが示されている。しかしよく見ると、世界の内部は波打つ有機的な形態で埋め尽くされている。そこを支配しているのは混沌である。秩序はまだ見出し出せない。神は左手で世界を支え、右手に持ったコンパスにより円を描いている。つまり神はまず外郭に秩序を与えたようだ。こうして神により、天地と人間が創造され歴史が始まった。天地創造である。

コンパスとは、白い紙の上に完璧な形の一つである円を描くことができる、神の道具なのだ。この円という幾何的な図像は完璧な世界観を表象している。イザヤ書には、この世界が「円形の大地」であると記されている。こうしてルネサンスになると、地上に神がコンパスで描いたものとして幾何学的な円形の都市が数多く誕生した。都市は神の世界を表象している。

1. 理想都市は平野で構築された

ヨーロッパにおける都市の歴史を俯瞰してみると、13世紀ころから都市は急速に発達する。じつは11世紀頃から温暖な気候が始まっていた。豊富な食料を背景として増大した人口を受容するために多くの都市が誕生した。それまでの都市とは教会や城の周辺に自然発生的に生まれた集落の延長としてのものではなかった。

特に15世紀のルネサンスの時代になると人文主義のもとで理想都市が提案されるようになった。たとえばイタリアのレオン・バッティスタ・アルベルティ（一四〇四～一四七二）が著した『建築書』（一四五〇年頃）では初めて理想都市について語られている。これは既存の中世都市をもとにした改造案であった。

しかし何もないところに新しく理想都市を具体的に初めて描いてみせてくれたのはフィラレーテ（一四〇〇頃～一四六九）であった。彼の『建築論』（一四六四年頃）では、「スフォルツィンダ」という理想都市が提案されている。理想都市スフォルツィンダの都市空間は幾何学的に構成されている。すなわち八つの角をもつ星型が円の中に収まっている。その中心部には広場があり市庁舎がたっている。その周辺に主要な都市施設が設定されている。〔図3-2〕

理想都市の空間構造は幾何学的な図像で全てが決定されている。一見星型に見える図像も、じつは二つの正方形をずらして重ねたものであることが判る。このスフォルツィンダという理想都市は円と正方形という宇宙の秩序を地上に投影し

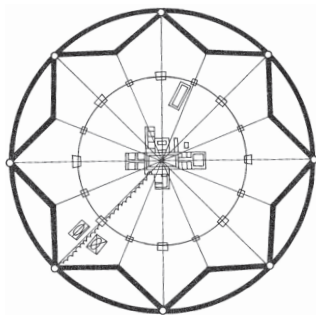


図3-2 フィラレーテの理想都市スフォルツィンダ、15世紀
イタリア・ルネサンスの理想都市の姿は幾何学で表現されていることが特徴的である。幾何学とは、神の創造した世界を貫く秩序であり、都市とは、天上の世界が地上に顕現したものである。

たものであると解釈できる。神が司る天上の世界は、中世では円により象徴的に描かれていたことが知られている。そして世界は四つの元素から成り立っているものと考えられていた。このためフィラレーテの理想都市は当時の占星術や魔術を背景としているといわれている。（中嶋和郎『ルネサンス理想都市』講談社）

円形と星型により理想都市の空間を表現しようとしたのは、当時の人文主義が人間を神の写しとして考えていたように、都市も天上の世界、つまり神の完璧な世界の写しとして考えていたからである。こうしてルネサンスに次々と生み出された理想都市は、宇宙の象徴的な意味が込められた星辰都市として構想されたと考えられている。

この理想都市が机上の空論を経て、実際の都市として実現されるのは16世紀後半に造られた都市「バルマノーヴァ」を俟たねばならない。それはヴェンチエンツォ・スカモッチ（一五五二～一六一六）の都市理念が強く反映されものといわれている。九角形の星型の初期バロックの要塞都市は、中央の六角形の広場から放射状および同心円状の街路により幾何学的に構成されている。〔図3-3〕

こうした美しい純粹幾何学で構成されたイタリアのルネサンスの都市は、あたかも神がコンパスを用いて白い紙の上に描いたかのようだ。建築家は神の代理人として宇宙の法則を咀嚼し、幾何学的な都市を構想した。それが出来たのはヨーロッパの平原地帯という地勢的特徴があったからである。あたかも製図台のうえの白い製図用紙のような平坦な耕作地に、自由に都市は描かれ構築されている。

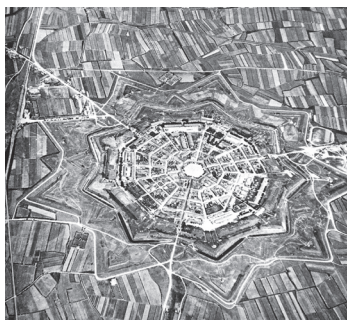


図3-4 バルマノーヴァ、16世紀後半
純粹な幾何学的な都市の平面形態は、あたかも白いキャンパスに自由に絵を描くように、平野の耕作地の真只中に構築された。

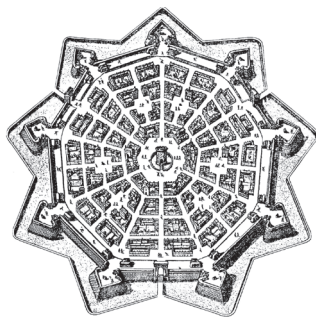


図3-3 バルマノーヴァ、16世紀後半
バロック時代になると要塞化していったルネサンス都市は、幾重にも幾何学的な星型の稜堡で取り囲まれている。

それは山岳地帯では不可能なのである。イタリアのロンバルディア平原あるいは北ヨーロッパ平原のような平坦な地勢においてこそ、こうした幾何学的な都市は生まれたといえるであろう。〔図3-4〕

2. 植民都市の格子構造

地中海を制覇したローマ帝国は北アフリカの現アルジェリアに西暦一〇〇年頃に植民都市「ティムガット」を建設した。このティムガットの都市空間が非常に興味深いのは、典型的なローマ帝国の植民都市の格子構造をなしているからである。三五〇メートル四方の正方形の都市は、全体が十字に四分割されるように大きな道路が設定され、それぞれが四つの門を持つていた。四つの街区はさらに6×6の正方形の小さな街区へと分割されている。そして都市の中央には方形のフォーラムと半円形の座席をもつ劇場が設けられている。〔図3-5〕

こうしたローマ帝国の植民都市は、イタリアのルネサンスの理想都市と同じように、平坦なサバンナや砂漠や平野という地勢が、前提となっている。すなわち製図台のような平坦な地勢の上に、理想的な都市空間を自由に構築できたと考えられる。地理的な障害物が無い場合には、その理想的な空間は損なわれることなく実現される。ローマ帝国がキリスト教を受け入れるのはティムガットが出来てから三〇〇年以後のことである。このためキリスト教の世界観が、そこには全く反映されていない。ローマ帝国の神はコンパスを持つていなかったようなのであ

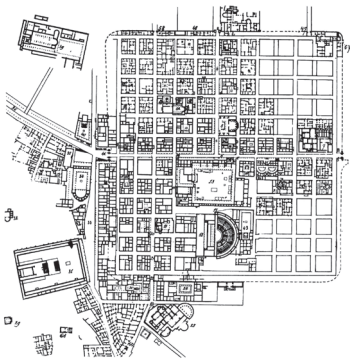


図3-5 ローマ帝国の植民都市ティムガット、西暦100年頃
全てが正方形に分節されて構築された都市空間を持つ。その合理的な設計手法は、北アフリカの平坦な地勢の条件のもとで可能となった。

る。その代わりに直定規で都市空間は抽象的な方形の格子状に構築された。

こうした植民地の格子空間構造は、ヨーロッパ諸国が大航海時代に世界中に造った植民地の都市構造へと継承されていく。その基本的な空間構造はローマ帝国とルネサンスの都市構造を融合させている。たとえばスペインのチャールズV世が一五二一年に集めた『インド諸島の都市計画』は興味深い。そこにはローマ帝国の植民都市ティムガットを彷彿とさせる都市構造とならんでイタリア・ルネサンスの理想都市に似た円形の都市の図像が含まれているからである〔図3-6〕

西インド諸島の現ドミニカ共和国の首都であるサント・ドミンゴは、15世紀末にスペインにより最初に構築された植民都市である。それは『インド諸島の都市計画』に倣った典型的な都市構造を具現化させたような都市であった。中央に聖堂がたつ広場が設けられている。しかし東側では、オザマ川により制約を受けて、正方形の美しい幾何学的な都市の輪郭が不完全のままに終わってしまった。〔図3-7〕これはヨーロッパ大陸の平原地帯とは異なり、多くの港湾都市である植民都市での地勢的な制約の結果といえるであろう。

南アメリカの現アルゼンチンの首都ブエノスアイレスとは、16世紀末にスペインにより最初に入植がおこなわれた都市である。その後一六一八年に海岸の要塞を中心として都市が建設された。それから二世紀を経て人口が増大し一七九〇年代には70万人にまで達した。その都市の特徴は典型的な格子状の空間構造であった。

〔図3-8〕



図3-7 スペインの植民都市サント・ドミンゴ、15世紀末
中央に広場と聖堂をもち、幾何学的で格子状の都市空間により構成されている。しかし平坦な地勢の広さに限界があった場合にも、不完全なまま都市は構築された。

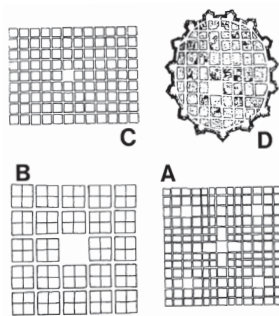


図3-6 『インド諸島の都市計画』
1521年

スペインは世界に都市を構築した。彼らが設計した都市は、そのほとんどが格子構造を内包していた。

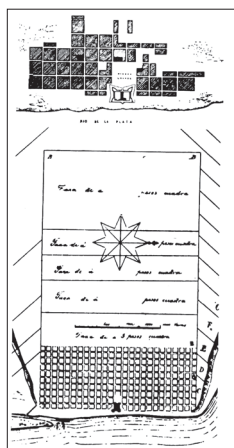
しかしこの都市は『インド諸島の都市計画』の事例とは本質的に異なっている。その理由はこれまでの都市の中心施設は都市空間においても中心に位置していた。このため正方形や円形などの都市は同心円状に外側に拡張されるのが常であった。しかしブエノスアイレスでは主要な都市施設である要塞が海岸に接して造られていた。両者は格子構造をとともに容しているために一見同じように見える。確かにブエノスアイレスの都市は格子状の空間構造を持つてはいたが、中心が存在していなかった。それは内陸に向かって、無限の延長が可能な都市構造をもっていたのである。こうした都市構造あるいは都市の拡張計画が可能であったのも、都市を構築した地勢が平原であったからであろう。あたかも無限に拡張ができるような都市は、実際には有り得ない。しかし理念としての都市構造は机上では可能だ。それを許容する地勢は平野であった。(布野修司『グリッド都市、スペイン植民都市の起源』京都大学学術出版会)

スペインやポルトガルに続いて世界を制覇し、連邦を結成したのはイギリスである。イギリス連邦の諸国は、国旗にイギリスの旗を組み込んでいる。大航海の時代にイギリスは世界に数多くの植民地を構築し都市を建設したが、それは海岸沿いの平坦な地勢においてであった。

現在のミャンマーの首都ヤンゴン(旧ラングーン)は、一八五二年の戦争後にイギリスの植民地となった。海岸に面した平坦な地域はイギリスのフレイザーにより設計された。その結果として、格子状の空間構造をもつ整然とした街並みが

図3-8 スペインの植民都市ブエノスアイレス、16世紀末(右)
急激な人口増加に対して、無限の拡張が可能な都市構造は、これまでのヨーロッパ世界では有り得なかった。中心性が欠如した無機的な都市が誕生した。

図3-9 イギリスの植民都市ヤンゴン、19世紀(左)
鉄道を挟んで海岸側には植民地特有の格子状の街区が形成されている。それに対して内陸側には旧来のアジアの有機的な都市空間が残されている。



生まれた。〔図3-9〕興味深いことはヤングンの象徴ともいえるシャエダゴーン・パゴダとスーレー・パゴダが、格子構造に組み込まれていることである。これは伝統的なミャンマーの仏教の世界観と、ヨーロッパの植民都市構造が融合されていることを意味する。現在ヤングンを訪れると、イギリス独特の赤い煉瓦で造られた建築の街並みを走る大通りの正面には、金色に輝くパゴダがアイストップとして都市景観を決定付けている。そしてこのパゴダ周辺だけは、植民地化される以前の、まだ仏教の世界観が都市を貫いていた時代の精神性を感じることができよう。〔ロバート・ホーム、布野修司訳『植えつけられた都市』京都大学学術出版会〕

合理的ともいえるアングロサクソンの人々は、都市に対する独特の感性を持っていたようだ。すなわち自然を支配するように自然界にはない幾何学的空間構造で全てを埋め尽くす意志である。それが端的に認められるのは、アメリカのニューヨークのマンハッタン島ではないだろうか。ここにはシンボリックな精神的な中心となるような建築物も広場も何もない。教会は超高層ビルのなかに埋もれ、街路は番号で呼ばれ、同じような格子状の街区が延々と続いている。〔図3-10〕

こうしたことは日本においても例外ではない。たとえば北海道では一八八六年から植民事業が始まった。ここには一〇〇間×一五〇間を小区画、三〇〇間四方を中区画、九〇〇間四方を大区画として格子状の街区が導入されている。広大な石狩平野ではいかなる中心も持たない無限の格子状構造が四方に延びる姿が認め

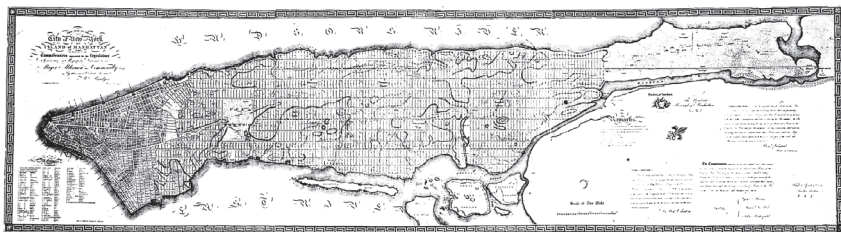


図3-10 ニューヨークのマンハッタン島

自然の条件を全て黙殺するような格子状都市空間が支配するアメリカの都市では 道路でさえ番号で命名されている。

られる。〔図3-11〕

また一九〇〇年当時日本が統治していた台湾では、一九一一年に台中市街地の都市計画がおこなわれた。その特徴は純粹な格子構造の都市街区から成り立っていることである。当時の都市計画では最も新しい手法を、日本の都市計画家たちは中国や台湾などの諸都市で実践していたのである。この格子状の都市構造は積極的に新しい都市計画へと導入されていた。〔図3-12〕

3. 円形をなす田園都市

正方形や格子状の都市空間に対して、一連の円形の空間構造をもつ都市が構想されていた。こうした正円は宇宙を象徴とする図像としてイタリア・ルネサンスの都市に、最も顕著に認められた。それは近代に至るユートピア的な都市の構想の歴史においても、円形は常に援用された。純粹な円形の都市の建設が可能となる必要条件とは、平坦な地勢である。その十分条件として求められるのは、都市理念であるといえるであろう。

イギリスでは国内植民地としてエーベネザー・ハワード（一八五〇～一九二八）が「田園都市」という理想都市の理念を、一八九八年に『明日―真の改革にいたる平和な道』として出版した。これは植民地ながら円形を成していることに特徴がある。それも完璧な同心円構造である。ハワードの田園都市は幾つかのダイアグラムとして概念が示された。人口は三万人が想定され、都市の土地

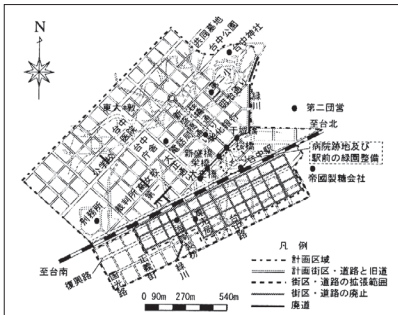


図3-12 台湾の台中市都市計画図、1911年
伝統的な都市空間に対して、格子構造を用いた都市計画は当時の最新の手法であり、狭い場所に対しても、強引に適用された。



図3-11 札幌市市街地図、1942年
北海道のような広大な地では、都市は拠所を地勢に求めることができなかった。そこでは抽象的な格子構造の都市空間が導入された。

は共同所有と考えられていることが特徴的だ。幅の広い並木道が設けられ、都市の中心部には、文化施設が計画されている。(エーベネザー・ハワード『明日の田園都市』鹿島出版会) [図3-13]

この田園都市は大都市から離れて、経済的にも自律し、自然が豊かな都市として構想されていた。ではなぜ円形なのであろうか。英国連邦の海外植民地は方形ではなかったのか。この田園都市をハワードが「ホーム・コロニー」ばかりでなく「衛星都市」と命名していたことからその理由が推察できるだろう。すなわち前者なら方形でもよいであろうが、後者が問題である。田園都市は大都市である惑星ロンドンの衛星として解釈されていたのだ。そうであるならば、同心円状の円形都市とは、プロトレマイオスの宇宙図の縮小された世界観を映したような姿であり、そのほうがダイアグラムとしてのオリジナリティが主張できると考えられる。近代の都市計画の原点といわれるこの田園都市もまたルネサンスからの歴史の延長線上に位置付けられる星辰都市といえるのではないだろうか。

このハワードの田園都市構想はドイツに大きな影響を与えた。20世紀初頭にはドイツにおいても田園都市協会が結成され、当時の近代建築家たちがイギリスの田園都市を見学に訪れた。そしてドイツにも数多くの田園都市を自称する都市が建設された。なかでも興味深いのは旧東ドイツに建設された「田園都市マルガ」(一九〇七〜一九一五)であろう。その外郭はほぼ完全な円形をなしている小さな都市で、地元のイルゼ炭鉱会社の社員寮として建設されたものだ。[図3-14]



図3-14 ドイツの田園都市マルガ、1915年
これほどあからさまに円形をなした都市は当時どこにも建設されなかった。平らな地勢が許容したものといえるであろう。

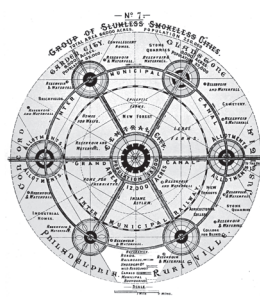


図3-13 ハワードの田園都市ダイアグラム、1898年
具体的に建設された最初の田園都市レッチワースでは、円形ばかりでなく幾何学的な空間造形は一切認められなかった。ダイアグラムはあくまで都市の理念を表象しているだけだ。

その特徴は中心の教会と広場を取り囲むように戸建風の住宅群が建っていることである。完成後に植えられた並木が円形の都市の輪郭を緑で包み込んでいる。しかしいくら調査しても、ここには宇宙や世界観といった理念が認められなかった。イギリスの田園都市構想は形骸化され、その純粋な円形だけがドイツへと伝えられたようである。

さらに興味深いのはイスラエルに幾つも建設されたキブツである。なかでも一九三〇年に建設されたキブツの「ナハラル」は、非常に興味深い。その特徴は円環状に配列された農場施設と、そこから放射状に区分されている農耕地である。全体は少し楕円型に歪んだ円環をなしている。〔図3-15〕このナハラルを設計したのはアリー・シャロンというユダヤ人建築家である。彼はドイツのバウハウス・ハンネス・マイヤーのもとで建築を学び祖国へもどつてイスラエルの建国運動である農業共同体キブツの建設に携わった。その背景にはイスラエルの建国理念を先導した思想家マルティン・ブーバーの存在が指摘できるであろう。興味深いことは彼が後の一九四五年に著した『もう一つの社会主義、ユートピアへの途』のなかで、ドイツ田園都市協会と深く関係をもったドイツ人思想家グスタフ・ランダウアーについて一章をさいていることであろう。キブツのナハラルには建国を目指した共同体の深い絆への意志を、円形の図像のなかに読み取ることができる。これが実現され得たのも、イスラエルの平坦な地勢のおかげなのである。

イギリスに生まれた田園都市思想は日本にも伝播した。それは私営鉄道の沿線



図3-16 田園調布、1918年
日本はいち早く欧米の近代都市の導入をしている。古くは北海道函館の五稜郭がある。それは江戸時代1864年に建設された。また田園調布もハワードが提唱してから20年後には日本で実現されている。

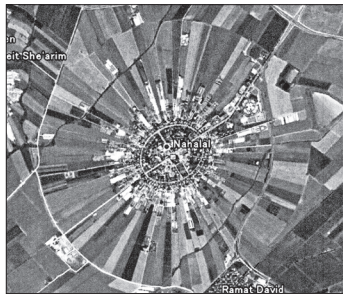


図3-15 イスラエルのキブツ「ナハラル」、1930年
ドイツで新しい共同体のあり方として検証された田園都市の理念は、ドイツよりもイスラエルの農業共同体キブツで実現された。

開発の手法として、換骨奪胎されて導入された。「田園調布」は半円形ながら、ハワードの都市構想を借用したような同心円状の都市構造をなしている。緑に包まれたその都市景観は、ドイツの田園都市マルガを彷彿とさせずにはおかない。

（山口廣『郊外住宅地の系譜、東京の田園ユートピア』鹿島出版会、一九八七年）〔図3-16〕

4. 一望監視装置・パノプティコンと都市空間

都市とは、ある意味では、国家管理システムであるといえるのではないだろうか。スペインやイギリスの海外植民地の都市の空間構造は幾何学的格子状プランが特徴的であった。それは土地の合理的利用や移動の利便性もさることながら、宗主国が植民地を管理支配するために、最も適した空間構造であったといえるであろう。視線が常に貫通している道路の空間とは、必然的に人々を萎縮させるような監視システムでもあるからだ。たとえばアメリカの現ジョージア州サヴァナは18世紀のイギリス人が入植して建設した植民地である。その無限に拡張できる格子状の都市空間とはまさに管理するための空間といえないだろうか。〔図3-17〕

しかし規模が小さい管理空間としては円形のほうが合理的かもしれない。それたとえばベルサイユ宮殿にルイ14世が造らせた異国趣味の動物飼育場が参考になるであろう。その空間の特徴は、中央の八角形の管理棟を中心として放射状に動物の園舎が設けられていたことである。〔図3-18〕国王は二階の窓から動物を

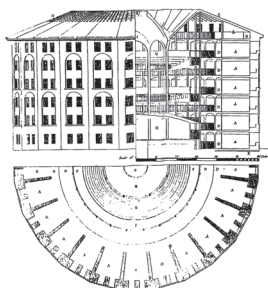


図3-19 ジェレミー・ベンサムのパノプティコン、18世紀
功利主義の法律家は最大多数の幸福が実現され得る社会のために刑務所を考案した。しかしここに内在する一望監視空間のシステムは近代監視社会を表象するものとなった。

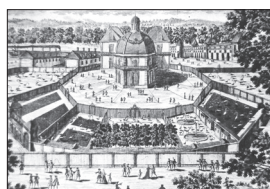


図3-18 ベルサイユ宮殿の動物飼育場、17世紀
全てを一望できる監視システムとして、円形の空間は最も合理的である。

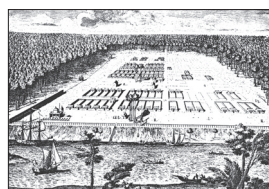


図3-17 アメリカの現ジョージア州サヴァナ、18世紀
植民地の幾何学的な空間構成は、監視システムが空間化されたものとして解釈できるであろう。それは神の秩序の表現ではない。なぜならばそこには宇宙がないからである。

見渡すことができた。

この動物飼育場について、現代思想家ミッシェル・フーコーは『監獄の誕生』のなかで、法律家ジェレミー・ベンサムが提案した刑務所であるパノプティコンと同じ空間構造を持つていることを指摘している。すなわち動物飼育場の国王を看守に置き換え、動物を囚人に置き換えれば、そのまま監獄になるというのである。(ミッシェル・フーコー『監獄の誕生』新潮社)〔図3-19〕

すなわち小規模な管理システムの空間のためには、管理する中心を持つ円形が最適である。しかし規模が大きくなると管理できる限界を越えてしまう。そのため植民地のような都市規模の管理システムとしては、軸状の格子システムが援用されているのである。その場合には、管理する者が移動することにより成立するそれを実証するように、大規模化された刑務所では、円形ではなく中廊下型になっていることに気付くであろう。

この動物飼育場と監獄を貫く空間原理であるパノプティコンは、近代管理社会を象徴するものであることをフーコーは指摘した。そしてそれが近代の病院建築の空間のなかにも顕現しているというのだ。たとえば一七七四年にパリに建設された私立病院では、中央部から六本の病棟が放射状に延び、円形の病棟と繋がり、車輪のような空間構造をなしていた。〔図3-20〕あるいは一七八四年にウィーンに建てられた精神病院は、中央部に看守所を配置した円筒形の空間構造を持っていた。〔図3-21〕

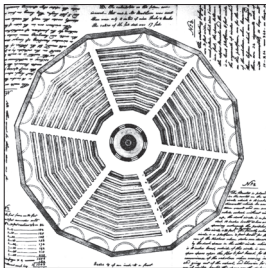


図3-22 ベンサムが提案したレストマティア・スクール、1815年
一人の人間が監理できる人数には限界がある。このため学校の教室や刑務所の多人数を収容する建築などでは、空間の規模や形態は酷似してくる。

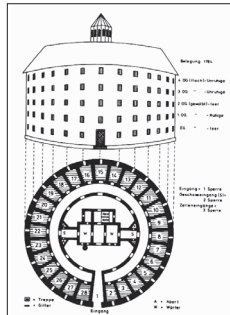


図3-21 ウィーン精神病院、1784年
この精神病院では、中央部に看守所をおいた円筒形の空間構造を持っていた。

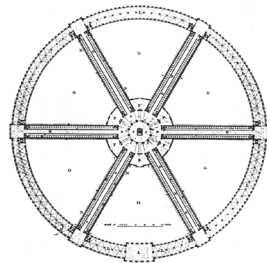


図3-20 パリに建設された私立病院、1774年
現在でも病院のナースステーションは病室群の中心に配置され、患者の緊急の容体の変化に対応できるように、監理体制を体現したものとなっている。

そう考えると、ベンサムが設計した学校の空間構造が興味深い。一八一五年にベンサムにより提案された「クレストマティア・スクール」は先生が生徒を管理指導するという機能を持つている。このためパノプティコンへと通底するような空間構造を内在させていることを示している。このような一望監視の空間構造は、当時の監獄や病院ばかりではなく孤児院や学校などにも見いだせるかもしれない。（五十嵐太郎・大川信行『ビルディングタイプの解剖学』王国社）〔図3-22〕

ベンサムの特異な監獄であるパノプティコンという建築はキューバのピノス島に廃墟として現在も残されている。〔図3-23〕この空間はトップライトを除けば独房からの光だけが眩く光っている。これは明るくして管理するのではない。それぞれの独房にいる囚人を、逆光で影を作りだすことが目的なのだ。その影が動くかどうかを、中央の看守が監視している。どれほど多くの囚人がいたとしても、一人の看守がいれば十分監視できる。いや、フーコーはさらに空間の本質を指摘する。じつは囚人からは中央の監視塔に看守がいるかどうかは分からないのである。すなわち極端に言うならば、このパノプティコンの空間構造さえあれば、中央の監視塔には看守がいなくても監視システムは機能するというのだ。中央の小さな灯台のような監視塔は、監獄であることを考えなければ、あたかも夜空に輝く星々を見つめる天文台やプラネタリウムのようである。しかしそこに浮上するのは、権力者のもとで生まれた歪んだ宇宙の姿である。

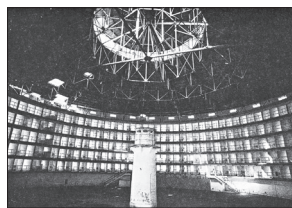


図3-24 キューバのピノス島のパノプティコンの内観
実はこの独房は単なるニッチであって扉がない。囚人は自由に逃げることができたはずだ。しかし少しでも動く囚人は容赦なく射殺された。

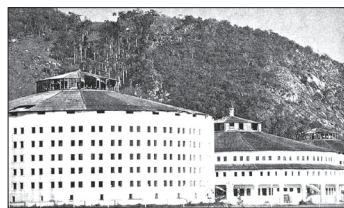


図3-23 キューバのピノス島のパノプティコンの外観
大きな円筒形の体育館のような監獄建築が数棟建ち並んでいる。

第四章 台地

——七つの台地で造られた都市——



図4-1 パルテノン神殿 ギリシャのアクロポリス

現在のアテネの街を訪ねると、市街から遠くパルテノン神殿の建つアクロポリスを望むことができる。このアクロポリスという巨大な岩のような台地の上には、紀元前6世紀頃までに大神殿が建立された。隣接するアレオパゴスの丘には裁判所が置かれた。アッティカ平野の中心に位置するアテネにおいて海拔一五六メートルのアクロポリスは断崖に囲まれた構造をなしており、視覚上からばかりでなく、精神性においてもアテネという都市を象徴するものとなっている。

その二つの丘の北側の低い市街地にはアゴラが造られた。この広場は政治、経済、文化の中心地であり都市生活の中核であった。またその北東には、富士山のようなシルエットを持つリカベットスの丘がある。この丘を登るようにスプロールした市街地が広がっている。

ギリシャの神々が支配したアテネという宗教都市では、台地の上に神殿が建立され、低い地勢にアゴラが建設された。アテネでは、台地という特徴的な地勢が都市を特徴付けている。

1. 七つの台地の都市1 ローマ

永遠の都ローマは、世界でも魅力的な都市の一つと言われていることに異論はないであろう。コロッセオのような古代ローマの建築の遺跡が今も残り、さらにルネサンスの建築や絵画芸術、そして17世紀のバロックの時代にはダイナミックなインテリアを持つ教会建築が建てられるなど、ローマを訪れる人々を魅了してやまない。しかし最も注目したいのは、ローマという都市全体が劇場空間と例えてもよいようなダイナミックな都市空間を内包していることである。それが都市の魅力を倍増させた。

バロック時代のローマの都市空間の特徴は、真つ直ぐに走る幅広い道路の建設により生み出された。大小あわせて15本ほどの直線路が中世の都市を貫くように建設された。これは当時の法王シクストゥスV世（一五八六～一五九〇）が先導して進めた都市計画の成果と言われている。〔図4-2〕

例えばサンタ・マリア・マジョーレ聖堂からスペイン広場を結ぶシステリーナ通りは、こうして建設されたバロックの道路の代表的な通りの一つである。バロックの都市空間の特徴とはシステリーナ通りやコルン通り、そしてクイリナーレ通りのように、道路の両端にアイストップとなる記念碑的な建築あるいは噴水やオベリスクなどが設けられていることにある。人々は常に正面にモニュメンタルな記念碑を見ながら、ローマの都市を移動していたのである。こうしてバロックの時代には古代ローマの記念碑があらためて人々の注目を浴びるようになった。

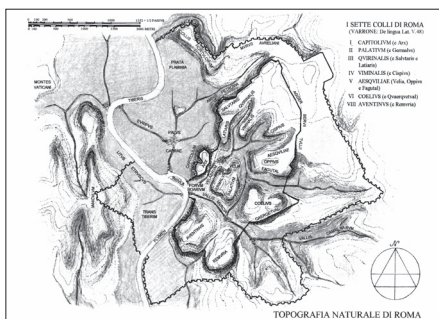


図4-3 七つの台地からなるローマの都市
永遠の都ローマはカピトリノの丘、パラティーノの丘、アヴェンティノの丘、クイリナーレの丘、ヴィミナーレの丘、エスキリーノの丘そしてチェリオの丘の七つの丘から成っている。



図4-2 16世紀ローマに造られた直線道路
法王シクストゥスV世（1586-1590）はバロック的な直線道路を計画し、中世の都市構造を大きく変え、現在のローマの都市空間の骨格を形成した。

法王シクストゥスV世は古代のモニュメントを、キリスト教の中心都市ローマのなかに再構成し、ローマを光輝に満ちた聖なる都市へと造り上げていったのである。(長尾重武『ローマ、バロックの劇場都市』丸善)

ところでこのバロックの大通りを実際に歩いてみると、その坂道の連続に気付かされることであろう。つまりローマという都市は平坦な地勢から成り立っていないのである。このため机上で計画されたバロック時代に造られた直線の道路は、地勢などおかまいなく丘や谷を横断するようにアップダウンを繰り返しているのだ。その最も激しいのがこのシステリーナ通りであるといえるであろう。

じつは永遠の都ローマは七つの丘からなっていることが知られている。すなわちカピトリノの丘、パラティーノの丘、アヴェンティーノの丘、クイリナーレの丘、ヴィミナーレの丘、エスキリーノの丘そしてチエリオの丘の七つである。〔図4-3〕そしてその間にテヴェレ谷があり、中央にテヴェレ川が大きく蛇行して流れているのである。このテヴェレの谷と西の丘陵地との高低差は約50メートル、また東の丘陵地との高低差は約25メートルである。古代ローマではこの丘の上に、我々でもよく知っているような多くの神殿や宮殿が建てられたのである。

〔図4-4、5〕

ところで法王シクストゥス五世が建てさせたクイリナーレ宮やモンタルト荘というヴィラはそれぞれクイリナーレの丘とエスキリーノの丘の上に位置する。ローマでは反宗教改革の時代にテヴェレ川に沿って丘の上にはヴィラ・メデイチ、

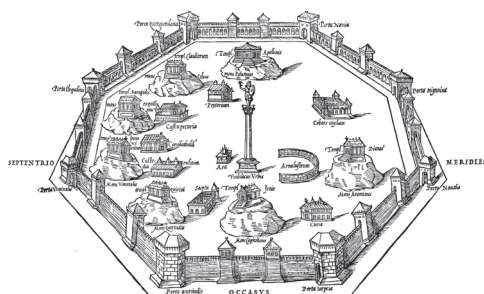


図4-5 古代都市ローマのイメージ図2、1527年
セルウィウス・トゥリウス時代のローマを描いた図。
この図像が興味深いのは、八角形の城壁のなかに、そ
の上に神殿が建てられた七つの丘が象徴的に描かれて
いることである。

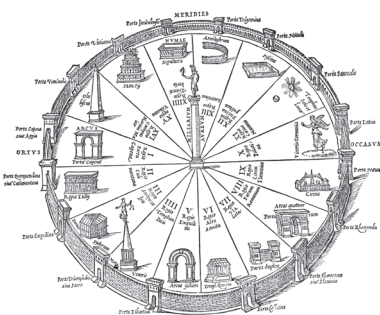


図4-4 古代都市ローマのイメージ図1、1527年
アウグストゥス時代のローマのイメージを描いた
図。ここでは丸い城壁に囲まれており、それを16
のモニュメンタルな建造物で象徴させ、ローマと
いう都市が持つ当時のイメージが描かれている。

ヴィラ・クイリナーレなどのヴィラが次々と建てられた歴史がある。

ところで有名なスペイン階段とは、この谷とピンチョの丘を結ぶ結接点である。このピンチョの丘の上にはヴィラ・メデイチやヴィラ・ボルゲーゼが建てられた。この丘から西の方角を臨むと、ポポロ広場を見下ろすことができるばかりではない。テヴェレ川を挟んで対岸の丘陵に建つヴァティカンを含めてローマの都市の地平線がパノラマ状に広がって見えるのである。そしてこの丘の上の栈敷席から貴族たちは、谷で展開する人々の都市の舞台を見下ろしていたのだ。谷と丘という高低差はそのまま社会のヒエラルキーと重なっていた。〔図4-6〕

こうしてヴィラとその庭園は、谷を囲むようにして見下ろすと同時に、一方では水平に台地の上同士で相互に視覚的に結ばれていたのだ。庭園の規模が大きくなるバロックの時代には庭園にも軸線が組み込まれるようになった。そしてこの庭園の軸線である視線は谷の上空を貫いて、特定のヴィラの庭園の軸線と対応するようになった。地上のバロックの大通りとは別に、ローマでは台地の上にもう一つの軸線で構成された視覚構造が構築され、ヴィラ同士が強く相互に結び付けられていたのである。(P・ファン・デル・レー『イタリアのヴィラと庭園』鹿島出版会)〔図4-7〕

ヴィラの位置は古代ローマの都市構造と重合していた。すなわち古代の大動脈であるアッピア街道やフラミア街道そしてアウレリア街道は、丘陵の上を走っていたのである。街道に沿って多くのヴィラと庭園がバロックの時代に建てられ



図4-6 スペイン階段
有名なスペイン階段はこの谷とピンチョの丘を結ぶ結接点である。この丘の上には、ヴィラ・メデイチやヴィラ・ボルゲーゼが建てられた。この丘からは、ポポロ広場を見下ろすことができる。

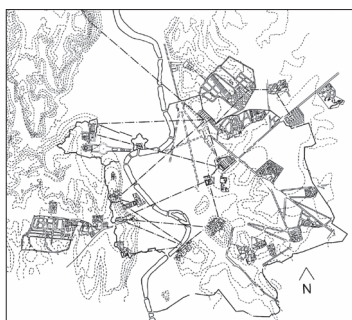


図4-7 台地に造られたヴィラを結ぶ視線のネットワーク
ローマではバロックの時代になるとヴィラからの視線は、特定のヴィラと対応するようになった。ローマという都市は、軸線が生み出す眺望の視覚のネットワークにより結び付けられていた。

たのだ。その理由は、かつて不毛であった丘陵地帯はローマ時代の水道橋が改修され、水の供給が可能となっていたからである。

ところで古代ローマの都市の範囲はバロック時代よりも狭かった。古代ローマはアウレリアの市壁の内側であり、丘で囲まれた谷を中央に内包し、丘陵がその周囲を取り巻いていた範囲であったのだ。〔図4-8〕この古代ローマの起源とはフォロ・ロマーノである。それはパラティーノの丘の上に構築された。この丘には古代ローマ時代にドミティアヌス帝の庭園が造られた。現在その遺跡を訪れると、そこから大競技場跡のチルコ・マッシモを見下ろすことができる。谷と丘の高低差を体感出来るであろう。またこの丘の端部には有名なカンピドリオ広場がある。そこへ至る階段は長大であり、谷と丘の高低差を視覚的によく示している。実際にカンピドリオ広場へ階段を登ることにより体感してみると、ローマの地勢をよく理解できるであろう。〔図4-9〕

すでに帝政期のローマでは谷と丘という地勢により、社会的な階層の生活領域が棲み分けられていた。谷は水に恵まれ多様な人々が街を造って住んでいた。その市民のための娯楽施設であった大競技場やコロッセオが谷に造られた。現在のヴェネツィア広場はローマの谷の中心部にあり、その近くには市民のための市場が設けられていた。（板屋リョク『古代ローマの建築家たち』丸善〔図4-10〕

こうしてローマの都市空間は、古代からバロックの時代にかけて、七つの丘により特徴付けられていたのである。



図4-9 台地の上のカンピドリオ広場（中）

パラティーノの丘の上に構築されたカンピドリオ広場へ至る階段は、まさに谷と台地からなるローマの都市構造の高低落差を視覚的によく表している。

図4-10 谷に建てられたコロッセオ（左）

ローマでは谷と丘という地勢により、社会的な階層の生活領域が棲み分けられていた。谷に住む市民の娯楽施設として大競技場やコロッセオが谷に造られた。



図4-8 共和時代のローマの城壁と拡張された城壁（右）

最初のローマの都市の範囲は七つの台地部分を取り囲んだ城壁（内側）であった。その後周辺部とテヴェレ川を取り込んで、拡張された城壁（外側）が構築された。

2. 七つの台地の都市2 イスタンブール

アジア大陸とヨーロッパ大陸の接点に位置する都市イスタンブールはローマと同じように七つの台地により構成されている都市として有名である。淡いブルーのボスポラス海峡を臨む、ヨーロッパ大陸側の東端に位置するイスタンブールは数多くのモスクがあることで知られた宗教都市の一つである。そこを訪れると、近代都市ではすでに失われた個性豊かな都市空間やランドスケープを今でも体験することができる。〔図4-11〕

イスタンブールは、過去にはビザンチンそしてコンスタンチノープルへと次々に名称を変えて現在に至る歴史が重層化された都市である。この都市が興味深いのは、二千数百年にわたり東洋と西洋という文化が出会った歴史的都市であったからである。東ローマ帝国の正当な後継者であるビザンツ帝国はキリスト教国家であった。その首都ビザンチンは4世紀にはローマ皇帝コンスタンティヌス1世により10倍の規模へと拡張され、その名称もコンスタンチノープルに改称された。そして千年間にわたり栄華を誇っていた。しかしついに一四五三年にオスマン・トルコの攻撃により陥落し、イスラム国家へと転じたのである。そして現在のよう

〔図4-12〕

にイスタンブールと呼ばれるようになった。オスマン軍を率いたメフメットII世は、首都の名称をコンスタンチノープルからイスタンブール（永遠の都）に改めた。そしてこの新しい首都に、コンスタンチノープルの征服者（ファーターティフ）として「征服者のモスク」を意味するファ



図4-11 イスタンブールのモスクが織り成す都市景観

これほど個性のある景観を持つ都市は世界でも類を見ないであろう。地勢と建築が、一体となった魅惑的な都市のシルエットは世界の人々を惹き付けてやまない。

ーティフ・ジャーミー（一四六三～一四七〇）を建立した。このモスクには八つのイスラム学院と八つの小イスラム学院と図書館や救貧求職施設、そして病院が併設されていた。このモスクの周辺は、現在でも最もムスリム・トルコの文化を色濃く残す街区の一つとなっている。このモスクから北に向かうダルサカファ通りでは、現在毎週水曜日に大規模な門前市が開かれている。そこには約三〇〇〇を越える仮設店舗が軒を連ね、まさに壮観である。しかしそこには一軒の土産物店もない。地元住民の生活用品が中心であり、観光客は全く見あたらない。そこは完全なムスリム・トルコの世界なのである。

このファーティフ・ジャーミーとは、イスタンブールに創建された最初の巨大なモスクであった。しかし一七六六年に地震で倒壊し、現在のものはその後再建されたものである。ところでこのモスクの建っている地勢をみると、そこは台地の上であることが分かる。全ての道はこのモスクから緩く下り坂となっている。

イスタンブールの地勢図を改めて調べてみると起伏が豊かな地勢を持つ都市であることが判る。なだらかな地勢ではなく、金角湾とボスポラス海峡に挟まれたこの都市には、小高い丘が幾つか認められる。そしてファーティフ・ジャーミーはそのような小さな丘の上に位置していることが分かる。そして他の丘の上にも代表的なモスクが建てられているのだ。〔図4-13〕

メフメットII世はコンスタンチノープル陥落直後に、それまでカトリック教会として使われていたハギヤ・ソフィア大聖堂（三六〇）で、この教会をモスクに



図4-13 イスタンブールの等高線図

等高線によって地勢が描かれたイスタンブールの街の地図からは、起伏が豊かな大地の姿を読み取ることができる。その丘の上にはきまってモスクが建設された。



図4-12 イスタンブール市街地図

一般的な近代市街地図では、幹線道路と入り組んだ路地から構成された姿に描かれている。しかしここでは地勢が表現されていないために、都市の本質が見えてこない。

する宣言をおこなった。イスラム教の僧を引き連れて説教壇に登ったメフメットⅡ世は、アラールへの祈りを捧げたのである。このハギヤ・ソフィア大聖堂もまた台地の上に建てられている。〔図4-14〕その北側の台地には有名なトプカプ宮殿（一四六七）が建ち〔図4-15〕、その南側の台地には、内部の青色のイズニック・タイルに因んで通称ブルー・モスクと呼ばれているスルタン・アフメット・ジャーミー（一六〇九〜一六一六）が聳え建っている。六本もミナレットを持つモスクはこれ以外に存在しない。〔図4-16〕イスタンブールの街の中心部の台地の上には、中央にイスタンブール大学があり、その北側には巨大なスレイマニエ・ジャーミー（一五五〇〜一五五八）と、さらに南端にはベヤズィット・ジャーミー（一五〇一〜一五〇六）が聳えている。さらにイスタンブールの西南端の台地の上には病院やモスクが建っている。

このようにイスタンブールの地盤のよい七つの台地の上には、モスクや大学や病院など重要な都市施設が建てられており、イスタンブールの都市構造を決定付けている。そればかりではない。モスクという建築はその構造から都市のシルエットさえも決定付けており、イスタンブールの都市のランドスケープを特異なものにしているのである。たとえば金角湾に架かるガラタ橋の辺りから街を見上げると、手前の小さなリュステム・パシャ・ジャーミー（一五六二）に覆い被さるように、その奥の巨大なスレイマニエ・ジャーミー（一五五七）が聳え建っているのが見える。台地にたつ高さ48メートルを誇るスレイマニエ・ジャーミーは、



図4-15 トプカプ宮殿、1478年
メフメットⅡ世はコンスタンチノーブルの征服後、マルマラ海へ突き出た小高い丘のような岬の上に、新たな宮殿を造らせた。



図4-14 ハギヤ・ソフィア大聖堂、360年
本来ビザンツ帝国のカトリック教会の正教徒たちの信仰の中心の場であった。ドームまでの高さは56メートルを誇り、イスタンブール最大の歴史的建造物である。コンスタンチノーブル陥落直後に、ミナレットが建設され、イスラム教徒のためのモスクとなった。

直径27メートルのドームを持っているが、それはあたかも台地がそのまま造山運動で隆起したかのようにさえ見えて圧巻である。

モスクの持つ独特のシルエットは、ファアティフ・ジャミーを設計したといわれる宮廷建築家ミマル・スイナン（二四九五〜一五八八）により発案されたものである。周囲の半球ドームが中央の巨大なドームを同心円状に囲んで支える構造となっている。それによりモスクは幾つもの大きさのドームにより構成されたピラミッド型の複合建築となった。〔図4-17〕そしてそれが建築のシルエットを決定付けたばかりではなかった。イスタンブールにはモスクに匹敵するような近代建築物がまったくない。このため七つの台地に建立された巨大なモスクが、イスタンブールという都市全体のスカイラインを決定付けているのだ。〔図4-18〕

建築という人間の営為が都市のシルエットを決定付けていることを実感したのは、隣接する街を見たときであつた。イスタンブールと金角湾を挟んで隣接するストルージュという街は、全体が湾曲する金角湾に飛び出すように膨らみ、小山のような地勢をなしている。そしてその中央には小山を延長させたようにドームを載せたモスクが聳えている。裾野からこの住宅群が小山を埋め尽くし、頂上のモスクへとつながっており、街全体が一体的に見える。遠望するとこの街の姿は全体が一つの巨大なモスクのようにさえ見えるのである。ここには宗教都市として地勢と、建築と信仰が融合しており、すなわち空間と精神が、不可分となった世界観が顕現していた。〔図4-19〕

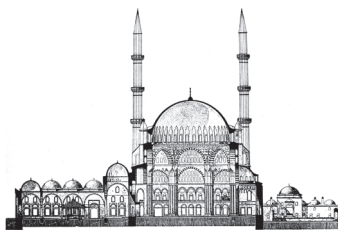


図4-17 セリミエ・ジャーミーの断面図
入道雲のように幾つもの大小のドームが、折り重なり隆起するような断面構造をもつモスクの空間は、内部にもそのまま現れている。独特の構造力学がこれほど魅惑的なインテリアと外観を生み出している建築は他には類をみない。



図4-16 スルタン・アフメット・ジャーミー、1616年
オスマン朝の第14代スルタン、アフメットⅡ世が建立した。イスタンブールの街の東端に連なる台地には、北からトプカプ宮殿、ハギヤ・ソフィア大聖堂、そしてこの通称ブルー・モスクが、一直線に並んでいる。その姿は圧巻であり、イスタンブールの都市のイメージをばかりでなく、ランドスケープも決定付けている。

3. 七つの台地の都市3 東京

ローマやイスタンブールとともに東京という都市もまた七つの台地により造られた都市の一つであるといえるであろう。まさに江戸城があった皇居を取り囲むように、上野台地、本郷台地、小石川・目白台地、牛込台地、四ツ谷・麹町台地、赤坂・麻布台地そして芝・白金台地の七つの台地がある。この台地に挟まれたように、あるいは東京という大きな一つの台地を、幾つもの小さな台地へと切り刻むように、不忍谷、指ヶ谷、平川谷、溜池谷、古川谷が奥深くまで入り込んでいく。このため東京は台地と谷が複雑に入り組んだ起伏の豊かな地勢からなっている都市であるといえるであろう。〔図4-20〕

たとえば上野台地にはかつて寛永寺が建立されていた。これは江戸城の鬼門に位置しており、江戸を邪気から守る重要な寺であった。現在は国立博物館が建てられている。本郷台地の上には東京大学のキャンパスが君臨している。牛込台地には現在防衛省が、四ツ谷・麹町台地には上智大学とホテル・ニューオータニが、赤坂・麻布台地には東京タワーが建っている。東京の台地の上には、都市文化の主要な公共施設が建てられていることが分かるであろう。

こうした七つの台地の東の先端は、東京湾に向かって延びており、それは一列に並ぶように顔を揃えているような地勢をなしている。江戸時代には江戸湊から見ると、この台地の先端が立ち並んでいるのが見えた。事実、上野台地は上野の山、本郷台地は神田山、四ツ谷・麹町台地は紅葉山、赤坂・麻布台地は愛宕山、

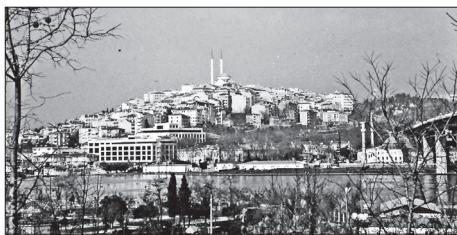


図4-19 ストルージェの街とモスク
ストルージェの街の中央には、小山を延長させたように、ドームを載せたモスクが聳えている。遠望するとこの街の姿は、全体があたかも一つの巨大なモスクのように見える。



図4-18 イスタンブールのシルエットを決定付けているモスク

芝・白金台地は八ツ山あるいは御殿山と呼ばれていたことでも分かるであろう。江戸時代には江戸湊の海岸には、幾つもの山々が連なっており、緑の帯を形成していた。〔図4-21〕

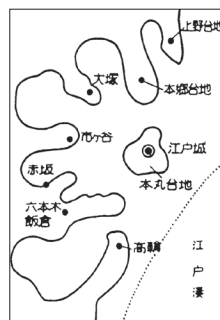
こうした台地の端部を山と呼ぶのは、その地理的な外観ばかりが理由ではなかったようである。谷などの低地にあった下町と、高級な住宅地があった山の手が対比された結果、山という名称に対する高級感のイメージが形成された。そして山の付く地名が次々と生み出された。明治末から私鉄が郊外へ延びて宅地開発が進むと、山もないのに郊外の駅名には好んで山の付く名前がつけられた。たとえば大岡山、久我山、代官山、八幡山、浜田山といった駅名はその代表的なものである。（鈴木理生『東京の地理がわかる事典』日本実業出版社）

ところで台地から見下ろすと、谷へと降りる坂道の正面には、遠く江戸湊を望むことができたのだ。多くの坂道が海に向かっていった。そうした坂道には現在も潮見坂あるいは汐見坂という坂の名称が残されているので確認できる。たとえば広重の『江戸名所百景』の第二十九葉に「霞かせ紀」という作品がある。これは四ツ谷・麴町台地から江戸湊へと下る坂道の一つである霞が関坂を描いたものである。その坂の正面には確かに江戸湊が描かれている。この坂と並行して南側には潮見坂や三年坂がある。残念ながら江戸湊はその後埋立てがおこなわれ、現在ではこの坂から海を望むことはできない。（『今とむかし、廣重名所江戸百景帖』

暮らしの手帳社）〔図4-22〕

図4-20 七つの台地からなる東京（右）
東京は扁平な地勢ではない。台地と谷が、複雑に入り組んだ、起伏の豊かな都市空間から成り立っている。そこには上野台地、本郷台地、小石川・目白台地、牛込台地、四ツ谷・麴町台地、赤坂・麻布台地そして芝・白金台地の七つの台地がある。

図4-21 江戸湊を囲んでいた山々（左）
埋め立てが行われていない江戸時代には、江戸湊は街のすぐそこまで迫っていた。海拔25メートル程度の台地の端部であっても、海からは山のようにそそり立ち連なっていた。



江戸の坂道で特徴的なのは、この潮見坂とともに富士見坂の存在である。台地から西側の谷へと下る幾つかの坂道には富士山を正面に捉えているものがある。東京には現在でも二〇カ所程度の富士見坂の地名が残っている。中でも一番有名な坂は上野の台地から西へ下る富士見坂であろう。現代でも「夕焼けダンダン」の愛称を持つこの富士見坂は、夕陽が富士山の山頂に沈む美しい風景を江戸時代から楽しむ人々がいたことを現代に伝えている。「図4-23」また江戸の台地から遠く北東側に筑波山が見えたようだ。西の富士山と東の筑波山は、江戸の都市のランドスケープを決定付けていたのである。

江戸時代にはこうして台地と谷を結ぶ坂道からの眺望が、都市の風景を決定付けていた。台地は都市を遠望し俯瞰する視点を人々に与えた。山や崎、谷や窪に因んだ地名とは、例えば大崎や大久保、千駄ヶ谷といったものは、東京の地勢から生まれたものといえるであろう。

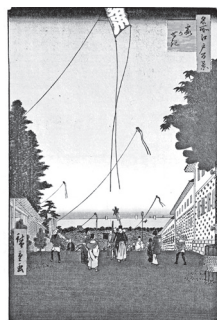
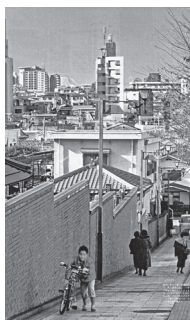
4. 台地が生み出す豊かな都市空間

世界にも名だたる都市ローマとイスタンブールと東京という魅力的な都市が、七つの台地から成り立っていたのは、偶然ではないのかもしれない。それぞれの都市の空間的な魅力を比較してみるならば、台地が都市空間に果たした役割にはそれぞれが個性をもっており、異なることに気付く。しかしながらどの都市にも豊かな都市空間が内包されていることを指摘できるであろう。多くの台地と谷が

図4-22 広重『江戸名所百景』第29葉「霞かせ紀」(右)
江戸時代の坂道のなかには、江戸湊を見通せたことから潮見坂と命名された坂が幾つもあった。そして霞が関坂も同様に江戸湊へと眺望が開けた典型的な坂道の一つであった。

図4-23 上野台地の富士見坂 (左)

西日暮里に近いこの富士見坂は、正面に、富士山が見えることで有名である。富士山は、江戸時代には筑波山とともに江戸の都市景観を決定付けていた。



織り成す地勢の高低差、あるいはそこから生まれたフィヨルドのような複雑な巒のような台地の地形とは、歴史が淀み、視線が交錯し、人々の多様な生活が受容される可能性を都市に与えていたという意味で、人々が生活する都市空間を豊かなものにしてきたといえるのではないだろうか。

第五章 海川

——アーキペラゴの海洋都市——

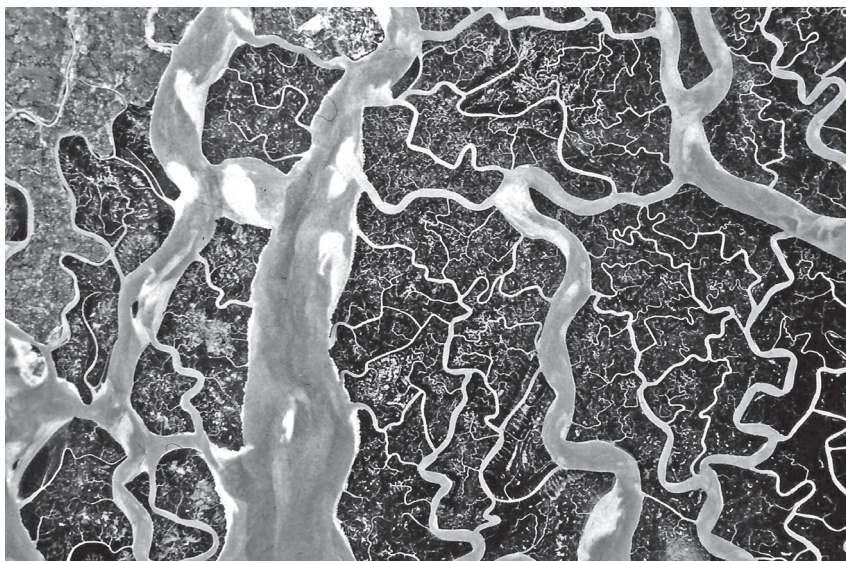


図5―1 ガンジス河河口デルタ バングラデシユ

都市を考えると、その大前提となっているのは大地であつた。ヨーロッパ大陸やアメリカ大陸など広大な大地が前提としてあつた。都市はそこに構築されるという暗黙の了解があつた。ここでは河川は大陸の小さな裂け目に過ぎず、海洋は大陸や都市の縁を示すものにならず、その存在は相対的に従属したものとして認識されていた。

しかしガンジス河河口デルタの写真を初めて見たとき、この大前提であつた大地への信頼は脆くも衝き崩されてしまった。陸地と海洋が対等に自分の存在の主張を止めずに対峙している。もう一つの自然の宝庫である海洋は、都市を語るときにどうして排除されてきたのであろうか。そうした素朴な疑問に対し、もう一度あらためて海あるいは川から都市について考えてみることは、都市というものを理解するうえで有益であると思われた。

そうだ、日本をはじめとする東アジア諸国は、島国であり海洋国家であつたのではないか。どうして西洋の大陸に構築された都市だけを特化して語る必要があるのだろうか。世界の都市を相対化するためにも、海や川から都市というものを再検証してみようと考えた。そこには別の世界観があるはずだ。

刻んできた。移動の手段は今も水上バスだ。幾つもの海路が島々を結んでいる。もちろんヴェネツィア本島に限っては歩いて移動できる。運河と道路はともに移動の主要な手段だ。地図を眺めてみると、運河と街路が並行しているところが無いのに気付いた。すなわち運河と街路は交わることがなく、同じ都市空間にあるように見えても、別々の空間として構成されていることが分かる。両者の密度はほとんど変わらない。しかし別々の二つの系統の空間のネットワークが重ね合わされているのがヴェネツィアという都市空間の面白いところである。すなわち大地と海洋が対等の関係にあるのだ。[図5-3]

ではここで両者が出会うのであるうか。それは橋である。運河と街路は直交して橋という空間装置で結ばれている。このとき運河が街路に優先しているため、橋を渡るときは必ず階段を登らなくてはならない。その下をゴンドラやボートが航行する。両者の出会う場所は人や物が乗り降りして一番華やかな場所となる。ヴェネツィアで最も人々が集まるのはカナル・グランデに架かるリアルト橋周辺である。土産物店が軒を連ね、観光客が絶えることはない。街路は人が流れる川であり、運河は物資が流れる道路でもある。

この運河と街路に挟まれたところに建築が建てられているといえるであろう。このため建築には街路に面したところにも、運河に面したところにも入口が設けられている。たとえばカナル・グランデに面して多くの貴族の館や教会が建てられている。それは14世紀から18世紀にかけて建てられたものである。ビザンチン

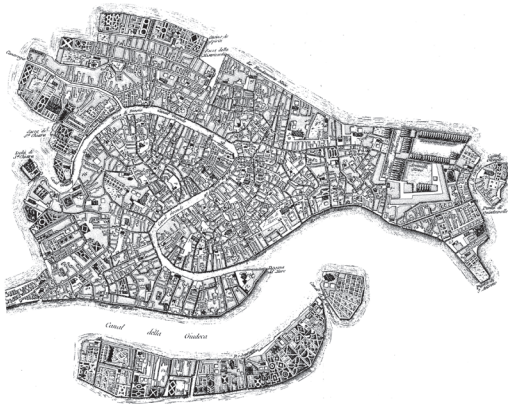


図5-3 ヴェネツィアの市街地図

ヴェネツィアでは、運河のネットワークと街路のネットワークが、重複することなく、重なり合っている。両者は橋で出会う。橋は海洋都市で重要な空間装置となる。

様式の影響を受けた初期ゴシック様式からルネサンスそしてバロック様式の、贅を競うかのような壮麗な建築が歴史を刻むように、大運河の顔となつて建ち並んでいる。その光景は圧巻である。こうした建築では、その正面を道路ではなく、運河側に向けて造られていることがわかる。〔図5-4〕

ラグーナは天然の要塞である。このためヴェネツィアは城壁という鎧兜で自身を被うことなく外洋へ開かれた都市を構築した。それは中世からヴェネツィアの水上で行われてきた象徴的儀礼である「海との結婚（スボザリーツィオ・デル・マーレ）」という華麗な祭礼の名称からも理解できるであろう。ヴェネツィアはラグーナという内的世界のなかでは、最も魅惑的な世界観を内包する都市といえるであろう。（陣内秀信『ヴェネツィア』講談社）このラグーナの中央に浮かぶヴェネツィアを、海洋が取り囲み、その周縁をさらに陸地が取り囲んでいるような同心円状の世界観が形成された。〔図5-5〕それはまさにドゴン族の世界観や、東アジアの世界観とよく似ている。ヴェネツィアもまた中世からのT O 地図のような、宇宙を構成する一つの小さな宇宙を内包していた。

2. 運河の都市アムステルダム

アムステルダムはその都市の名が示しているようにダムによって造られた都市である。ロッテルダムといったその都市名にダムがつくオランダの諸都市は、この国が海面下にあり、ダムによって水没からまぬがれている国であることを暗に



図5-4 カナル・グランデに面して建つ貴族の館（右）
ヴェネツィアの大通りとは島の中央に蛇行する大運河カナル・グランデである。壮麗な商館が両側に並ぶ。運河からの景観は圧巻である。

図5-5 ラグーナのヴェネツィア（左）
この概念地図には、ヴェネツィアの世界観がよく現れている。それ以外の島は宇宙モデルには寄与していない。

物語っている。たとえばオランダで標高が最も高いのは内陸のドイツやベルギーと国境を接する辺りである。標高はわずか二八〇メートルに過ぎない。そのアムステルダムが海面下に沈まないのは、有名な風車により、海水を常にダムの外へと排水しているからである。

現在のアムステルダムの都市の中心部は幾重にも同心円状の運河と陸地により交互に囲まれている特異な空間構造をもっている。それはあたかも太陽系の宇宙の姿を大地に投影したかのようなものである。〔図5-6〕元々小さな港湾都市であったアムステルダムは16世紀においてもまだ人口4万人程度の規模でしかなかった。しかし17世紀のバロックの時代には人口も急激に増大して20万人を越え、現在のような都市が構築された。その特徴は運河にあるといえるであろう。

アムステルダムの都市空間では街路と運河がともに同心円状に構成されていることが特徴的だ。ヴェネツィアと異なり街路と運河は同じレイヤーのなかに構成されている。その同心円を貫くように、放射状に走る街路が交差している。この放射状の道路と運河の出会いところが橋である。この橋は道路と同じレベルであり水平となっている。つまりここでは道路の方が優先する都市のシステムなのである。アムステルダムでは船と道路が交差する場合には一般的に二つの解決方法がある。一つは船を小さく低くすることである。観光用のボートに乗ると、橋の下をぎりぎりに通っていく。もう一つの解決方法に出会ったのは路面電車に乗っているときであった。突然電車が止まると、舗装道路が丸ごと開いたのである。



図5-7 オランダの現代の跳ね橋

オランダではゴッホが描いたような牧歌的な跳ね橋ではなく、4車線の道路が歩道と一緒に跳ね上がる。船が通るからだ。



図5-6 運河の都市アムステルダム

魅惑的な同心円状の運河の都市空間は、バロック時代に構築された。路面電車に乗ると、幾つもの橋を渡りながら走っていく。運河が都市にリズムを与えている。

船が通過するときに遮断機が降り、道路全体が、歩道のガードレールもろとも、跳ね橋のように開いたのである。〔図5-7〕初めて体験したときは唖然とした。

この大胆な光景は現代都市においては常識を越えるものがある。

隣のユトレヒトへ行くと、とても気持ちのよいカフェテラスに出会った。それは橋から見下ろすと、下を流れる川面すれのテラスがオープンカフェとなっていたのである。〔図5-8〕それは標高が数メートルしかないユトレヒトならではの都市の魅力的な空間であり、人々の生活空間のなかに地勢が顕現している興味深い場面として記憶に残っている。

3. 中国の水郷地帯の都市

ヨーロッパよりもアジアのほうが、都市と海や川との関係はより密接であり、陸地よりも重要な役割を果たしているといえるであろう。例えば中国南部の水郷地帯、すなわち上海の内陸側にある蘇州を中心とする地方は東洋のヴェネツィアといわれている。杭州、無錫、揚州、南京、常州といった都市が生まれた揚子江下流に広がる平野は、中国屈指の水郷地帯であり、稲作などが盛んな中国随一の穀倉地帯でもある。豊かな国土が広がっている地域で江南地方と呼ばれている。昔から詩に詠まれてきた風光明媚な地方である。

じつはここには数多くの大小様々な湖があり、それを結ぶような運河により、大地は網の目のように覆われている。〔図5-9〕実際にこの地を訪れてみると、



図5-9 江南地方の運河と湖

中国では南船北馬という言葉があるように、南部の地域では船による移動が主流であった。それを実証するかのよう、この地図には大小様々な運河のネットワークが描かれている。



図5-8 ユトレヒトのカフェテラス
海拔がほとんどないオランダの国では、都市のあちこちで親水的な空間と出会うことができる。

陸上の移動が大変なことが分かる。目の前の湖の向こうに見えるところへ行くこうとすると、船ならばすぐそこなのに自動車ではかなり迂回しないと目的地に到達しないからである。すなわち船による物流が近世まで主流であり、道路が発達したのは車社会となった近代になってからのようなのだ。

この水郷地帯には興味深い鎮と呼ばれる小さな街が沢山ある。水郷地帯の鎮では、道路ではなく、運河同士の交差点が街の中心となる。そこには大きな橋が架かり、船の荷揚げのための棧橋がある。そして人々が休むための宿や食堂などがこの橋を中心として造られていた。たとえば周庄という街はその典型であろう。小さな街ではあるが、その主な運河の交点に橋が架かっている。その橋は、船が通りやすいように大きなアーチを描いており、街の中心をシンボリックに印象付けている。〔図5-10、11〕

このように中国南部の江南地方の水郷地帯の街は、運河を中心として発達してきた歴史をもっている。蘇州のような大きな都市では、運河で周囲を囲んでいる空間構造が特徴的だ。そして市内には数多くの庭園があることが知られている。その庭園では中央に大きな池を容れている。その池を中心として回遊しながら庭を楽しむ趣向となっている。〔図5-12〕ここには道教に基づく自然と人間と建築が一体となった有機的関係が体现されている世界観を認めることができるだろう。

（中村蘇人『江南の庭』新評論）

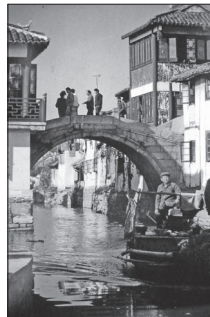
こうして中国の江南地方は、庭園そして都市そしてこの地域全体が、すなわち

図5-10 周庄の地図（右）

この小さな水郷鎮は江南地方の典型的なものである。運河の交点を中心に水郷鎮が発展した。いわゆる市街地は、運河の周辺に発達している。

図5-11 周庄の街の中心部（左）

円形の橋が、この街の象徴である。ここには多くの人々が集い、船が行き交う。まさに運河が水郷鎮の都市生活の中心的な役割を担っている。



それぞれの全ての空間のヒエラルキーにおいて、池や運河や湖や川により空間が特徴付けられて一体化されている。

4. 水の神ナーガ

東アジアにおいて典型とされる人々と海との関係は、ヨーロッパや中国のような大陸文化とは基本的に異なっている。すなわち水の方が主であり、人々の生活はこの水という自然に従属しているからである。あるいは海の中に浮遊するような生活が中心なのである。不動の大地を前提としている大陸の思想ではない。海を中心とした島の思想により、都市ばかりでなく人々の精神世界までもが支配されている。

東アジアの海水面がまだ低かったころがあった。1万年以上前の氷河期が終わる前までは、インドシナ半島からボルネオ島やスマトラ島そしてジャワ島がつながって、スンダランドという一つの大陸が形成されていたことが知られている。「図5-13」スンダランド東端に、バリ島が位置する。ここまでがアジアの生態圏である。ちなみに東隣のロンボク島は、オーストラリアの生態圏に属している。

(村井吉敬『インドネシア、スンダ世界に暮らす』岩波現代文庫)

現在は海により分かれて、様々な国に属するバラバラの島々であるが、その国々には共通した世界観を持つ文化が認められるようだ。それは水の神ナーガに象徴されている。海の神はヘビである。それは大陸の神が龍であることと対比さ



図5-13 スンダランド、1万年前の東アジア
東アジアに現在もなお共通の文化が認められるのは、かつてインドシナ半島からボルネオ島やスマトラ島そしてジャワ島が一つの大陸であったスンダランドを形成していたからである。

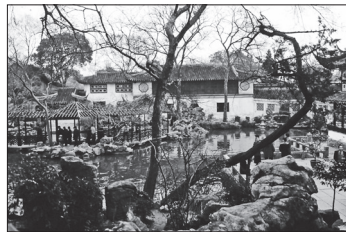


図5-12 拙政園、中国蘇州、明代
中国江南地方の世界遺産となっている園林の代表的なものがこの拙政園である。池を中心として、その風景を楽しむような独特の回遊式の庭園空間が生み出された。この回遊性や親水性の空間が、江南地方の住宅や庭園や都市を貫いている。

れている。この水の神ナーガが、東アジアの宇宙観を決定付けている。ナーガはこうして文学、舞踏、楽器、民族、絵画、彫刻、建築などあらゆる文化の領野へと浸透しており、現在でも東アジア独特の造形芸術を生み出す源泉となっている。

（那谷敏郎『龍と蛇（ナーガ）、権威の象徴と豊かな水の神』集英社）【図5-14】

首都プノンペンにあるカンボジア王宮の建築物が興味深い。細部をよく見ると、王宮の建築では屋根の棟が蛇の胴体となっていたり、切妻の屋根の端部にもヘビの装飾が施されているのが分かるであろう。またヒンズー教の寺院の周囲を巡る石の手摺りの装飾にもヘビが用いられており、その端部には七つの頭の蛇の像が付けられていた。

このようなヘビのモチーフは東アジアに広く認められている。たとえば古代のタイの伝統的な弦楽器では、その全体像がヘビのような形態をしている。あるいは日本の沖縄などでおこなわれるボート競技の船体は、全体がヘビの形となっており、その先頭にはヘビの頭がしつらえられている。タイにも同様の装飾のある船があり、それはアンタナカラートと呼ばれている。祭りや儀式で用いられている。その船先にはやはり七つの頭を持つナーガが装飾として付けられている。

ナーガはサンスクリット語でヘビのことを意味する。ヒンズー教文学の世界観では、全世界が滅亡と再生を繰り返すあいだ、ナーガが宇宙の大海のなかで寝ているという設定になっている。そこではナーガが世界の全ての水と生気を飲み干してしまっているのだ。世界に再び生命をもたらすために、ヴィシヌ神が頭と



図5-15 アンコール・トム、南大門

「乳海攪拌」の世界観は、そのまま建築の装飾として引用された。神々が生み出した世界の縮図である寺院建築では、壁面や表壁など、あらゆる装飾の場面には、神ナーガの造形を認めることができる。



図5-14 水中の生物と陸上の生物が融合した〈魚-象〉

古い図像のなかには、親水性のあるものが認められる。赤道付近の東アジアの地域では、スコールを伴う雨季が大地を洗い流すような気候を特徴としている。ここでは海や川は生活そのものであり一体となった生活文化が醸造された。

尾を引き裂き、そこから生命の水が絞り出される。これが東アジアの天地創造の物語「乳海攪拌」の世界である。東アジアの都市は海から生まれ出たのである。

(スメート・ジユムサイ『水の神ナーガ 鹿島出版会) この「乳海攪拌」の図像は、アンコール・ワットの第一回廊の西側の壁面に浅浮彫りとして描かれている。またカンボジアのアンコール・トムの南大門に架かる橋の手摺りのデザインでは、この「乳海攪拌」がモチーフとなっている。その橋の手摺りでは、神々が綱引する蛇の胴体であり、神様が手摺子となっている。[図5-15・16]

5. ヒンズー教の宇宙観

こうしたナーガの図像は、ヒンズー教の建築など東アジアの寺院や宮殿の装飾として、随所に現れていることが分かるであろう。王宮の屋根や柱の装飾、寺院の破風や手摺りなど場所を選ばないといっても過言ではないであろう。

興味深いことには、東アジアの宇宙モデルにおいても、このナーガが取り入れられていることである。その宇宙モデルでは、海と大陸が波紋のように同心円状に重なり合っている。ヒンズー教では、六つの大陸と七つの海がある。その外側には無限の大洋が広がっている。それに対して中心にはヒマラヤになぞらえられる高い山である須弥山が位置し聳えている。さらに仏教のモデルでは、この無限の大洋のなかに四つの大陸を加えているのが特徴的だ。この四隅にある大陸は、四方の世界を意味している。[図5-17] こうした宇宙観は南太平洋のポリネシア



図5-16 「乳海攪拌」東アジアの天地創造図

最初の生命は、海の神ナーガの生命の水から生まれ出てくる。キリスト教の天地創造とは全く異なる海洋を中心とする東アジアの世界観が認められる。

あるいはボラボラ島やバリ島などに認められる。興味深い事例としてメキシコのアステカ文明のピラミッドにおいては、ヘビの頭の形をした雨の神トラロークが認められることである。その構造は東アジアの世界観と良く似ている。〔図5-18〕

この断面はまさに東アジアの宇宙モデルの断面そのものである。カンボジアにあるアンコールワット寺院では、その平面構成と断面構成が、この宇宙モデルに重合する。大きく三つの回廊で囲まれたアンコールワット寺院の建築では、その回廊と回廊との間には、水が張られていたことが知られている。そして中央には高さ67メートルの塔が建つ。それは須弥山を意味している。すなわちアンコールワット寺院という建築とは、ヒンズー教の世界観としての宇宙モデルが、地上に具現化されたものとして解釈できるであろう。〔図5-19〕カンボジアにある数多

くのヒンズー教寺院の空間構成をみると、そこにはこのアンコールワット寺院とおなじような東アジアの宇宙観を読み取ることができるであろう。（金光仁三郎『ユーラシアの創世神話、水の伝承』大修館書店）

あるいはバンコクの仏教寺院ワット・アルンもまた興味深い。その平面図をみると中央に三重の同心円状に構成された仏塔があり、その境内の四隅には大洋に浮かぶ四つの大陸に相当する小塔がある。中央の塔は高く、それは須弥山を意味している。こうしてこのワット・アルンもまた東アジアの世界観をもとに造られたものであり、地上へと投影された宇宙モデルそのものであることが分かるであろう。〔図5-20、21〕



図5-19 アンコールワット寺院

この建築の同心円状の空間構成は、まさに東アジアのヒンズー教の世界観をそのまま地上に具現化したものといえるであろう。

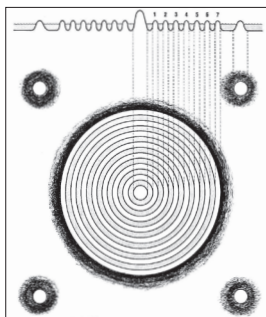


図5-17 ヒンズー教の宇宙モデルの断面図と平面図
中央に須弥山が位置している。その外側には、大洋と陸地が同心円状に幾重にも交互に取り囲んでいる。

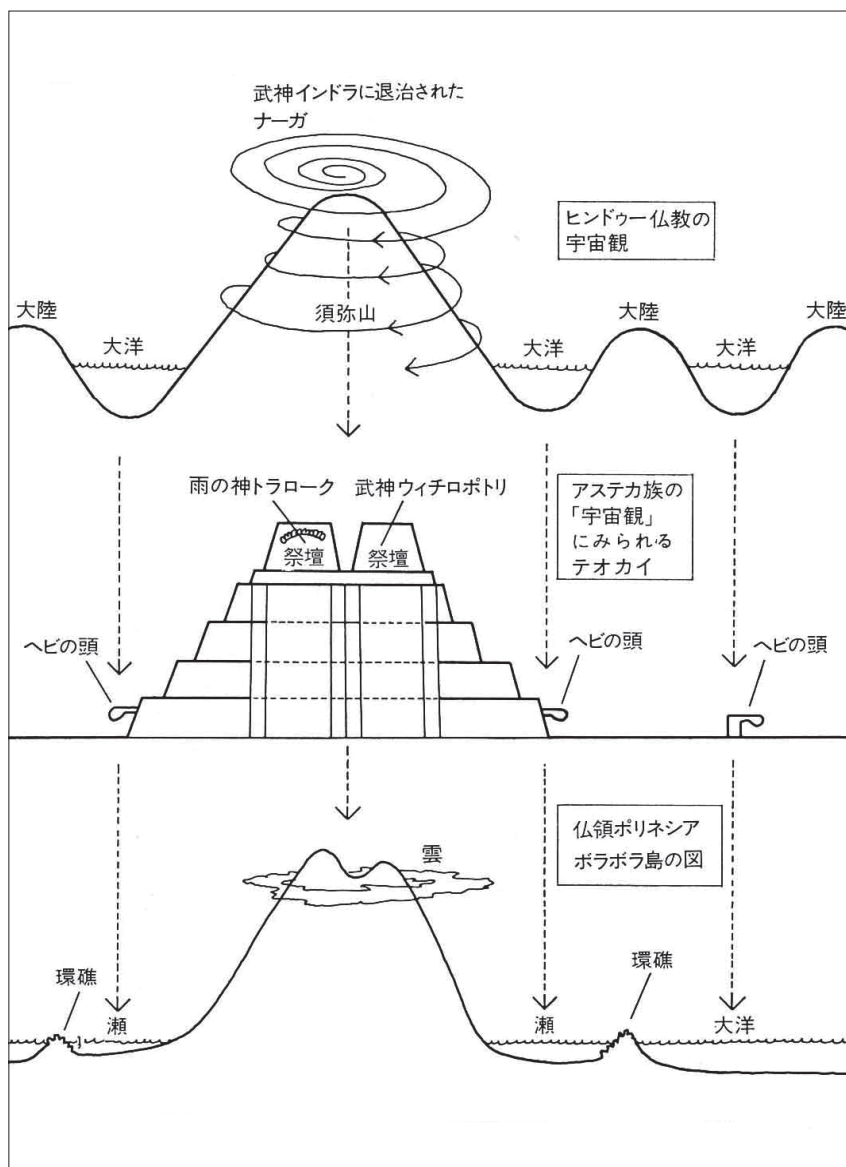


図5-18 ヒンズー教と仏教の宇宙モデルの比較図

南太平洋のポリネシアのボラボラ島やメキシコのアステカ族の神殿における宇宙観には、共通した宇宙モデルが認められる。(スメート・ジュサイム『水の神ナガ』鹿島出版会)

6. アーキペラゴの世界観

ミャンマーの内陸には、巨大なインレー湖という湖がある。琵琶湖の数倍はありといわれている。この湖では、その中央で水上生活している農民たちがいる。

彼らはこの湖のなかほどで、厚さ約2メートルぐらいに水草を積み上げて湖面に浮かべ、それで畑を作り野菜を水上栽培している。乾季と雨季では水位が異なるが、水草の畑は浮いているので全く問題は無い。水面に畑が浮いているのだ。そこを舟で農家の人達が行き来し、種を撒き野菜を栽培し収穫しているのだ。

問題があるとすれば彼らが住む住宅の方であろう。この農民たちは湖岸近くに家を建てている。それが興味深いのは、細い竹や木で造られた3階建てはあろうかというバラックの民家であることだ。そしてわざわざその最上階に居を構えている。農民は船で家の下まで移動して階段で最上階まで登っている。[図5-22]

なぜこのような不便なことをしているのか。なぜこのような住宅を建てているのだろうか。そう思ったのは、それが乾季の姿であつたからだ。じつはその理由は雨季になるとすぐに分かる。六月から九月の雨季になるとインレー湖の水位は上昇し、ちょうど家の入口に船で着けるまでに高くなつてしまうからなのである。

(高谷紀夫「インレー湖のインダー族」『民族学』73号、国立民族学博物館)

こうした高床式の農家はカンボジアのトレンサップ湖でも出会った。しかしこの湖では本当にボートの上で暮らしている人々が沢山いた。外観は家のようにであるが船あるいは筏である。彼らは湖の中心で水上生活を営んでいる。彼らは主に



図5-21 仏教寺院ワット・アルンの平面図
夕刻にライトアップされた寺院の光景には、人々が思い描いた東アジアの世界観を認めることができる。

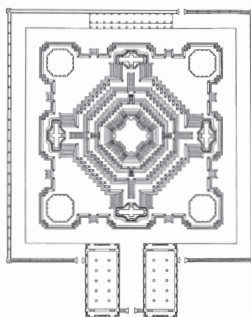


図5-20 仏教寺院ワット・アルンの平面図、バンコク
まさに仏教における世界観を、平面構成から読み取ることができるであろう。その境内の四隅には、大洋に浮かぶ4つの大陸に相当する小塔がある。中央の塔は須弥山を意味している。

ヴェトナムからの移民である。彼らは湖上でごく普通に生活している。このため湖上にはガソリンスタンドや店舗などもあるのだ。

こうした水上生活者がかつてのイランでも認められた。現在はほとんど消滅している。それはメソポタミア湿原の水上で、葦を編んだ大きな筏を浮かべ、そこに葦で造った家に住んでいる人々であった。アブ・ソウバッドと呼ばれたこの水上集落では、人々は家畜も家族と一緒に、家ごと好きなところへ移動できた。

〔図5-23〕（高谷紀夫「湖と生きる」『民族学』78号、国立民族学博物館）

こうした水上集落や東アジアの都市をみてみると、そこには大陸で起きた都市という現象とは全く別の世界観が認められるであろう。不動の大陸とは異なる、流動的で境界すらない海や湖を中心とした生活を営む人々の世界では一夜にして全てが変容してしまうかもしれない。こうした東アジアなどで造られた海洋都市では、一神教が支配する他の解釈を許さない、あるいは直線的進化論や唯物論が支配している大陸の西欧の頑なな精神世界とは全く別の異なった世界観に基づいているといえるであろう。大陸文明と対峙し、それを打破するようなもう一つの世界観であるかもしれない。それをアーキペラゴという概念で説明してみたいと思う。

アーキペラゴはもともとエーゲ海のギリシャ諸島を意味する言葉である。広い海洋に点在する島々からなる世界を意味する。このアーキペラゴという概念は、大陸型の制度やイデオロギーの閉鎖性に、楔を打ち込み打破するときに、最適な

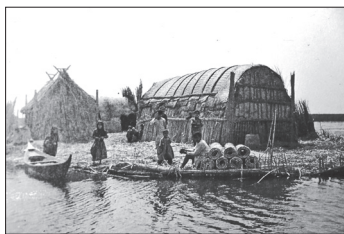


図5-23 イラクのメソポタミア湿原のアブ・ソウバッドの民家
葦で造られているのは建築ばかりではない。その家が建っている筏自体も葦で造られている。家畜も家族と一緒に水上で生活を営んでいる。



図5-22 ミャンマーのインレー湖の民家
どの民家も、雨季の湖の水位を想定して高床式の建築となっている。雨季になると舟は玄関と直結する。民家は雨季に合わせて造られている。

思想的武器としてのメタファーとなるのではないだろうか。

アムステルダムのように、人工的に排水して、国土を維持しようとする大陸の都市文明とは全く異なる都市の思想のあり方がありそうである。自然とは人間と対峙する無秩序な存在であるとする考え方が西欧では支配的だ。しかしそうではないもう一つの自然観である。それをアーキペラゴというメタファーにより喚起される東アジアの都市が示しているのではないだろうか。

アーキペラゴからはさらにもう一つ別の都市のありかたが浮上してくる。方向が定まらない無数の視線の集合体、あるいは回遊的に漂流する主体の定まらない視線、そして海洋の藻屑として消滅を必然とするような非恒久的な存在。さらに時間的にも今年も来年もその次の年もまた同じように訪れる台風や黒潮の流れや星の動きなどに象徴される自然の円環的時間の世界。死した者もいつの日か再生あるいは転生し、この世界に舞い戻ってくるような輪廻転生という円環的生命観。そうした精神世界を背景とした海洋型の東アジアの都市では、大陸の都市と区別するうえで、アーキペラゴという概念が有効といえそうである。都市は大陸文明専用の概念ではない。東アジアの海洋都市は、多様な都市のありかたの可能性の一つを教えてくれている。そこには東アジア独特の宇宙観が形成されている。

第六章 山岳

——宇宙軸が貫く山岳都市——

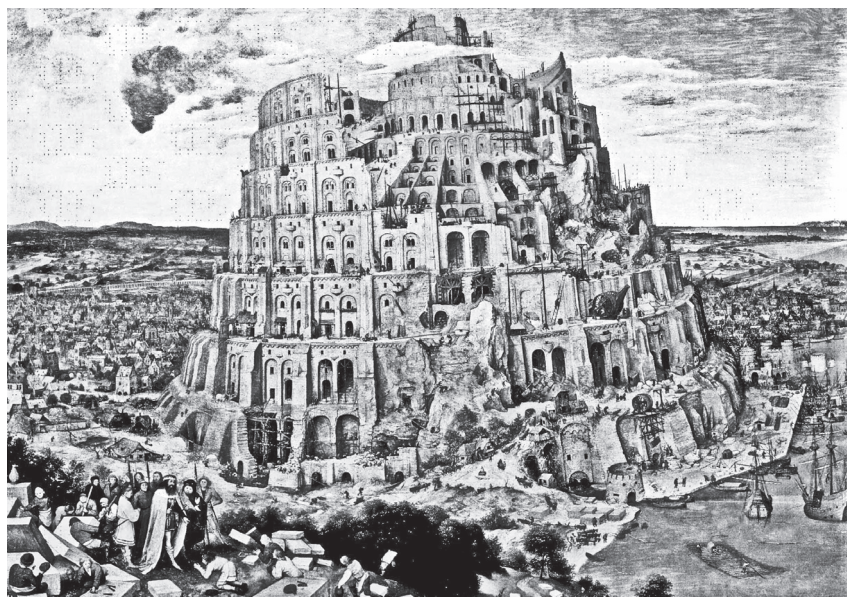


図6-1 「バベルの塔」ブリュッゲル（父）一五六三年

ウィーンの美術史美術館を訪れるとブリュッゲルの間がある。ここでは教科書で見たことがあるブリュッゲルの作品ばかりが隣り合うように壁を埋めつくしている。ブリュッゲル愛好家にとってはまさに夢のような部屋である。ここで「バベルの塔」と出会うことができる。

バベルの塔は、天を目指して建設された。神を恐れぬ傲慢に満ちた人間は、知恵の使い方を誤った。聖書によると神はこの傲慢な企てを阻むため人々の言葉を混乱させたのだった。かくして塔は未完のままとなり、人間は散り散りとなった。この街の名前をバベル（混乱）という。この絵画には人間の能力の過信への警鐘が込められている。

バベルの塔は人間がつくった山岳ともいえるであろう。神に近づきたいのである。聖書には、アラト山やシナイ山そしてエルサレムのシオンの山が登場してくる。山自体が神の栄光を表すものとして捉えられていたのだ。このため山頂には十字架や聖像ばかりでなく修道院や礼拝堂が建てられたりした。このように山岳という空間は神聖視された。犠牲を捧げ祈祷をおこなう聖なる場所として神性と結び付いていた。神にもっとも近い場所として、16世紀になると、ヨーロッパでは山々に聖人の名前が好んで付けられるようになった。

山岳はこうして都市を天上の世界と結び付けるメタファーとなり、象徴的な意味を担うようになった。人々は山岳に都市を築いた。

1. 天界へと至る須弥山

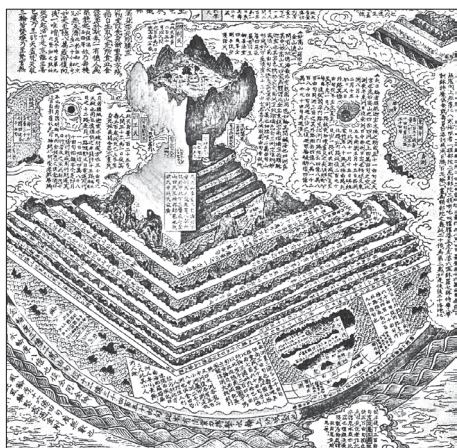
カンボジアのアンコール・ワット寺院やバンコクの仏教寺院ワット・アルンはそれぞれヒンズー教や仏教という宗教を背景として建立された寺院建築の代表的な事例である。しかしヒンズー教と仏教は、もともと兄弟のような宗教であり、ともに東アジアの宇宙モデルを共有する宗教的世界観をもっている。その世界観を具現化した寺院建築では、中央に高い塔が聳え、それを中心として同心円状に陸地と海が交互に取り巻いている空間構造を持つているのが特徴的である。これは須弥山がモチーフとなったものである。その世界の中心には、必ず神の世界へと通じる大きな山岳があった。

東アジアの宇宙観は、ヒマラヤ山脈という絶対的な地形から創起されたといわれている。アジアでは須弥山といわれている。インドではメール山と呼ばれる。本来スメルと呼ばれたものが、漢字文化圏では蘇迷盧あるいは須弥山と音訳された。この山は月を越えて聳える宇宙の山である。その山は七つの山脈と海に取り囲まれており、その外側には無限に広がる大海がある。その遥か南方のかなたに浮かぶ四つの大洲の一つに人間が住むと仏典に記されている。こうしたメール山の宇宙とは東アジアの宗教世界観に共通するものであり、それぞれの文化や宗教を反映して、想像力豊かな宇宙モデルへと変容されていった。

東アジアの一員である日本にも伝わったこの世界観は、江戸時代末期に須弥山として描かれている。〔図6-1〕とそれを見ると、方形の七重の陸地に囲まれて、

図6-2 「世界大相図」、1821年

インドで5世紀に発達した仏教哲学が、日本へ伝わった。江戸時代に描かれたこの図とは当時の西洋の宇宙観に対抗するものとして僧僧たちにより描かれた。



中央に須弥山が聳えているのが判る。

山頂は奇怪な天界を載っている。蓮華が開花したような不思議な形を成している。天に向かつて一度すばまった須弥山は途中であたかも反転するかのようにして再び巨大な天界へと膨張する。ここには三十三天の居城があるといわれている。

(杉浦康平『アジアのコスモスマンダラ』講談社)

この日本の須弥山の図の右下には、無限の大洋に浮かぶ四つの大洲の内の一つである瞻部洲^{せんぶしゅう}が、逆三角形のおにぎりのように描かれていることに気付くであろう。ここに人間が住んでいると考えられている。これは「五天竺国^{せんてんしゆく}之図」として描かれた。[図6-3、4]その図は、仏教界の世界観を忠実に踏襲しているながらも、インドを中心とした現実の世界と融合されたものとして描かれていることが非常に興味深い。瞻部洲には、ヒマラヤ山脈の聖山カイラス（香醉山）が、中央上部に聳えている。その下には渦を巻くような大河の源泉地である無熱惱池^{むねつうち}がある。四体の奇獣の口から大地を潤すように水が流れ出ている。その一つがガンジス川となっている。（定方成『インド宇宙論大全』春秋社）

2. インドのヒンズー教寺院

広大なインドには、どの都市や村を訪れても、必ず寺院や祠が幾つもあり、人々の篤い信仰により護られている。多神教であるヒンズー教の寺院とは「神が御在す神聖な家」そのものである。このヒンズー教の寺院建築の特徴とは、

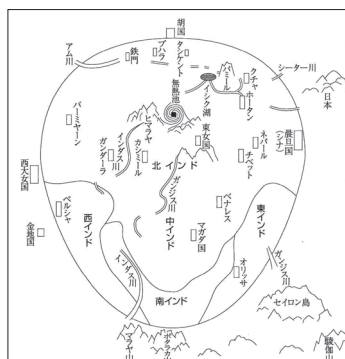


図6-3 「五天竺国之図」法隆寺北室院蔵、1364年（右）

人間が住んでいた、無限の大洋に浮かぶ四洲のうちの一つである瞻部洲は、ヒマラヤ山脈を中央に配したインドをイメージしている。



図6-4 「五天竺国之図」を基にした仏教系世界図の構造模式図（左）

中央の無熱惱池からは、螺旋状に大河が4本流れ出ている。その一つがガンジス川となり、インドを潤している。

山岳を彷彿とさせるような外観をもっていることにある。個々の建築は、単一の内部空間を持つており、それを幾つか複合させて、一つの寺院建築として全体が構成されている。さらにこの寺院建築全体を方形の壁で周囲を包み込むようにして、境内の空間が構成されている。このなかに信者以外は入ることができない。

寺院の規模が大きくなるにつれて、本殿、拝殿、玄関、舞殿、贅殿が次々と列せられるように発展していく。そのもつとも発展した事例として聖地ブーリに建立されたジャガンナータ寺院をあげることができるであろう。〔図6-5〕

こうしたヒンズー教寺院では、唯一の入口から薄暗い奥へと次第に内部深く導かれる空間構造となっているのが特徴的である。その寺院の内部空間とは、初期の寺院として使われた洞窟を彷彿とさせずにはおかない。寺院の原型とは中空の岩なのである。例えばインドのエローラの石掘寺院とは、その本来の宗教の空間から建築へと移行する過渡期の事例として、解釈することができるであろう。

（飯田キヨ「イスラームとヒンドウの建築空間」『都市形態の研究』鹿島出版会）

ヒンズー教寺院を理解するためには、もつとも典型的な事例をあげて説明するのがよいであろう。たとえばムクテシュワール寺院である。本殿であるガルバ・グリハと拝殿のジャガモハンの二つの単位空間からなる。前者はヒンズー教寺院に特有のシカラとよばれるトウモロコシ状の塔の形態をなしており、後者は寄せ棟型の屋根を持つ。〔図6-6、7〕こうしたインドのヒンズー教寺院建築とは、そ



図6-6 ムクテシュワール寺院、インド、10世紀頃

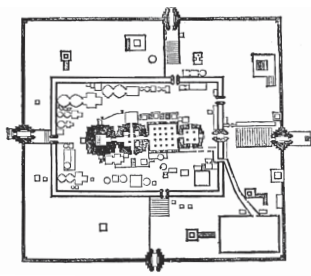


図6-5 ジャガンナータ寺院配置図、インド、ブーリ
ヒンズー教寺院建築の平面構成では、本殿、拝殿、
玄関、舞殿が一行に並び、最も奥に本殿が位置し
ている。

ヒンズー教はインドの大地で生まれた。インド大陸で最も神聖な山はヒマラヤであった。その山を崇めながら、信仰に篤い人々が、神話や伝説や様々な物語を生み出してきた。そして神々の家である寺院が建てられた。ヒマラヤは伝説の山として、インドの神々の世界ではメール山となった。須弥山である。そこを貫くのは世界軸（アクシス・ムンディ）であり、地上と天界を結び付けている。

このヒマラヤ山脈やメール山がこのヒンズー教寺院の空間へと取り入れられた。最も高い山であるメール山は本殿に、二番目に高い山であるカイラーサ山が拝殿に取り入れられた。カイラーサ山にはシヴァ神が棲んでいる。すなわちヒンズー教の寺院の外観とは、神聖な山々が織り成すインド大陸を見下ろすヒマラヤ山脈を象徴化させたものであり、まさにヒマラヤ山脈のランドスケープを表現していることが理解できるであろう。

その世界軸が貫く寺院のシカラの内部には聖遺物であるリンガム・ヨニが置かれている。リンガムとはシヴァ神の象徴とされている。それは男性器を意味している。それとヨニという女性器を組み合わせて宇宙の交合、すなわち豊饒と生産が意味されていると言われている。この聖遺物リンガム・ヨニが安置されているガルバ・グリハの内部空間は、女性身体としてアナロジカルに捉えられている。

まさに母胎の部屋なのである。〔図6—8〕

あらためてアンコールワット寺院の空間構成をもう一度振り返ってみたい。そ

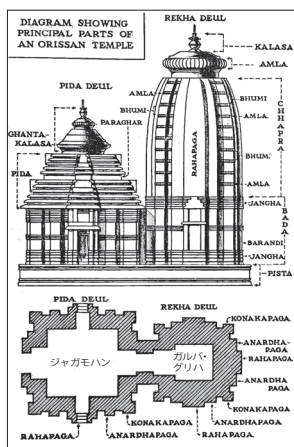


図6-7 ヒンズー教寺院の基本構造
本殿であるガルバ・グリハと、
拝殿のジャガモハンからなる。
本殿はメール山を象徴し、拝殿
はカイラーサ山を象徴している。

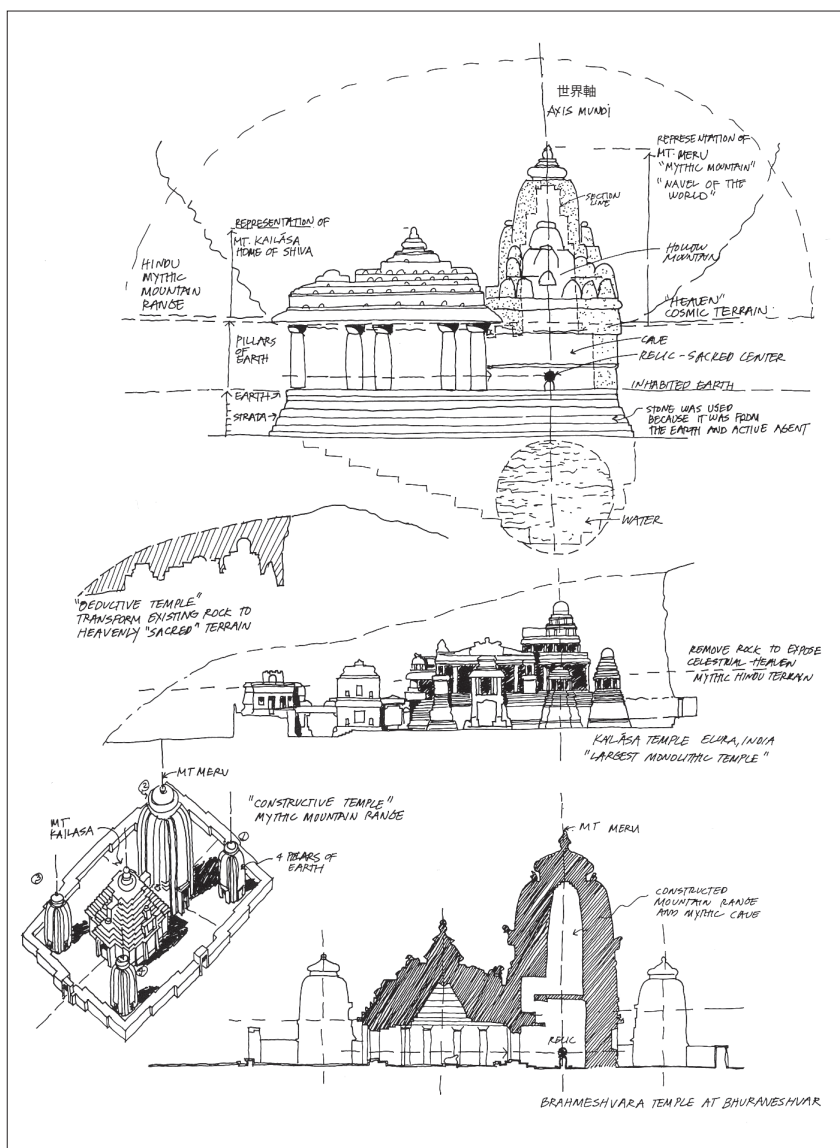


図6-8 世界軸が貫くヒンズー教寺院

ヒンズー教寺院とは宗教的世界観を内包した建築である。その寺院建築の本殿は、地上と天界を結びつけている世界軸（アクシス・ムンディ）により貫かれている。(William Rees Morrish "Civilizing Terrains, Mountains, Mounds and Mesas" William Stout Publishers, San Francisco, 1996)

れが東アジアの宇宙モデルであることはすでに説明した。しかし中央のシカラとは世界軸が縦に貫通するメール山そのものであり、また第一回廊とはインド平原を取り巻くヒマラヤ山脈のランドスケープそのものを、イメージしていることが理解できるであろう。

ヒンズー教の寺院を通して判ってきたことは、建築というものが大地と宇宙の世界観を融合させたものとして体现された世界観そのものであるということである。大地と宇宙の接点となる空間芸術としての宗教建築とは、現世と天上の世界を貫く精神世界を、人々が受容する場であり、そこで参拝する信者たちの身体が宇宙と融合する場であると考えられる。

そのような意味ではボロブドール遺跡について語らないのは片手落ちとなるであろう。これはインドネシアのジャワ島にある仏教遺跡である。この建築とはまさに山そのもののものだ。一辺一二〇メートルの方形をした段状ピラミッドである。頂上の三層の円壇の中央には、釣鐘型の仏塔を囲むように小さな仏塔が七十二基が配置されている。そのなかには仏様が安置されている。この仏教寺院の建築こそ、まさに大乘仏教の宇宙三界を、地上に具現化させたものといえるであろう。その回廊には華嚴経の物語が浮き彫りにされている。そこを巡りながらあたかも天界へ至るように巡礼路が内包されている。ボロブドールとは仏教の宇宙へと至る、まさに星辰建築そのもののものだ。（千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』鹿島出版会）〔図6-9、10〕

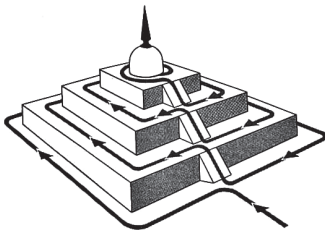


図6-10 仏教寺院の巡礼路

華嚴経の物語が、浮き彫りにされた基壇を巡りながら天界へと至るように、中央の頂の仏塔を目指して、信徒は登っていく。

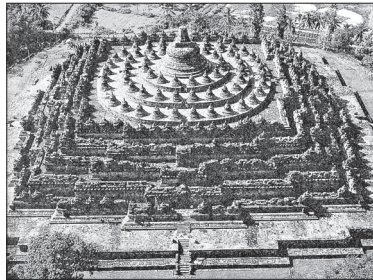


図6-9 ボロブドール仏教寺院、インドネシア、ジャワ島、9世紀頃

大地の地勢を生かしたこの寺院では、山全体をそのまま利用して構築されている。方形の6段の基壇の上に三層の円壇を儲け、中央の釣鐘型の仏塔を囲むように、小さな仏塔が七十二基が配置されている。その平面構成は曼陀羅そのものである。

3. 東アジアの風水都市

東アジアのヒンズー教や仏教に共通するような世界観は、多くの寺院建築ばかりでなく、都市のなかへも浸透していった。こうした観念的な世界観とは別に、東アジアの大陸文化に特有なものとして「風水」と呼ばれる都市の思想がある。

「風水」は大きく二つに分けて考えることができる。すなわちお墓の空間をきめる「陰の風水」と都市や建築の空間をきめる「陽の風水」である。

東アジアの海洋都市では、水の神であるナーガが象徴的に取り入れられていた。それは蛇であったが、大陸の風水思想で象徴的に取り入れられたのは龍であった。龍に象徴された大地の隆起した山脈の持つエネルギーが、都市や建築を造るうえで重要な意味を持っていた。[図6-11]

都市を扱うのは「陽の風水」である。風水思想における理想的な地勢とは幾重にも山々に囲まれた「囲繞」という空間構造である。風水思想では、この山々が連なる山脈に生命を与えていることが特徴的である。その山脈は風水では龍脈といわれ、その中を流れてきた「気」が集まるような地形が、都市に最も理想とされた。風水では全ての山がこの山脈に属しており、日本のように山を単独で扱い命名するという文化とは異なるものである。

この気が集まるところを「穴」という。ここに都市や集落を造ると幸福がもたらされると信じられている。さらに風水では水がとても大切な要因となる。水もまた深山に発して生氣をもたらし流れの一つと考えられているからである。この



図6-11 「山龍図」

龍のエネルギーが象徴的に描かれており、風水思想を表現している。

水は都市の中を流れるのではなく、都市の外部の南側を流れるものが理想とされた。その水の神秘力を貯めるために池が造られることが多い。こうした地勢を「山河襟帯」と呼ぶ。(渡邊欣雄『風水思想と東アジア』人文書院「図6-12、13」)

最も風水思想が徹底されているのは大陸の中国東部と朝鮮半島の地域である。韓国の李朝期の一八六〇年頃につくられた「大東輿地図」^{だいとうよちず}には、朝鮮半島の龍脈の系統が詳しく描かれている。「図6-14」それは白頭山^{バクトゥッサン}から済州島までの龍脈の全てを網羅した系統図なのである。

この地図を見て分かることは、朝鮮半島の全ての集落や都市が風水に基づいており、龍脈により都市や集落の関係が相互に結び付けられて、系統立てられていることである。山の尾根線と水系と道の三種の線だけで構成されたこの素っ気無い地図には、風水に基づく東アジアの空間原理が、しっかりと描きこまれている。すなわち個々の都市における単独の空間の判断として、風水が用いられたのではない。国土全体の秩序のなかに全ての生活空間が、余すことなく風水に基づいて意味付けられ、位置付けられているのである。その龍脈は、どれをたどっていったとしても、全てはその源である白頭山^{バクトゥッサン}へと到達する。この白頭山とは中国と北朝鮮の国境に位置するカルデラ湖を頂く聖山である。この聖山は朝鮮半島に住む人々にとって最も重要な聖地であり、一生に一度は訪れたい山となっている。

「図6-15」(黄永融『風水都市』学芸出版社)

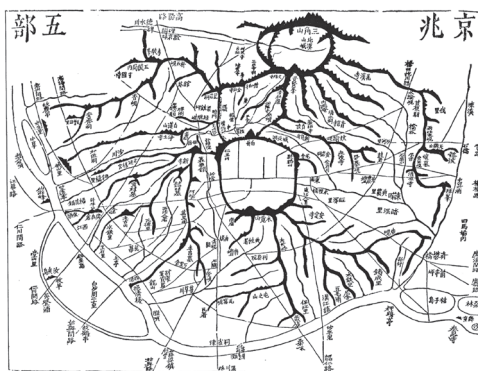


図6-13 中国の北京の風水図



図6-12 理想的な都市の風水図

日本では山を単独で捉えるが、大陸では山脈として捉え、そこを伝って「気」が流れると、考えられている。それが集結する場所を「穴」といい、ここに都市を造ると繁栄すると考えられた。

4. 山岳に住む人々

自然を貴ぶ思想は、中国では道教の仙人伝説とともに広く芸術や宗教へと浸透している。中国の水墨画の主題には山岳が選ばれていることが少なくない。また道教ばかりでなく仏教の修業の地として山岳には多くの寺院が建てられた。

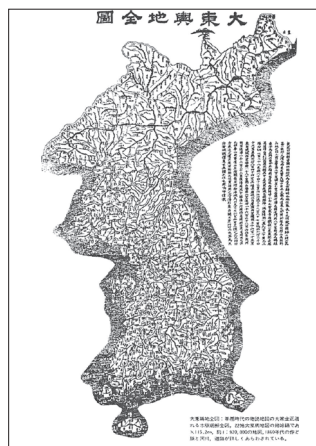
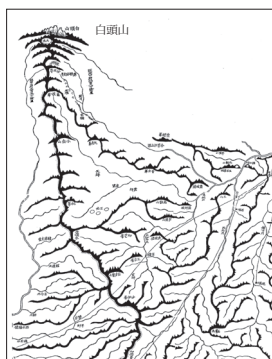
中国には幾つかの聖山が知られている。なかでも黄山には、14世紀に六四にもぼる寺院が建てられたことで知られている。現在もお仏教と道教の両宗派の寺院や石窟が数多く点在している。唐の詩人李白が黄山を「蓮の蕾の満開の花の形をした峰々が黄金に輝いている」と詩に詠んでいる。そこには「黄山四絶」といわれ奇怪な形をした無数の岩や石、あるいは奇異な枝ぶりを持つ松が織り成す風景と出会うことができる。雲海に浮かぶ神秘的な峰の数々により織り成された風景が人々を魅了してやまない。〔図6-16〕

黄山の主峰と呼ばれるのは、蓮花峰と天都峰と玉屏峰である。この三大主峰を守るように六九の峰々が周囲に点在している。その蓮花峰と天都峰の間に聳える玉屏峰は標高一六八〇メートルであり、そこにはなんと山頂に至る四万段の階段が造られているのだ。その総延長は50キロメートルにおよぶ。なぜこうしてまで人々は山に登ろうとするのか。山の何が人々を惹きつけるのであろうか。

インド洋の真珠といわれる島国スリランカは、紀元前3世紀に仏教が伝わってから現在もお敬虔な上座部仏教の仏教国として知られている。そのスリランカの中部のシギーリアという街の郊外には奇怪な巨岩が聳え立っていることで有名

図6-14 「大東輿地図」 韓国、李朝期の1860年頃（右）
朝鮮半島の国土は全て龍脈のエネルギーの流れとして捉えられている。

図6-15 「大東輿地図」 部分
朝鮮半島の龍脈は、すべて白頭山から流れ出ている。



である。密林のなかで19世紀に再発見されたこのシギーリア・ロック、すなわち「獅子の山」とは5世紀に天を突く巨大な岩山の上に築かれた都城であった。

これは当時のスリランカの首都があつたアヌラダプラの南東に、王が造らせたものである。標高二〇〇メートルのこの巨岩の上には、城が築かれた。それがなぜ「獅子の山」と呼ばれるのかといえば、その中腹に巨大な獅子の像をあしらった城門が建造されていたからである。山頂には宮殿と池と多くの草花が植えられていた。その巨岩の周辺では、その後に庭園と池が発掘されている。王はこの岩山全体をヒマラヤ山中の宮殿に見立てて白く塗り込めてしまった。〔図6-17〕

こうした巨大な岩や山岳の上に寺院や宮殿が建てられたのはアジアばかりではない。たとえばギリシャの内陸部のテッサリア平原とピンドス山脈の境に位置するメテオラには、柱状や尖塔状の巨岩が屹立する。その天を突くような岩塊の頂きに、あたかも空中に浮遊しているかのように、修道院が建てられている。この奇観は14世紀頃に、敬虔なギリシャ正教の信者たちによって生み出された。標高二〇メートルから四〇〇メートルの巨岩の頂上には現在においても二四の修道院が残されている。残念ながらほとんどが廃墟となり、実際に現在も使用されているのは六カ所にととまる。〔図6-18〕

修道士たちはなぜこのような断崖絶壁の上にわざわざ修道院を建てたのであろうか。それはギリシャ正教会を中心とする東方正教独自の宗教思想がその背景として指摘できるであろう。西方のローマカトリックと11世紀に袂を分かつた東方

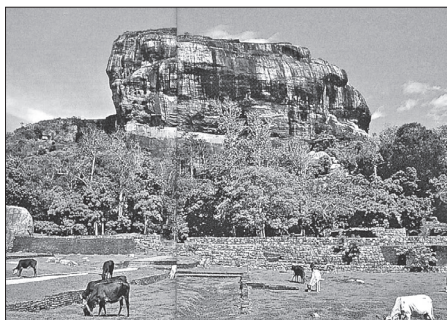


図6-16 黄山、中国、14世紀（右）

三大主峰である蓮花峰と天都峰と玉屏峰を中心に多くの奇山が連なる。ここは古来、仏教や道教両宗派の寺院が建てられ修業の地であった。

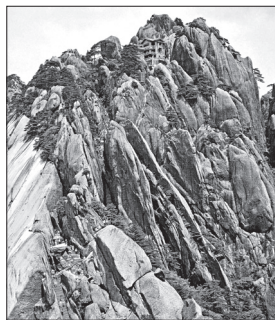


図6-17 シギーリア・ロック、スリランカ、5世紀（左）

巨岩の上に7年をかけて構築された城都は11年後に見捨てられた。現在もその名の出自である獅子の像の城門の一部が残り、当時をしのばせている。

正教会では、社会との関係を断絶して孤独のうちに修業することを重んじていた。西方のカトリックが都市で慈善や救済を志向し、社会活動を重視したのとは全く対照的である。世俗的な下界と断絶し、同時に神とともに常に在らんとする宗教思想においては、高みを目指すことにより自己実現したものととして、このような巨岩の頂きに建てられた修道院建築を解釈できるであろう。

このメテオラの修道院はその奇景から、ギリシャ神話の最高神ゼウスが天界から投げ付けた岩石であるという伝説がある。それも領けないわけでもない。洋の東西を問わず、人は天を目指す。

同じキリスト教徒たちが造ったもう一つの山岳都市はトルコのカッパドキアにある。3世紀のころからイスラム教徒はビザンツ帝国を迫害してきたが、それがついにトルコにまで及ぶようになった。追われるようにアナトリア高原へ逃げたキリスト教徒たちは、ローマ帝国の庇護のもとで、岩山に穴を掘り、そこに住み着いた。住居ばかりでなく修道院も洞窟の中に造られている。〔図6-19〕

カッパドキアの奇怪な岩が織り成す景観は圧巻である。その大きな岩山には、入口や窓が開けられ人々が住みついていていた。こうして7世紀から13世紀にかけてギョレメ渓谷を中心としたカッパドキアは、キリスト教徒の信仰の中心的地域となった。渓谷に隠れ住むキリスト教徒が急増すると、新たな洞窟を掘り修道院や聖堂も造られた。素朴な外観ながら、その内部に一歩足を踏み入れると、そこでは色鮮やかな聖像たちがわたしたちを今でも迎えてくれる。

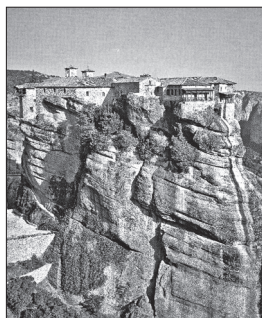
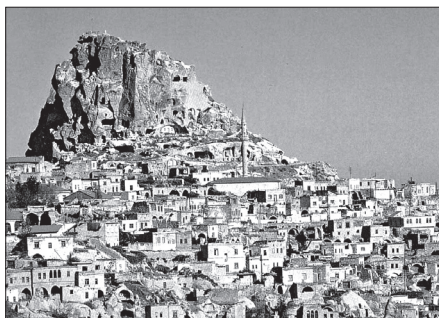


図6-18 メテオラの修道院、ギリシャ、15-16世紀（右）

ギリシャ正教の修道院は、断崖絶壁の上に建てられた。天上の神に少しでも近づこうとする信仰心が、こうした建築を生み出した。

図6-19 カッパドキア、トルコ、7-13世紀（左）

緑も少ないアナトリア地方には多くの奇石がある。ウチヒサルやギョレメ渓谷はその中心地だ。その岩山がキリスト教信仰と結び付き、希代の山岳都市を生み出した。

山岳都市について語ろうとするのであれば、空中都市の異名を欲しいままにしている南米のマチュ・ピチュを語らないのは、片手落ちというものだ。20世紀になって初めて発見されたマチュ・ピチュは、アンデス山脈中央部にインカ帝国の都市の遺構である。標高二四〇〇メートルの峰の頂に、15世紀に築かれた都市では、当時一〇〇〇人ほどの人々が生活していたといわれている。この隔絶された山中にどのようにして都市が築かれたのであろうか、それは今も謎に包まれている。しかし灌漑設備が整備され、水道橋を通じて引かれた水は、マチュ・ピチュに設けられた一六カ所の水飲み場へ給水されていた。しかし車輪や牛馬の文化がなかったインカ帝国で、こうした大規模な都市をなぜ困難な条件のもとで、そしてどのようにして建設したのであろうか。それでも人々は山を目指す。〔図6-20〕

5. 霊山としての富士山

こうして世界の山岳と都市の関係を俯瞰してみたときに、初めて日本の富士山の存在が理解できるであろう。ヒンズー教や仏教そして風水のなかで、山は神聖なものとして宗教と分かちがたい存在として位置付けられてきた。そして日本一の高さを誇る富士山もまた一つの宇宙を内包する神聖な山として日本で受け入れられてきた。特に江戸時代には霊山富士山信仰が盛んとなり、富士山はそれ自身が御神体として特別な意味を持つようになった。〔図6-21〕

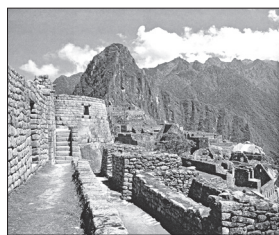
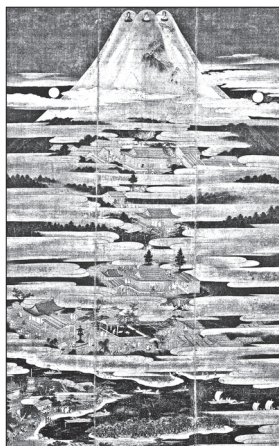
江戸の街には富士講と呼ばれる組織が幾つも作られ、集団で富士登山をするこ

図6-20 マチュ・ピチュ、ペルー、15世紀頃（右）

急斜面に構築された空中都市はインカ帝国の遺構である。スペインの脅威から逃れるためのものであったかもしれない。しかしコンドルを「太陽の使者」として崇めた人々が、太陽を求め山岳の上に造りあげた都市とも考えられないだろうか。

図6-21 富士山曼陀羅図、狩野元信、室町時代末期（左）

平安時代になり山岳宗教である修験道が発展すると、富士山は霊山として信仰の対象となった。こうして富士山は、須弥山思想を継承し古代インド思想と神道が一体となった象徴として、富士山自身が曼陀羅という宇宙図として描かれた。



とが江戸時代に変流行した。お揃いの法被を着て富士山頂を目指した。富士山はそれ自体が御神体である。富士山に登ることは江戸の人々にとって憧れのまゝであった。それでも富士山への参拝ができない老人や女性や子供のために、江戸の街には数多くの富士塚が造られた。これはミニチュアの富士山である。高さは平均でも3メートルぐらいにすぎない。富士塚では、必ず富士山の本物の溶岩を使うことにより、その霊性が保持された。現在の東京にも、百を超える富士塚が都市の喧騒のなかに埋れるように佇んでいる。〔図6-22〕

江戸は一つの宇宙の体系である富士山を崇め、その富士山のミニチュアを無数に内包している世界観に基づく都市文化を持っていたのである。



図6-22 砂町の富士塚

江戸時代に百を超える富士塚が造られ富士山信仰が流行した。江戸は一つの宇宙を地上に写し出した都市となった。

第七章 曼陀羅

——インドのヒンズー教の宗教都市——

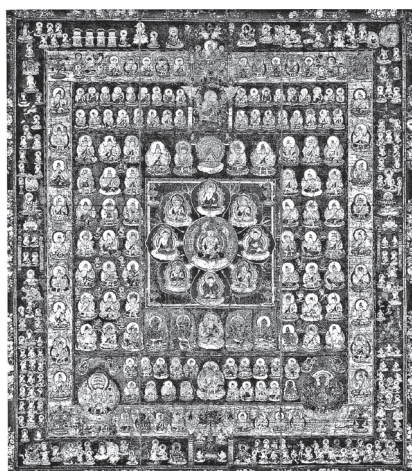
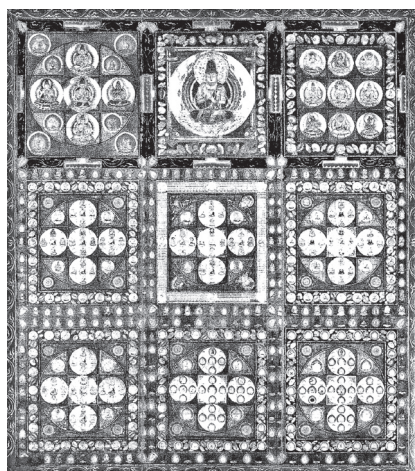


図7-1 両界曼陀羅図 京都東寺蔵 平安時代 9世紀

日本に曼陀羅を初めて伝えたのは空海である。それは八〇六年のことであった。中国で恵果阿闍梨けいかあじりから密教を習得した空海は、その教えを日本の人々に理解できるように伝えるにはどうのようにしたらよいのか考えた。それには文字ではなく図像で表現することが必要であると思い至った。空海は中国で数点の曼陀羅図を制作させて、日本へと持ち帰った。そのうち二点が、『大日経』に基づいた胎藏界曼陀羅と、『金剛頂経』に基づいた金剛界曼陀羅であった。空海の真言宗の密教の教えは両界曼陀羅図のなかに表現されている。

胎藏界曼陀羅図には悟りの世界が描かれている。中央に中台八葉院が描かれている。その中心には、大日如来がいる。それを同心円状に如来や菩薩を取り囲み、一番外側を、金剛部院が囲んでいる。全ては大日如来から生まれ、大日如来の智慧は曼陀羅図の内側から外側へと向かう。〔図7-1(右)〕

金剛界曼陀羅図には、智慧の世界が描かれている。全体が格子状に九会に分節されている。その中央の成身会という枠の中央に大日如来がおり、その回りを菩薩たちが取り囲んでいる。大日如来の智慧は、内から外へ、外から内へと絶え間なく動き続け人々の救済を未来永劫繰り返している。〔図7-1(左)〕

両界曼陀羅図とは以上のように、『大日経』と『金剛頂経』に基づいた空海の真言宗密教が説く宇宙の概念が表現されたものである。

1. 円天地方の世界観

空海の曼陀羅の世界観では、宇宙の森羅万象は大日如来なしには成り立たない。『大日経』は7世紀に南西インドで成立した。それが中国へと伝わり両界曼陀羅として整えられた。このマンダラという言葉はインドのサンスクリット語から生まれたものである。インド最古のバラモン聖典である『リグ・ヴェーダ』が出自とされている。こうして生み出された一元論的宇宙観を背景とした哲学原理が、曼陀羅という図像をとおして世界観を決定付けている。

曼陀羅図において特徴的なのは、円と正方形という図像である。円という図像は、世界の洋を問わず、太古から完結した世界観を表象している。そして世界は光により象徴的に解釈されているのが特徴的だ。プラトンの善のアイデアに始まり、キリスト教では聖人の肖像の頭部には必ず円形の光輪が描かれている。仏教では光明といって、同じように頭部の背後に光を意味する円盤を仏像に配置するのが常である。曼陀羅とは本来の意味は円あるいは輪あるいは球体を意味していた。そして曼陀羅図では、大日如来の周囲を、三重の輪が取り囲んでいる。内側から蓮花輪、金剛杵輪、火焰輪である。その外側には無限の虚空が広がっている。

(眞鍋俊照『曼陀羅美の世界』人文書院) 図7-2

では正方形という図像は、何を意味しているのであろうか。それは四つの門を持つ大伽藍を表しているようだ。それは須弥山の頂きの上にある正方形の広場を示しているのであろう。ここは諸天が住む空居天となっており、その中央には、



図7-2 チベットの胎藏界曼陀羅図
アジアにおける森羅万象を表現したのは曼陀羅である。それはそのまま都市や建築のメタファーとして援用された。

帝釈天が住む殊勝殿があると考えられている。

時代や宗教によっても異なるが、共通していえることは円形の要素は森羅万象の世界に、それに対して正方形の要素は城廓などの地上の世界に由来しているようなのである。例えば興味深いのはアフガニスタンのバミヤンの仏教窟である。ここでは石窟の床面が正方形で、天井がドーム状になっていることが知られている。あるいは五輪塔では方形は地を意味していた。円は宇宙を、方形は大地あるいは大地に人間が構築した世界を意味している。

中国では「円天地方」という世界観がある。円は北極を頂点とする宇宙としての円蓋が、大地を覆っていることを象徴している。大地には東西南北を合わせて方形の壇状ピラミッドの都市が建設される。そのピラミッドの中心を垂直に貫いている軸は、同時に宇宙を貫いている宇宙軸に重なっている。この宇宙軸により、天と地は一つの世界へと統合されている。〔図7-3〕これは始皇帝の墓陵そのものである。始皇帝は神そのものであった。

2. マンダラの建築理論

インドには『ヴァーストウ・シャーストラ（居住空間の理論書）』という建築の設計理念を説いた本が存在している。中国にも『守礼』、日本では『木割書』という伝統的な建築の理論書が存在する。しかしインドでは、建築の設計理念の背後には、曼陀羅という概念で貫かれていることが特徴的だ。



図7-4 ヴァースト・プルシャ・マンダラ
インドでは建築から都市まで、身体を媒体にして宇宙の中に統合されている。この理論は都市も包括する。

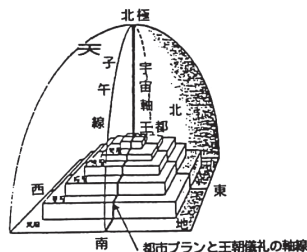


図7-3 「円天地方」の世界観
円形と方形は陰と陽で世界の両極をなしている。それぞれが、完全なる世界観を形成している。円天地方とは神の世界と人間の世界の統合である。両世界を宇宙の軸が貫いている。

この曼陀羅とは「ヴァースト・プルシャ・マンダラ」と言われている。これは頭を東北にして、両手両足を伸ばしてうつ伏せになった男性（プルシャ）の上にグリッドを描き、それぞれの区画の上に神々を呼び出して配置するというものである。〔図7-4〕このグリッドこそ曼陀羅であり、宇宙という世界観を表象している。その宇宙に身体が重ね合わされているところがインドの世界観の特徴である。この宇宙を表象する曼陀羅に填め込まれた人物を「ヴァースト・プルシャ」という。グリッドに分割された身体を、それぞれの部分に乗った神々が、暴れないように押さえつけて鎮めていると考えられている。これはそのままグリッドに基づいて建てられた建築物を、神々が守護してくれていることを意味している。

〔図7-5〕

設計する場合に注意すべきことは、この「ヴァースト・プルシャ」の急所を、注意深く回避することである。人体の中には百七の急所があると考えられている。急所が、柱などによって傷付けられると、それと同時に施主の身体と同じ個所が痛むと考えられている。大地に横たわる「プルシャ」の身体と施主の身体は同置されているのだ。それは曼陀羅をとおして、身体が宇宙と結び付けられていることを意味する。こうして完成した建築は「成人したプルシャ」として考えられた（小倉泰「インドの地図と人体」『S』第68号、ポラ文化研究所）〔図7-6〕

インドの建築理論である『ヴァーストウ・シャーストラ』は民家や寺院のほかに、村落や都市の設計についても記している。民家から都市までインドでは人間



図7-6 描かれたヴァースト・プルシャ・マンダラ

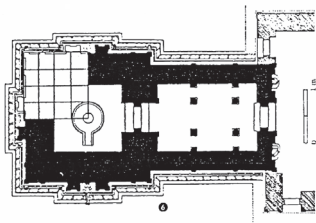


図7-5 建築の平面図と曼陀羅
ヴァースト・プルシャ・マンダラを建築の各部分に当てはめ、急所を回避しながら設計していく。小さな部分から全体まで、この理論が貫徹される。

にとつて意味のある空間はすべて人体と結び付けられて、曼陀羅の宇宙の中へと統合されているのである。それは宇宙全体を擬人化した、曼陀羅の一つである「巨人世界（ローカ・プルシャ）」においても同様に、宇宙が身体と結び付けられて表現されている。この曼陀羅はジャイナ経の三界の宇宙を表したものである。「ローカ・プルシャ」という巨人では、お腹から上が天界を意味し、くびれた腰あたりに須弥山と大海が同心円状に囲む中央世界が描かれている。腰から下には地下世界の断面が描かれている。〔図7-7〕

インドの二つの曼陀羅は、それぞれ解釈の仕方が異なるが、世界を統一された宇宙として捉え、身体と重ねて解釈しているという意味では変わりはない。その大宇宙の中に幾重にも組み込まれた最小の宇宙の単位こそが身体となっている。個々の人間も、個々の建築も、そして全ての都市にも宇宙が内在され、曼陀羅という世界観をとおして大宇宙へと統合されているのである。

3. 曼陀羅都市ジャイプール

インドのラージャスタン州の州都ジャイプールは政治と交易の中心都市である。別名ピンク・シティと呼ばれていることでも有名である。なぜそのような呼ばれているのかといえば、この街の主な宮殿がピンクがかった赤砂岩で造られていることによる。この都市が設計されたのは一七二七年のことである。都市のほぼ全体が完成したのは一八八一年ころである。その特徴は都市空間全体が金剛界

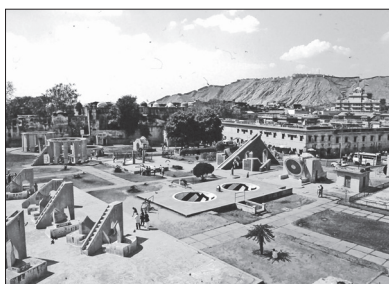


図7-9 ジャンタル・マンタル、ジャイプール、18世紀

王宮には天文時計や天文観測用の建築が構築された。インドのジャイプールという都市は、王宮と宇宙が一体となった求心的空間構造をなしている。

図7-7 ローカ・プルシャ
18世紀
インド北部のラージャスタン地方で描かれたローカ・プルシャ。三界の宇宙が身体の中に統合されて描かれている。腹の部分にメール山がある。



曼陀羅図と同じ構成となっていることだ。[図7-8]

しかし現在のジャイプールの都市は完全な方形をなしてはいない。基本設計では金剛界曼陀羅と同じように、格子状に九つの区画から構成されていた。しかし北東の一区画が、ナハルガ城砦のある山にぶつかり、欠けてしまっている。その欠けた一区画を北西へと付け直している。また中央の二区画は連続させて、そこに王宮が建設された。王宮には「タルカトラ」と呼ばれる人工の池がつくられている。そして王宮の庭には「ジャンタル・マンタル」と呼ばれる天文台と日時計などの天体観測建築物が造られている。インドの諸都市の中でも、ジャイプールほど立派な天体観測建築物が建てられた都市はない。すなわちジャイプールでは都市の中心部に、王宮と宇宙が一体となった空間が造られた。そして王宮を中心として、ジャイプールという都市は、曼陀羅状の求心的構造をなしていることが理解できるであろう。このジャイプールという都市は星辰と一体となった宇宙そのもののものだ。それは王が神と同一視されていることを暗示している。[図7-9]

ジャイプールの都市は、全体で3キロメートル四方の曼陀羅で構想されていた。そして格子状に九つへと区画されている。その一边は、おおそ七八〇メートル四方の大きな街区を構成している。ここには宮殿や寺院そして住居が立ち並び、表通りは大バザールを構成する。道路は、骨格をなす大通りが幅17メートルほどあり、それから街区はさらに格子状に細分化されていく。街路の幅は9メートル、5メートルと段階的に狭くなり住宅街を形成している。

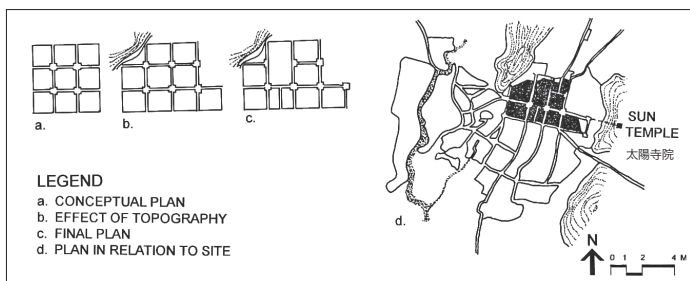


図7-8 ジャイプールの都市構造、インド、18世紀

インドのラージャスターン州都ジャイプールは、格子上のグリッドで都市の骨格が曼陀羅をもとに構築されている。山で欠損した区画を移し、中央部2区画は王宮として連続させている。都市の方角は、東側にある太陽寺院に合わせて15°ほど時計回りに回転してずらされている。

この曼陀羅を構成する街路方向は、じつは東西方向に対して15度ほど回転してずれている。なぜなのであろうか。その理由は、軸線が太陽寺院と呼ばれるスラージ寺院に向かうためであると考えられている。すなわち王宮に造られたジャンタル・マンタルばかりではなく、都市全体もまた天文学的な位置付けがおこなわれていることが判明した。このジャイプールという都市が星辰都市として意味付けられている。このジャイプールという都市は国王の「宇宙を孕む夢」を実現させた星辰都市として特異な曼陀羅都市となったのだ。(布野修司『曼陀羅都市』京都大学学術出版会)

4. 曼陀羅都市シュリランガム

インド大陸は広大であり南北三〇〇〇キロメートルにも及ぶ。このために北部と南部では全く異なった言語や文化を持つているといっても過言ではないであろう。北インドのガンジス川は有名であるが、南インドにおいて、それに相当する聖なる川とはカーヴェリー川である。このことはあまり日本ではよく知られていない。このカーヴェリー川の周辺には、インド全国から巡礼者たちが訪れる数多くの寺院が建立されている。それぞれの寺院が建つ都市は、宇宙を地上へ投影した空間を内包している。南インドとは聖なる曼陀羅都市の宝庫なのである。

このカーヴェリー川の中洲に建立されたランガナータ寺院はインドでも最大の規模を誇る寺院都市の一つである。[図7-10]その特徴は幾つか指摘できるのであ

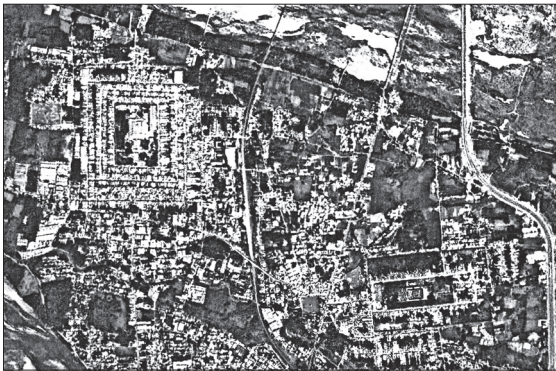


図7-10 カーヴェリー川とシュリランガム
胎蔵界曼陀羅の同心円型都市構造をもつ南インドのシュリランガムの街にあるランガナータ寺院は、七重の周壁にかこまれている。東にもう一つ見える寺院はジャンブケーシュワラ寺院である。まだ周壁が二重だけしかできていない。

ろう。まず最初に、南インドでは街自体が寺院であるということだ。すなわち街が先に造られて、そこに寺院を建てたのではない。南インドではまず寺院が建立されて、その信者たちが周囲に住み着いて、核となる寺院を中心として曼荼羅状に取り囲むようにして街が成長してきたのである。結果として、都市の中心部に寺院が位置するような宗教都市が生まれることになったのだ。そうした意味で街全体が寺院の境内であるといえるであろう。事実、街の中心部では靴をぬがされ裸足で歩かなくてはならない。二つ目の特徴は、北インドのジャイプールとは異なり、南インドの曼陀羅都市では、同心円状の胎蔵界曼陀羅の空間構成が引用されていることを指摘できるであろう。特にランガナータ寺院では、それが七重の周壁にかこまれており、これに比肩するような大規模な寺院はインドにはないといわれている。〔図7-11〕さらに南インドの曼陀羅都市を独自のものとしている特徴とは、塔門（ゴープラ）という建築様式である。寺院の中心で核となる本殿は低い建造物であるが、それを取り囲む周壁の四方に設けられた四つの門は最大70メートルの高さを誇る高層建築物となっているのである。その壁面はおびただしい数の神像、女神像、動物や伝説上の人物などで、下から上まで覆われている。その彫像の奔放さや装飾性、さらに溢れるような色彩の乱舞に思わず息を飲む。温暖な南インドに特徴的なドラヴィダ様式の建築には生気が漲っている。

このゴープラという高層建築が、南インドの宗教都市ならではの独特な都市のランドスケープを作り出しているといえるであろう。そうした意味ではティルヴ

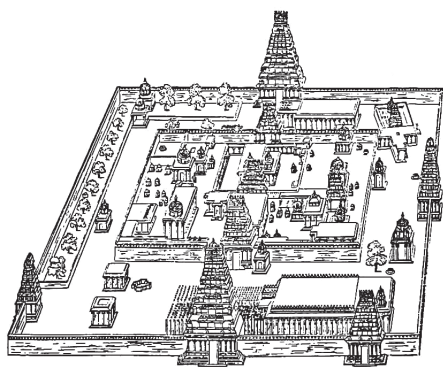


図7-12 ティルヴァルールのティアガラージャ寺院
ゴープラと呼ばれる塔門から内部は境内であり靴を脱いで裸足で入る。神聖な場所である。塔門は聖と俗の境界域を示す建築である。

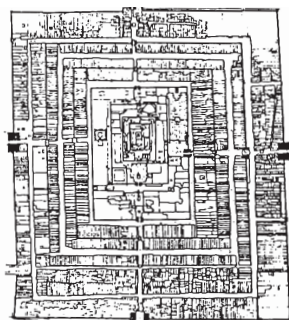


図7-11 シュリランガムのランガナータ寺院の平面図
壁と道路が中央の寺院を七重に取り囲んでおり、全体で胎蔵界曼陀羅の空間構造をもつ。中心部の寺院には信者しか入れない。

アルールのティアガラージャ寺院は、ドラヴィダ様式の寺院建築の典型の一つであるが、その三重に取り囲む周壁には巨大な八本のゴープラが建つ。[図7-12] それはまさに神々が棲む小宇宙としての星辰都市の空間そのものといえるだろう。同心円状の宇宙を水平に構成している南インドの宗教都市では、そのゴープラが天を目指すように垂直に聳え建ち、立体的な宇宙を構成している。

踊るシヴァ神を祀った寺院のある、チダムバラムという都市もまた、南インド独特の曼陀羅都市の好例の一つであるといえるであろう。この街の中心部にあるナタラージャ寺院は、春になると大きな山車を引いて街を巡るお祭りがあることで有名である。人口6万人の小さな街ではあるが、巨大な四つのゴープラを持つ寺院を中心に、同心円状に街が形成された典型的な曼陀羅都市であることが分かる。[図7-13]

しかし山車を引く祭でもっとも有名な宗教都市はマドライである。この曼陀羅都市の中心部にはミーナクーシ寺院があり、聳びえ建つ巨大なゴープラに囲まれている。ここは南インドでも屈指の巡礼地であり、ここに勝るものはないであろう。このドラヴィダ様式のヒンズー教の寺院には、毎日1万人を越える巡礼者がインド各地から訪れている。南インド最大の巡礼地なのである。[図7-14] なぜマドライ(蜜のように甘美な街)と名付けられたのか理解できるようだ。春のお祭りでは、二週間にわたり神を崇め祝う。最高潮に達したとき、南インド特有の山車が登場する。これがお祭りの最大の催しである。シヴァ神とミーナクーシ神

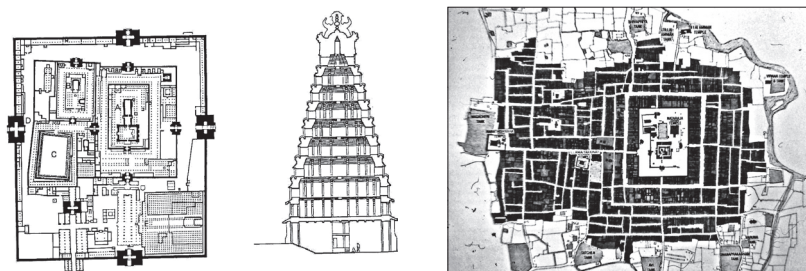


図7-13 チダムバラムのナタラージャ寺院 (右)

この小さな都市では、寺院に表象された宗教世界が、生活と不可分の都市空間を形成している。

図7-14 マドライのミーナクーシ寺院 (中) (左)

南インド最大のこの寺院はインド人が一度でも訪れたい場所である。同心円状の街区からは、この街も曼陀羅で構成された宇宙を映していることが理解できる。また塔門(ゴープラ)は天に届くような高さを誇り、南インドの都市のランドスケープを決定付けている。

の結婚を祝うために、巨大な山車が両神像を乗せて、マドライの曼陀羅都市の街を練り歩いていく。〔図7-15〕

この山車は広く東アジアに認められる。そしてそれは日本にまで伝播し、京都や高山の祭りの山車に認められる。（齊木崇人・杉浦康平『靈獣が運ぶアジアの山車』工作舎）

ヒンズー教の寺院では、祭礼が周期的におこなわれている。それは毎日、毎月、毎年おこなわれるものに分けられている。数多くの祭が日常生活を支配しているのだ。なかでも毎年おこなわれる大規模な祭礼とは、神々の神話が都市のなかへ降臨するという意味を持っている。このときに使われる山車は木造であり、高さは15メートルを越える。山車の巡礼路が決められている。右回りに曼陀羅の都市空間を一周できるように、幅広い通りが必ず都市には設けられている。

こうして曼陀羅都市マドライでは、その都市構造ばかりではなく寺院の空間構造もまた、宇宙の世界が地上に投影されたものであるという意味でも、星辰都市なのである。すなわちそれは周期的におこなわれる祭礼において、人々は神々との交歓をとおして、宇宙と一体となる。その舞台としての曼陀羅都市とはまさに祝祭都市であり、神儀により実質的に生命を吹き込まれ、生きられた都市として初めて実体化され、宗教都市として完結するのである。この祝祭都市で人々が生きるということは、神の世界を生きていることを意味し、そのために都市は大宇宙そのものとしての星辰都市でなければならないのである。

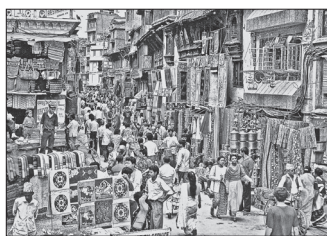


図7-16 カトマンズのバザールの通り
バザールは地元の人々にとっても重要な通りとなっている。この通りを歩いていくと曼陀羅の世界を体感できる。

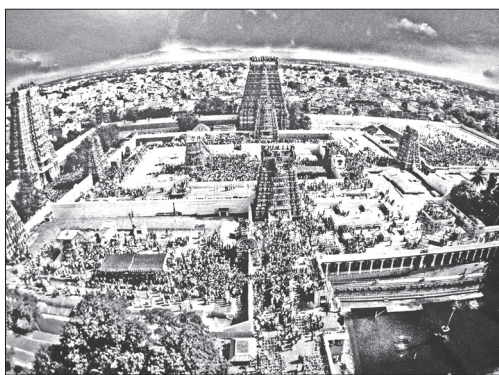


図7-15 ミーナクシー寺院の祭礼
塔門から撮影された境内には溢れるような信者で埋め尽くされている。ここは疑う余地のない信仰の世界であり、神との交歓がおこなわれる神聖な場所である。

5. 曼陀羅都市カトマンズ

ヒマラヤ山脈の山々に抱かれたネパールの首都カトマンズは世界の屋根の下で独特のネパール文化が育まれた都市である。このカトマンズの盆地ではヒンズー教と仏教が混濁し、ネワール族による独自の宗教世界が醸造され、魅力的な都市文化が栄えた。

カトマンズの伝説では都市の誕生は次のように言い伝えられている。巨大な湖であった盆地に、黄金の大蓮華が咲き誇っていた。ここを訪れた文殊菩薩は天啓を授かり、湖を囲む山の一角を剣で打ち砕き、湖水を抜いた結果、肥沃な土壌に覆われた盆地が現れたとされている。

カトマンズという都市は、インドからチベットへと至る交易路の要衝として、あるいはヒマラヤと低地のジャングル地帯の中間地点の都市として繁栄してきた歴史を持つ。現在バザールとなつている華やかな道こそ、古来から交易に使われていた街道そのものである。ここを通じてインドやネパールの農産物がチベットへ運ばれ、チベットの羊毛や岩塩がネパールやインドへと運ばれた。紀元数世紀ころからカトマンズは行き交う人と物と情報により、潤い栄えた。〔図7-16〕

このバザールの南端にはダーバー広場と呼ばれているところがある。そこを中心として王宮の建物が建ち並んでいる。14世紀から17世紀にいたるマッラ朝時代に造られた王宮には、その後建てられたものも含めて二〇以上の寺院や僧侶の館がある。そのなかには有名なクマリという聖少女が住むクマリ・チョクもある。

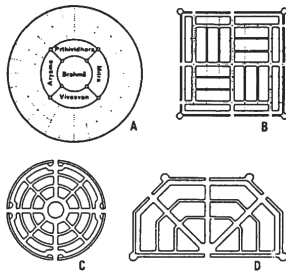


図7-17 カトマンズの市街地図(右)
古来の交易路である、斜めに走るバザールの通りと、格子状の曼陀羅の都市構造が重合されて構成されていることが一目瞭然である。

図7-18 都市の宇宙モデル「マナサラ」(左)
マナサラとは曼陀羅を意味する。マナサラの都市は世界観を内包する。



このマツラ朝時代に生み出された、ネパール様式ともいわれる建築群が、現在のカトマンズの都市のランドスケープを決定付けている。すなわち赤い煉瓦をそのまま露出させた壁や、繊細緻密な彫刻が施された木造の柱や窓枠といったものが、ネパール建築を特徴付けている。

そしてこの王宮の南側にはバグマティ川が流れている。この川はインドの聖なるガンジス川の支流の一つであり、その聖なる水はベンガル湾へと注いでいる。バグマティ川上流のバシユパティナートの街では、現在も死体が火葬に附されている。ネパールの聖なる川である。

このカトマンズの都市の輪郭は、現在ではスプロールしてしまい、その外郭は明瞭ではない。しかしよく見るとその中心部には格子状の街区が認められる。これはほぼ東西南北の方角にならっている。おおよそ一六〇〇メートル四方の外郭を持ち、それが九つの街区に分節されているのが分かる。その対角線を成すかのように、バザールである旧交易路が南西から北東へと斜めに走る。直交する曼陀羅状の街区と、けもの道として生まれた斜めのバザールが交錯し、その結果カトマンズでは豊かな都市空間が生み出された。カトマンズもまた代表的な曼陀羅都市の一つなのである。それは金剛界曼陀羅を踏襲している。〔図7-17〕

インドでは理論書『ヴァーストウ・シャーストラ』が住宅から都市までを貫く宇宙モデルを形成していた。そしておなじようにネパールでも都市ばかりでなく建築の空間構成においても、曼陀羅の空間構造がみとめられているのだ。これは

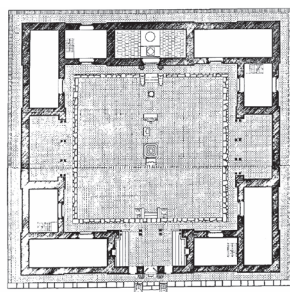


図7-20 ネパールの寺院の平面図 (左)

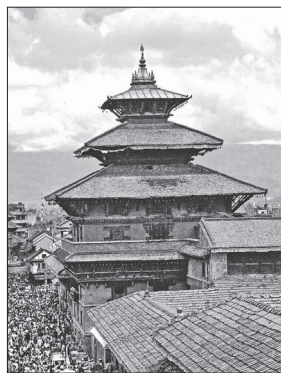


図7-19 ネパールの寺院の外観 (右)

「マナサラ」と呼ばれている。〔図7-18〕

都市が宇宙と照応しているように、ネパールでは寺院建築もまたヒンズー教のシヴァ神を祀る小さな宇宙を写した星辰建築なのである。その平面図をみるならば一目瞭然である。正方形の曼陀羅をなしていることがわかる。〔図7-19、20〕

それは住宅においても、認めることができるであろう。伝統的なネワール族の住宅では、その平面図は寺院と同じように、曼陀羅の正方形をなしている。その中央にはシヴァ神が祀られている。〔図7-21、22〕

興味深いことは、住宅の1階は生活の場ではないことである。ネパールの人々の生活の中心は最上階、すなわち神にもっとも近い場所で営まれているのだ。そこは食事をして眠る生活の中心となる場である。それは同時に女性と子供の空間であるといえるであろう。1階は都市との接点であり、男の空間となっている。

（山本理顕「閼論2」『住居集合論4、インド・ネパール集落の構造論的考察』SD別冊第10号、鹿島出版会）

このようにインドやネパールにおいては、曼陀羅という概念が、都市から寺院そして住宅からさらに身体にまで貫かれていることがわかるであろう。それは同時に、神の住む空間と人間が住む空間が、大宇宙と小宇宙として重合していることを意味する。全ての空間に、生活に、時間に、神が宿っているのだ。インドやネパールの人々は、曼陀羅という完璧な星辰都市のなかで、神とともに、至福の生活を営んでいるのである。

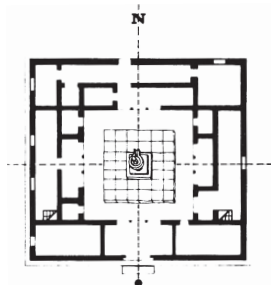


図7-22 ネパールの住宅の平面図
住宅では中央に祀られたシヴァ神が核となって、曼陀羅状に空間が構成されている。

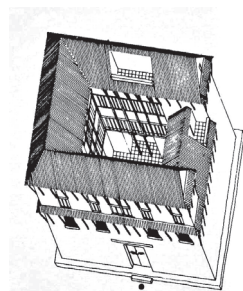


図7-21 ネパールの住宅の概観図

第八章 星辰都市論

——「形像の歴史」から「観念の歴史」へ——

Integræ Naturæ Speculum, Artisq; imago

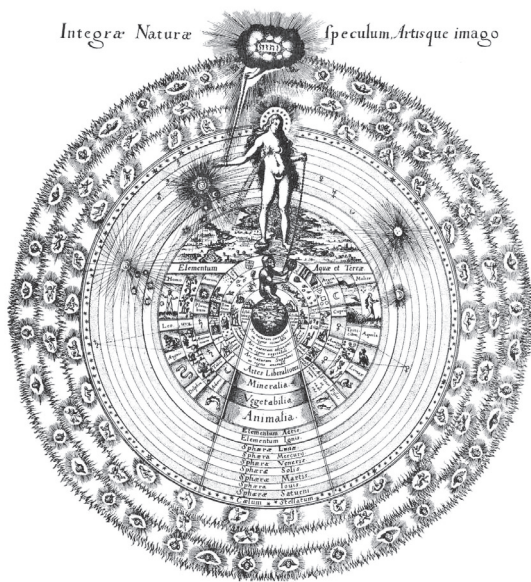


図8―1 『兩宇宙誌』 ロバート・フラッド 一六一七年

ヨーロッパではルネサンス後期になると新プラトン主義と占星術がキリスト教の世界観と融合され、新たな宇宙像が構築されるようになった。このロバート・フラッドが描いた世界観もその一つである。ここでは三つの世界観が同心円状に融合されている。

中心部にはギリシャの哲学者アリストテレスの提唱した四元素からなる地球の姿が描かれている。その脇には鉱物界、植物界、動物界に囲まれた猿のような人間が描かれている。地球の外側にはブトレマイオスが構想した天動説の宇宙を取り囲んでいる。すなわち七つの諸惑星からなる天球層である。すでにガリレオやケプラーによる地動説が説かれていた時代ではあるが、ローマ・カトリック教会は、天動説を主張していた時代である。このために天球層には月と太陽が含まれていることが判るであろう。さらにその外側を構成しているのは恒星天である。ここには占星術としての黄道十二宮である星座が割り振られている。そしてさらにその外側を囲むのは天使がいる天球層である。すなわち天使天の三位界に囲まれている。地球を含めたこの円環状に構成された宇宙は、全て天使の摂理により支配されている。さらにその外側に神の世界があるのだ。この図では世界なる母が唯一神の意思を明示して地上の人々に伝達している。

1. 都市という名の宇宙

現代社会において我々が都市について考えてみようとする政治、経済、物流、人口密度、歴史と文化など、多くの側面から語ることが可能である。どれもが誤りではない。だからといって、それによって都市の全てを語れるのかといえば、素直に首肯することにためらいを感じるのも、素直な気持ちである。なぜならば都市というのが、数量や合理でのみ解釈できるものではないと考えているからである。いや都市自体はそもそも表象でしか語れないものなのであり、実態として把握することは本来できるはずもないからである。もしそれを試みても、数値や物質へと還元すればするほど、都市に内包されていた様々な要素が捨象されてしまい、結果として都市の本質から遠のいてしまうように思われるからである。

都市の歴史とは、人類の文明の歴史そのものといえるであろう。ヨーロッパを中心として考えてみれば、13世紀ころに都市が成立したといわれている。しかし紀元前にもエジプト文明やメソポタミア文明でも、都市が構築されてきた事実を考えてみるだけでも、西欧の観点からだけでは都市を語るのは必ずしも十分ではないことは分かるであろう。

どの時代どの地域どの大陸であるにせよ、最初に造られた都市には、その都市を統率する一人の権力者がいる。そして否定できないのは、その権力者は、常に宗教的な背景のもとで権威が保証されていたことである。アフリカの様々な民族においても、また中南米のアステカ文明やマヤ文明においても、さらにアジアや

オセアニアにおいても、そこには宗教あるいは、それに代わるような役割を果たした神話の世界や伝説の世界が、現実の都市と結び付けられて一つの精神世界として都市が形成されていたのである。

こうした仮説に基づくならば、初期のどの都市にも宗教や神話などの世界観や精神世界が反映されていたと考えられるのではないだろうか。もちろん建築物として神殿や寺院あるいは宮殿や城郭として宗教や神話が象徴的に顕現していたり、神具や聖なる文書や様々な神にまつわる伝説の諸物などにより宗教や神話が象徴されている場合もあるであろう。さらに神儀や祭礼や様々な儀式、あるいは階級や名称や組織などの無形の文化のなかに、その世界観が表現されて都市の背景を支えている場合もあるであろう。そうしたものが複合したものとして都市生活があった。ヨーロッパではキリスト教という絶大な精神世界が認められている。

しかし本書で問いたいのは都市空間である。本書は序章で述べたとおり、新しい都市の記述として地勢から語ることを目論みたものだ。そして時間軸にとらわれた歴史的な記述への物足りなさに対して、空間を対峙させ、時間から脱却するためにはどのような手法で歴史を語ることが可能か、試みることが本書の目的の一つであった。しかし結果として、時間から空間へ軸を移すことにより、様々な世界観が浮上してきた。それがキリスト教であり、イスラム教であり、ヒンズー教であり、水の神ナーガであり、龍のエネルギーによる風水であり、初源的な都市空間には多様な世界観が認められるという結果が導き出された。様々な都市を

検証することにより、都市というものは、精神世界あるいは宗教といった世界観を象徴する儀礼や形式を受容する空間装置そのものではないかと考えられるようになった。じつはそれは時間を越えて一つの観念として都市を現在にまで貫いている都市の本質的なものではないかとさえ思われてきたのである。

歴史的な過去から未来へと、一方通行に流れる不可逆的な時間の軸ではなく、都市という空間は、時代を越えて過去や未来を垂直に精神世界の軸により、貫ぬかれていますと考えられる。数多くの都市について調べる過程で、様々な宗教や神話世界や、様々な民族文化や伝統のなかに受容された精神世界が、様々な地上の地勢に応じて時を越えて都市の中に顕現してくることが判ってきた。都市空間というものは結果として、そのような多様な様態として、精神世界が私達の眼前に顕われるときに、それを受容する空間そのものといえないだろうか。

さらに興味深いことは、このような宗教あるいは神話や伝統的な精神世界が、天上の世界観を、必ず抱擁していることが分かってきたことである。伝説や神話は、太陽や月や惑星や恒星が織り成す天上の神々の物語として解釈され、地上の都市空間へと世界観として取り入れられているのだ。いや理不尽な天変地異を含めて日常の自然現象など、全ては神の仕業として解釈する以外に、いったいどのような方法があつたのであろうか。科学が発展する17世紀以前の時代の人々は、こうした世界観により、自分たちを取り巻く世界を理解し、それが神話や宗教を受容する現世の都市の空間へと反映してきたと思われる。

2. 観念の歴史としての都市空間

こうしたことを踏まえて、具体的にヨーロッパを中心に、ユートピアとして描かれた観念的な都市について俯瞰してみたいと思う。それは明らかにキリスト教や東方の異教を背景としている。しかし机上で構想されたユートピア都市には、それを構想した人物が託した理念が大きく反映されているのが常である。

決して造られることが不可能な理想世界を、なぜ人々は描き続けてきたのであろうか。人々はいったい何をユートピアという都市空間に託してきたのであろうか。カンパネッラの『太陽の都』のように、文字により政治や経済や理念だけで語っても、理想を表現することは十分に可能であつたはずだ。それなのに多くのユートピア都市が、わざわざ図像として描かれている事実は、理想都市の本質を語る場合には、やはり空間が重要な意味を担っていることを示唆している。すなわち空間表現は観念が表象されるときに重要な役割を担っているようだ。

そのような意味で時間軸から離れ、地勢という空間から都市を語りはじめたことは、結果としての外れではなかったのではないだろうか。都市の本質を語る上で、空間から語ろうとしたのは適切な判断であつたのではないかと考えている。

ユートピア都市の多くは、歴史上円環として数多く出現した。円環は都市ばかりでなく、あらゆる信仰の根底に見いだされる特権的かつ象徴的な形像である。

それは恒常性、簡潔さ、完璧さ、普遍性そして持続性の意味を担っている。特にヨーロッパでは、14世紀初頭にダンテの『神曲』が「天界は求心的な円環がその

周辺に配列される一個の中心天という神である」と詠ってから、それ以降のキリスト教の世界観を決定付けた。この円環の世界観は宗教を越えて文学から絵画そして都市にまで広まっていった。それは中世からルネサンスを経て20世紀に至るまで、ヨーロッパ文明において存続していったのである。(ジオルジュ・プーレ『円環の変貌』国文社)

しかしそれはヨーロッパ独自の世界観なのだろうか。いやルネサンスの時代に導入されたギリシャ哲学が源泉であるといえるであろう。アリストテレスが球体に基づく宇宙観を確定した。またプラトンは『ティマイオス』で天のアイデアとしての宇宙を円環として描写している。プラトンの世界観を読み直したプロティノスの新プラトン主義では、宇宙が地球や人間の魂と同様に、球の形像をなしていることを明らかにしている。この世界観が、ルネサンスの時代にヨーロッパ文明と融合した。こうして円環は都市ばかりでなく人間の身体を含めて、全ての理想的な観念を象徴する形像として、時を越えて普遍的に都市を支えていたのである。

(M・H・ニコルソン『円環の破壊』みすず書房)

こうした観念的な世界観の階層構造が、ヨーロッパの精神史を貫いていることを主張して「観念の歴史」という新しい歴史観を提唱したのがラヴジョイである。目に見えない永遠の世界という概念が、ヨーロッパ文化の基底としてあることを彼は指摘している。それは宇宙という不可思議な構造が、理解可能で合理に満ちているという西欧文化の意志の顕現であるというのだ。(アーサー・O・ラヴジ

ヨイ『存在の大きい連鎖』晶文社)

ヨーロッパ大陸あるいはキリスト教文明という枠組のなかでは、理想的な都市は円環という観念が表徴した都市空間として登場してくる。特にヨーロッパ文明では「有り得ない場所」を意味するユートピア都市においては顕著な傾向を示している。

それに対して本書では、東アジアにおいて理想とされた都市の空間が、曼陀羅という観念の表徴した方形の都市空間として、顕現したことを示した。東アジアでは円環状の都市は生まれなかった。西欧キリスト教文明のなかだけで構想したラヴジョイが、もし東アジアの観念の歴史を語ろうとしたならば、どのようなものになっていたのだろうか。

3. 円環のユートピア都市の系譜

ヨーロッパの文明について語る場合には、象徴的な円環という図像は古代から認められてきた。しかしそのもとも根源的な円環のユートピアとはエデンの園であろう。

①エデンの園 ヘリフォードの大聖堂の世界地図の部分 一三〇〇年頃

清教徒革命以前の時代では、天国にはエデンの園があった。それは黄金の壁に囲われて草木に被われ、鳥や動物とともにアダムとイヴが暮らす楽園として描かれた。そもそも楽園を意味するパラダイスは古代ペルシア語を出自とし、本来

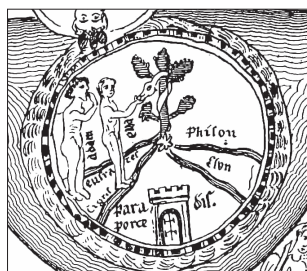


図8-2 エデンの園 ヘリフォードの大聖堂の世界地図の部分、1300年頃
アダムとイヴが暮らしていた閉ざされた楽園には樹木があり、4本の川が流れていた。神が暮らす楽園とは別の場所にエデンの園は位置した。

「円形の塀を巡らした囲い地」を意味していた。

エデンの園は宇宙の円環と照応し、楽園は天の投影されたものとして円環をなしている。ミルトンの『失樂園』では「ついに私を導いて木の茂る山に登らせた。その頂きは平坦で、広い円形をなし、囲われ、美事な木々が植えられ……」と、楽園が円形として描かれている。〔図8-2〕

②アトランティス プラトン『クリティアス』 紀元前4世紀

ユートピア都市の源泉を求めればプラトンの『ティマイオス』と『クリティアス』にたどり着く。紀元前6世紀のピュタゴラス派を受け継いだプラトンは円と球の完全性に基づいて、宇宙を同心球構造で描いた。そして『クリティアス』ではアトランティスの都市を環状壁と同心円状の四重の運河により構成してみた。

〔図8-3〕

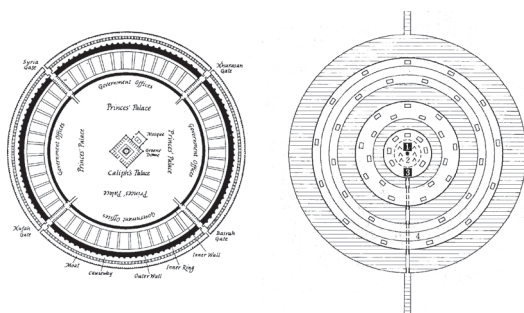
③バグダード 七七六年

ヨーロッパに12世紀ルネサンスをもたらしたのはイスラム教である。その文化が開花したのは、10世紀から12世紀にかけてのアッバース朝である。アラビア・ルネサンスの中心都市はその名も「神の園」を意味するバグダードである。

この都市は七七六年に建造された。つまりユートピアではない。現実の都市である。しかしそれが興味深いのは、都市空間が太陽をモチーフとして完全な円環をなしていることにある。三重の城壁に囲まれた円城の内部には宮殿やモスクが建てられた。〔図8-4〕

図8-3 アトランティス、プラトン、紀元前4世紀(右)
完全な同心円の円環状の都市構造を持っている。

図8-4 バグダード、776年(左)
メソポタミア文明の中心都市であるバグダードという都市の名称は「神の園」を意味しており、完全な円形をなす。それは都市が太陽をモチーフとしているからである。



④エルサレム ハルトマン・シェーデル『世界の記録』一四九三年

清教徒革命以前の時代では天国には神がいる光の領域があつた。それはエデンの園とは対比的に描かれているのが常であつた。それは形而上的な天国であり、聖人や天使や使徒たちがおり、神を黙想していた。ヨハネの黙示録では、神の住む都市である天上のエルサレムに関する記述がある。それによると「都は方形をしていて、その長さは幅と同じであつた」と記されている。しかし一四九三年にハルトマン・シェーデルが著した『世界の記録』に掲載されたエルサレムの理想都市では異なっている。それはヨハネの黙示録の記述とは異なり、三重の城壁に囲まれた円環の都市の姿となっていた。〔図8-5〕

⑤チテラ島の都市 コロンナ『ポリフィリスの狂恋夢』一四九九年

一四九九年にドミニコ会の修道士のコロンナ (Francesco Colonna 一四三三～一五二九) が著した『ポリフィリスの狂恋夢』では、キュービッドの船で訪れたチテラ島の島にある円環の都市が描かれている。同心円状に生垣で壁が構成された円形の島の円環状の都市の中心部には、円形劇場が建てられていた。〔図8-6〕

⑥学智の寺院 アントン・フランチェスコ・ドーニ『賢明と狂気の世界』一五五二年

一五五二年にドーニがヴェネツィアで著した『賢明と狂気の世界』には円環の理想都市が登場してくる。ここでは中央にある「学智の寺院」から放射状に延びる都市空間が構想されている。〔図8-7〕



図8-7 学智の寺院の理想都市、アントン・フランチェスコ・ドーニ、1552年
この円環状の都市の中央には、「学智の寺院」が建立された。そこから放射状の構造を内包した円環状の都市が広がる。

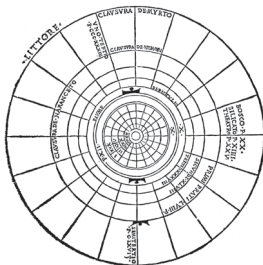


図8-6 チテラ島の都市、フランチェスコ・コロンナ、1499年
ドミニコ会修道士の描いた理想都市は観念的すぎる。中央には劇場が建てられた。このユートピア都市は、隔絶した離島に構想されている。

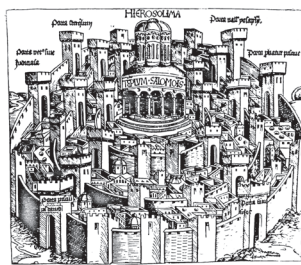


図8-5 エルサレムの理想都市、ハルトマン・シェーデル、1493年
エルサレムはヨハネの黙示録に書かれているように方形が普通である。しかしここで描かれた都市は円環状を成す三重の城壁で囲まれている。

⑦五感の都市 バルトロメオ・デル・ベーネ 一六〇九年

一六〇九年にデル・ベーネが、パリで発表したユートピア都市とは、もともと一五六五年に描かれたものだ。人間の五感を象徴する五本の回廊が中央の宮殿から延びている。伝統的な記憶の劇場の空間構成を踏襲している。〔図8-8〕

⑧衛星都市 ハワード『明日の田園都市』一八九八年

『明日の田園都市』には衛星都市という概念が登場してくる。田園都市は「大都市から適当な距離にあり、農村地帯により分離されている」と規定されている。ハワードの衛星都市のダイアグラムでは中心の大都市（惑星）を六つのガーデン・シティー（衛星）が取り囲んでいる大きな円により示されている。〔図8-9〕このハワードのダイアグラムは非常に観念的なものとなっている。

ハワードの衛星都市のダイアグラムは、地上に天界の世界観を投影したものと考えられる。衛星とは惑星からみれば天界のアイデアそのものといえるかもしれない。大きな円環の中央に小さな円環が同心円状に描かれて、その円環も同心円状の構造をもっている。軌道には、六つの円環の衛星が回転し、それぞれの衛星は同心円状の円環構造を持つている。こうした同心円状の都市構造が階層的連鎖と円環の観念をもとに中世の記憶術や占星術と空間的に結び付けられたものであることはあきらかである。これは中世ヨーロッパで認められてきた円環の形而上学の観念の歴史が、19世紀末において最後に顕現したものといえるであろう。

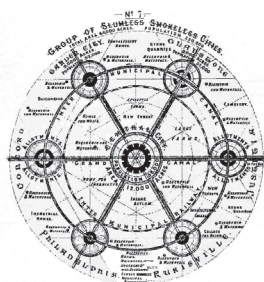


図8-9 田園都市のダイアグラム、ハワード『明日の田園都市』、1898年
ハワードは、都市と田舎の結婚により田園都市という新しい都市を構想した。それは世界へと広まった。しかしその背景となる世界観は伝わらなかった。



図8-8 五感の都市、バルトロメオ・デル・ベーネ、1609年
円形の都市の中心から放射状に回廊が延びている。求心的な空間構造を持つ。

4. 星辰都市

都市が人間の住むための機械から、経済活動という名の欲望を満たす空間装置となつて久しい。しかし日本では幾つもの大震災を経て、最近では都市が防災を中心的課題として見直され始めている。人々は災害が来るのを待ち望んでいるという逆説的な都市社会が生まれつつある。

しかし都市とはそのような実利的なものでよいのであろうか。ただ生活を営む手段としての場にすぎなかったのであろうか。では逆に、現代の都市から奪われたものは何なのであろうか。本書を通して判つてきたのは、世界観であり精神性であり生き生きとした人々の生活である。しかし周囲を見渡してみると、現代の都市生活において、それを支えてきた宗教や神話や伝統の持つ力が希薄な時代となつてきたようである。もはや世界観を支えるような精神性は崩壊寸前なのだ。だからといってそれを否定して都市を生きていくことは、人間自身の生きるということ自体の否定につながるのではないのだろうか。

少なくとも過去に創り出された都市のなかには、こうした精神性をもとにして構築されたであろうと思われる都市が、少なからず存在する。事実その都市を訪れて、現代都市にはすでに失われてしまった世界観の存在を体感すると、その重要性に気付かされるのである。今こそ18世紀に生まれた啓蒙主義や近代の亡霊から脱却して、近代社会を決定付けているといわれる機能主義や合理主義といった当り前と考えられていることを問い直し、もう一度都市のあり方を精神的な視座

から見直すことは無意味なことではないだろう。本書をとおして一つの精神世界として天上の理想とされた神の世界は、結果として星辰が地上へ投影された都市という、もう一つの都市の姿を浮上させた。そのために本書は「星辰都市論」と命名されたのである。

本書を書き終えて、あらためて読み通してみると、これからの都市の有り方を考えるうえで、もう一つ別の選択肢としての可能性を示唆することができたのではないかと考えている。

東京造形大学研究報 別冊12

星辰都市論―東京造形大学キャンパスの小宇宙

発行日 二〇一八年三月三十一日 第一刷

著者 長谷川 章

発行 東京造形大学

1920992 東京都八王子市宇津貫町 1556 Tel. 042-637-8111 Fax 042-637-8110
URL. <http://www.zokei.ac.jp>

制作・印刷・製本／隼風人社